秋　田　市

上新城中学校遺跡

林道工事・小グランド造成に伴う
緊　急　発　掘　調　査　報　告　書

1980. 3

秋田市産業部
秋田市教育委員会

序

上新城地区は秋田市における埋蔵文化財の密集地の一つで重要な地域であります。

この度、上新城中学校の西側に林道、北側に小グランド造成に伴う発掘調査を実施し、縄文時代晩期の墓が多数発見されました。縄文時代の葬制については学会でも注目されているところであり、今回、多大の成果をあげることができました。これもひとえに地元関係者の御協力によるものと感謝いたしております。

報告書の発刊にあたりまして、本書が広く文化財保護啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

昭和55年３月

秋田市教育長　佐　藤　博　之

例　　言

1．本書は、秋田市上新城五十丁字小林に所在する上新城中学校遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査主体は、A地区秋田市林務課、B地区秋田市教育委員会であり、調査員は秋田市社会教育課　菅原俊行である。

3．報告書作成にあたって、秋田城跡発掘調査事務所の佐々木栄孝所長、小松正夫、石郷岡誠一、日野　久、安田忠市、西谷　隆、西鳥羽礼子の協力を得て、菅原俊行が執筆、編集をした。

4．石質の鑑定は、秋田県立博物館の渡部　晟氏に御教示をいただき、土器は、秋田県文化課の富樫泰時氏に御教示をいただいた。

5．Ⅱ章は、「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」（1973・秋田市教育委員会）の遺跡の環境の文章を利用し、調査区層序を付加えた。

6．図版1の航空写真は、上新城中学校保管のものを複写したものである。

7．土坑墓内（実測図）の⊙小玉・⊡勾玉・△石鏃はそれぞれの出土地点である。▒はベニガラ、◯は炭化物の散布範囲を示す。

目　　次

序

例言

Ⅰ　調査に至るまでの経過・調査体制……1

1.林道工事……1

2.小グランド造成工事……1

3.調査体制……1

Ⅱ　遺跡の位置と立地……2

1.遺跡の位置……2

2.遺跡付近の地形……2

3.遺跡付近の地質・土壌……4

Ⅲ　調査の方法と経過……4

1.A地区……4

2.B地区……6

Ⅳ　遺構と遺物……7

1.A地区……7

集石遺構……7

土坑墓……7

土坑……15

出土遺物……16

2.B地区……43

土坑墓……43

出土遺物……72

Ⅴ　まとめ……73

1.遺物について……73

2.遺構について……73

Ⅰ　調査に至るまでの経過・調査体制

1.林道工事

上新城中学校遺跡の西側（一部通学路）に林道を通す計画が決定したのが昭和53年11月の初めであった。市林務課が事業主体であり、この地域は昭和30年の発掘調査の結果、縄文時代晩期の遺跡（「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」1973、秋田市教育委員会）であることが確認され、遺跡破壊を防ぐため林道予定コース変更の協議を重ねたが、地元住民の問題、地形的にも、このコース以外に林道を通す所はないとの判断であった。

そこで緊急発掘調査を実施することとし、調査日程、調査費等の関係で11月24日～27日まで事前に試掘調査（４ｍ×４ｍグリッド）をした結果、遺物、石（中礫～巨礫）の出土が多く、冬を迎え時間的にも、作業には時間がかかりそうだと判断した。12月８日、林務課、教育委員会担当課、上新城中学校長が集まり、今後の日程、生徒の通学路の問題等を協議し、雪どけを待って調査をすることにしたのである。２月26日、多少の雪はあるが調査区に残る木の抜根作業をブルドーザーで行う。調査区北半部は木の根の密集で抜根により遺構等は破壊されて、結果は期待できない状態であった。そして、３月５日から発掘調査を開始したのである。

2.小グランド造成工事

林道工事に伴う発掘調査の整理中に、さらに中学校の裏側（北東側）に小グランド造成の話が持ち上った。それまで中学校のグランドは250ｍ離れた標高約60ｍの高台にあり、授業に支障をきたしているということであった。上新城中学校遺跡の範囲確認調査は行なっていないため、小グランド造成予定地域（この地域は戦後、開墾して畑として使用したことがあるという。その際、多少の遺物が出土したらしい）の予備調査をした結果、予定地（約2,300㎡）の道路を含めた東側の大部分は、以前にスキーヤーのための駐車場を造るため削平され、遺構検出については断念せざるを得ない状態であった。調査対象の西側（約 800㎡）は笹竹の繁茂が著しく、遺物は確認出来なかったが、この状態では発掘調査は困難であるため、笹竹の根のおよぶ表土までブルドーザーで排除し、発掘調査を実施することとし、９月17日から調査を開始したのである。

3.調査体制

林道工事（Ａ地区）

調 査 期 間　　昭和54年３月５日～４月14日

調査主体者　　秋田市産業部林務課

調査担当者　　秋田市教育委員会

調　査　員　　菅原俊行　秋田市教育委員会

調査補佐員　　安田忠市　秋田城跡発掘調査事務所

調査協力員　　石郷岡誠一、小松正夫、日野　久、西谷　隆、西鳥羽礼子、秋田城跡発掘調査事務所

本間　宏　秋田高校学生、鈴木雅則　東京農大付属高校生

調査作業員　秋田城跡発掘調査作業員　地元有志

小グランド（B地区）

調 査 期 間　昭和54年９月17日～11月１日

調査主体者　秋田市教育委員会庶務課

調査担当者　秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行　秋田市教育委員会

調査補佐員　安田忠市　秋田城跡発掘調査事務所

調査協力員　石郷岡誠一、秋田城跡発掘調査事務所、谷口重光　秋田考古学協会員

調査作業員　秋田城跡発掘調査作業員、地元有志

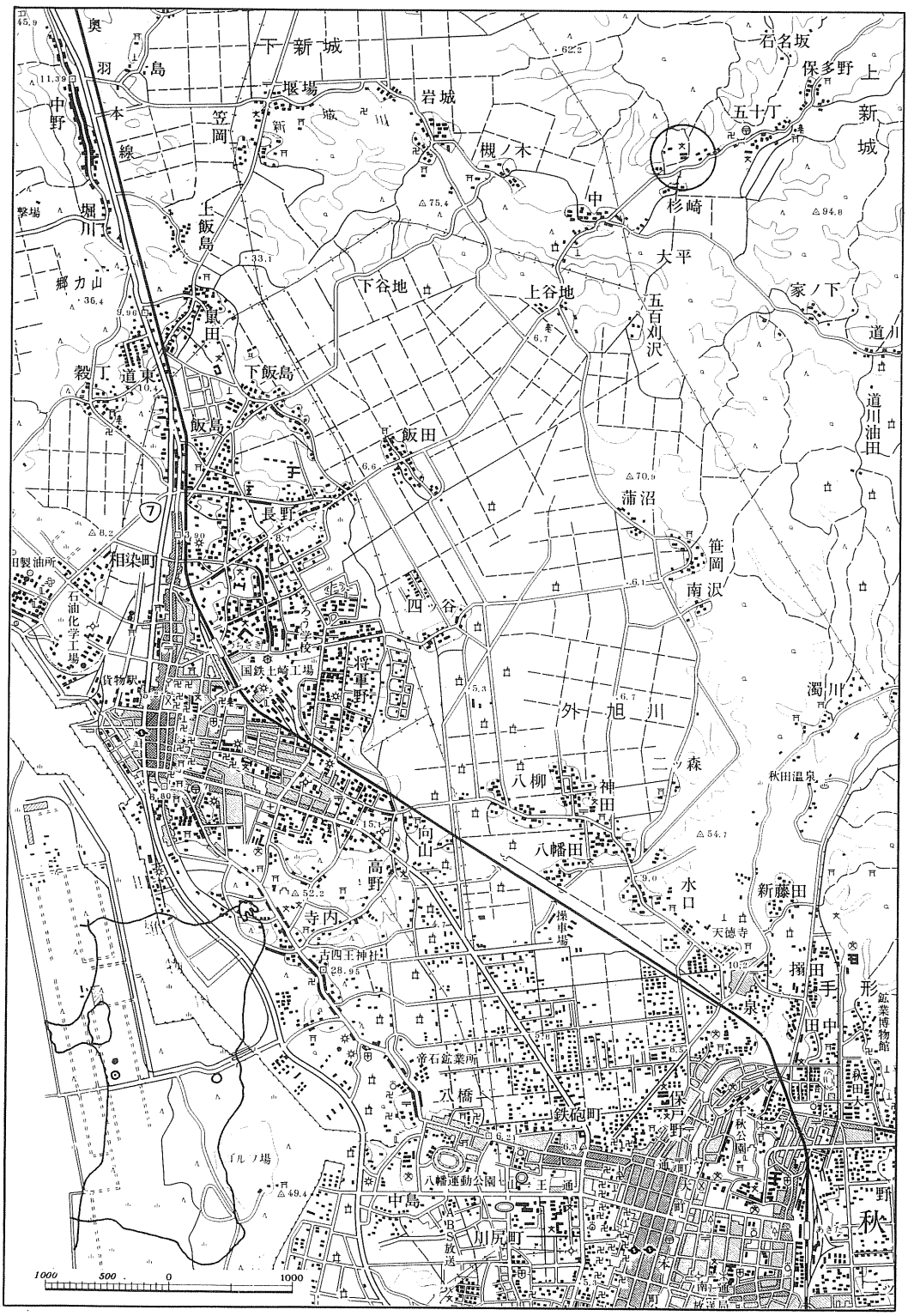
Ⅱ　遺跡の位置と立地

1.遺跡の位置

遺跡は、秋田市上新城五十丁字小林にあり上新城中学校を中心にした一帯である。秋田市街から北へ直線距離にして約９㎞の地点で、秋田から土崎を通り、飯島字長野、飯田を経て、秋田中央交通バス停留所「中学校前」の斜面の道路を登り切った標高約45m 前後の南面する段丘上に存在する。中学校の東側は沢になっていて小グランド造成予定地の東側奥まで入り込んでいる。

2.遺跡付近の地形

秋田平野を北西流する雄物川の旧河口に発達した土崎市街地の北方に太平山塊に源を発し、日本海に注ぐ新城川という長さ約20㎞の小河川がある。上新城はこの河川の上流部に当り、新城川とその支流の愛染川との細長く二又に分岐した谷底平野と、それを峡むように分布する丘陵地から成る。この上新城丘陵は標高60～ 200m のかなりの開析を受けた地形であり、谷密度は30～50/㎢、また、起伏量は100～150/㎢の地域が大部分を占めている。この丘陵の末端を南西流する新城川沿いには数段の段丘が知られている。五十丁集落付近には上下２段がみられ、上段は開析を受けた標高60～65m の面でゆるやかな傾斜をもって背後の丘陵に連続し、その堆積物は直径20～30m の亜円礫を含む礫層で10m 前後は認められる。また、下段は40～50m の標高を示し、約10m の比較的急な斜面で上段と境される。この面の表面は大変平担であり、直径10㎝前後の礫を主体とする礫層が５m ほどみられる。しかし、空中写真と地形図から判断すると杉崎付近から五十丁集落にかけて少なくとも上下３段の段丘が確認できると思われる。前述の上下２段の段丘のほかに標高25～30m の面である。



第１図　遺跡の位置　○上新城中学校遺跡

3.遺跡付近の地質・土壌

遺跡付近の丘陵地並びに段丘を構成する地層について述べると、基盤は新第三系中新世船川層で、その上には暗灰～灰色泥岩およびシルト岩から成る天徳寺層が覆っている。本層の固結度は船川層より低く、風化面では大角状にこわれ容易に泥化する。本層に伴う火成岩は羽黒山安山岩で、石英、黒雲母、角閃石を含む混成の輝石ないし両輝石安山岩から成る。天徳寺層を覆うのは笹岡層で、下部はシルト岩ないし砂質シルト岩で上方に漸次砂質化し、上部は微細粒の砂岩となる。下新城付近では路側や川筋に急崖をなして露出している。固結しているが風化しやすく崩れやすく、特に上部の砂岩はもろく、崩れて砂となる。本層に火成岩は伴なわないが、凝灰岩や浮石はしばしば認められる。この鮮新世笹岡層の上には寒風火山の噴出によるといわれる１～２ｍの黄褐色の粘土質火山灰土が堆積し、最上位には亜円礫の混入がみられる黒色土が覆っている。これは、いわゆる高岡２統で黒色の色調はそれほど強くない。一次鉱物を見ると火山ガラスが混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。現水田はシルトが主体の沖積層（西山統）である。

調査における層序は、Ａ地区では第１層（表土）第２層（暗褐色土）、第３層（暗褐色土）、第４層（ローム層）に分けたが、第２層、第３層は両層とも黒っぽい褐色で、層序は明確ではない。第３層には炭化物を多く含み、焼土（粒）等を含んでいることで分けた。第２、３層は遺物包含層である。Ｂ地区は第１層（表土）、第２層（黄褐色土）、第３層（ローム層）に分けられる。第１層は黒色腐植土で厚く、第２層はロームに近いもので粘質性があり、木根等による攪乱もみられた。第１、２層とも遺物包含層ではない。

Ⅲ　調査の方法と経過

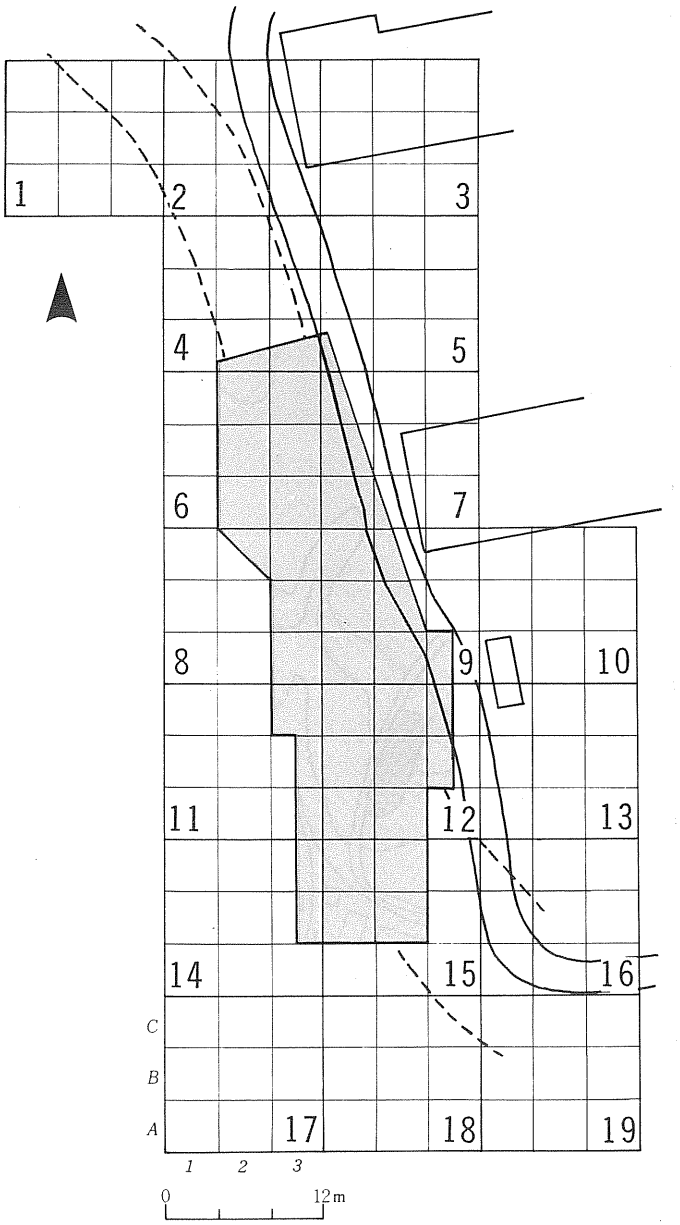
林道工事に伴う中学校西側の調査区をＡ地区、小グランド造成に伴う中学校北東側の調査区をＢ地区と呼称する。

1.Ａ地区

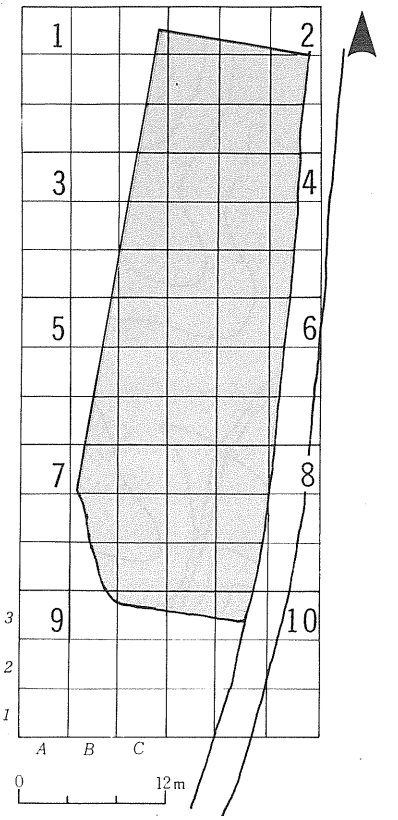
林道予定コースを中心に磁北に合せて東西南北の基線を決め、グリッド設定を行なった。大グリッド（12×12m）を19設定し、大グリッドの中に小グリッド（４×４ｍ）を９設定した。すなわち、東西方向に数字（１～３）南北方向にアルファベット（Ａ～Ｂ）の組合せで小グリッド（例17Ａ1）を呼ぶこととし、調査を進めた。大グリッド１・２・４の林道にかかる地区は抜根作業のため調査は不可能な所であり、16・19グリッドは通学路としての切り通しの坂道であり調査対象外の地区であった。調査区では第２層から多量の遺物、石が出土し始め、石は中礫～巨礫まであり、２層３層の遺物包含層の範囲にみられ、集石遺構の実測作業に時間がかかった。特に沢の入り込んでいる８Ａ３、９Ａ１、９Ｂ１、９Ａ２、11Ｃ３、12Ｃ１グリッドでは遺物の量が多い。調査区南は集石は少なかったが、調査後半の調査区精査の際、ローム直上面で土坑墓が確認された。

３月17日　上新城中学校２年生来跡、社会科の授業の一部として。

第２図　遺跡地形図および調査区



第３図　Ａ地区調査区・グリッド設定図



第４図　Ｂ地区調査区・グリッド設定図

2.Ｂ地区

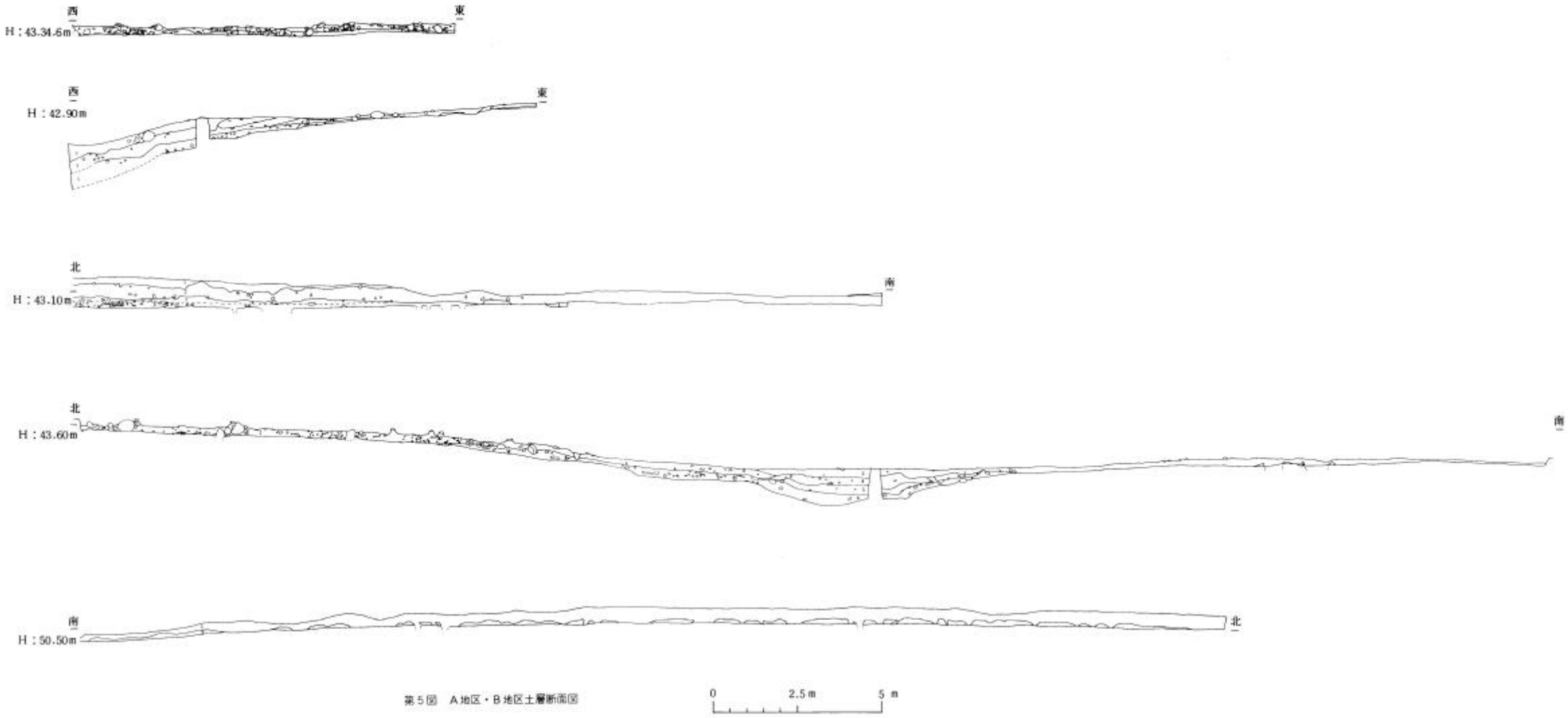
調査区の笹竹および表土の排除後、磁北に合せて東西南北の基線を決め、大グリッド（12×12m）を10設定し、Ａ地区と同様に小グリッドの名称を決め、調査を進めた。

調査区北側、１Ｃ３、２Ｃ１、２Ｃ２グリッドの所は開墾当時、井戸を掘った場所ということで調査は出来なかった。表土（黒色腐植土層）の排除段階で遺物はほとんど出土しなかった。ローム直上面で土坑墓を確認し、平面形の確認できる土坑墓は長軸方向に坑内層序を実測することにした。調査区中心部東寄りの所は重なり合う土坑基が多く、平面で把握するのは困難なものもあった。

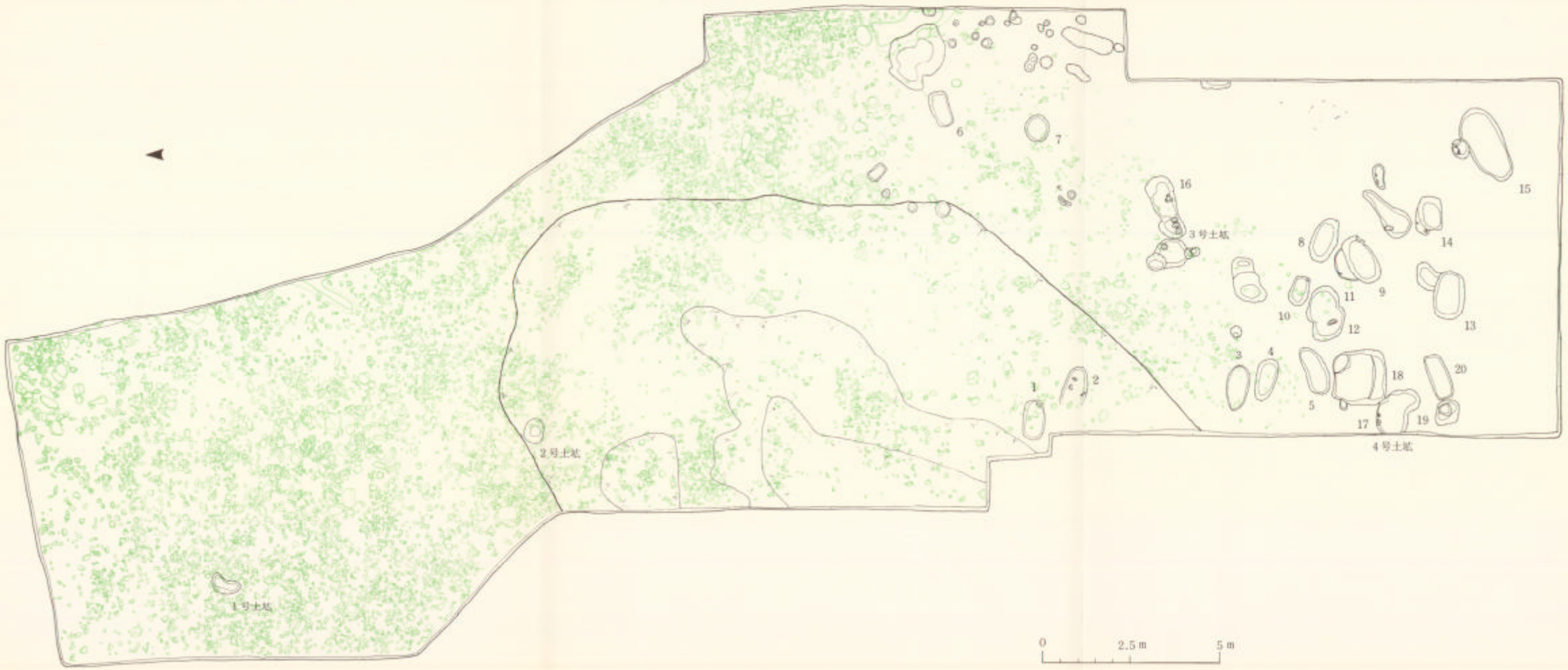
９月28日　上新城中学校全校生来跡。郷土学習の一環として。

10月16日　小林達雄氏（国学院大学助教授）、門間光夫氏、富樫泰時氏、畠山憲司氏（県文化課）来跡

10月17日　林　謙作氏（北海道大学助教授）、ビル・ワークマン夫妻来跡。



第5図　A地区・B地区土層断面図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
0
2.5 m
5 m

第6図　A地区遺構図

Ⅳ 遺構と遺物

1. A地区

調査面積　500㎡

校舎（管理棟）の西側に沢が入り込み、小沢の東側、すなわち、校舎の南西側に張り出した台地上が調査区である。標高は40m 前後で遺跡の広がりは校舎の敷地内および沢の北側台地に及ぶものと考えられる。

発見された主な遺構は集石、土坑基（20基）などである。

集石遺構

表土から20～30cmの深さで、集石がみられ集石を含む埋土は20～30m で第２層、３層におよぶ、石は５～30cmの大きさの礫で、範囲は調査区内では東西約18m 、南北約35m の広がりがあり、特に北半、中央部東側に密に分布している。南端部には集石はほとんどみられず、ローム質粘土層に混っている礫が露出しているものである。北半の集石下は礫混りのローム質粘土層となり第３層として区別できる層はない。調査区中央部には小沢が入り込み、埋められているので堆積層は厚くなり、西側が最も厚い。ここは部分的に７層ぐらいまで層別してみたが、基本的には表土も含め４層に大別される。集石の範囲が遺物出土の範囲であり、沢部にあたる８Ａ３、９Ａ１、９Ｂ１、９Ａ２、11Ｃ３、12Ｃ１グリッド内は遺物出土量が著しく、本調査の遺物の大部分である。

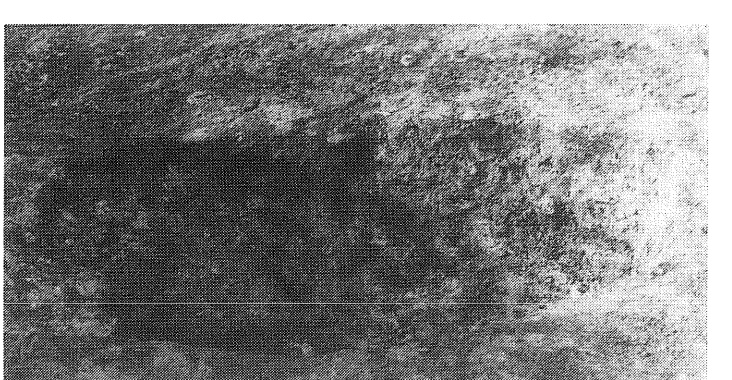
この集石遺構は西側、校舎のある北東側に広がりが考えられるもので、遺構そのものは特に石を配したという形跡はみられない。

土　坑　墓

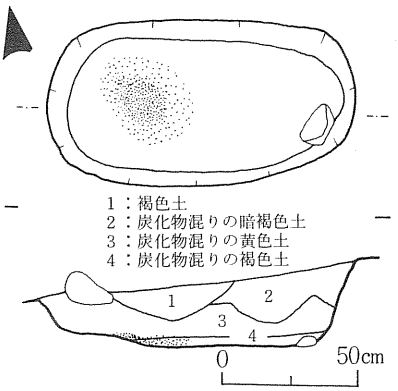
Ａ地区では20基の土坑墓が確認された。土坑墓のほとんどは、台地南端に位置する。土坑墓を１号から順に、構造、出土物等について記述する。　※土層断面は必ずしも長軸方向になっていない。

１号土坑墓

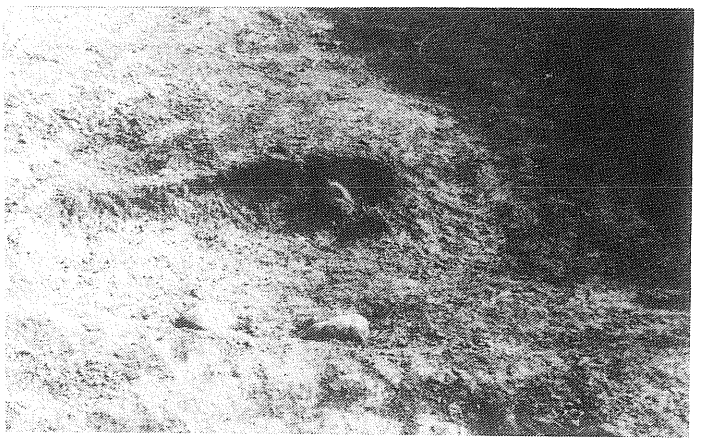
沢の南側にあり、西に傾斜している。坑口部は 113cm×60cm で小判形を呈し、長軸方向はＮ86°Ｗで、坑底はほぼ平らである。埋土には炭化物の混入がみられ、粗製の土器片が若干出土し、坑底中央部よりやや西側にベニガラの散布がみられた。



第７図　１号土坑墓（南→）



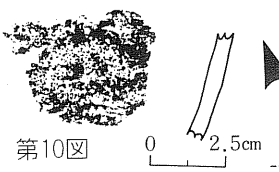
第８図　１号土拡墓



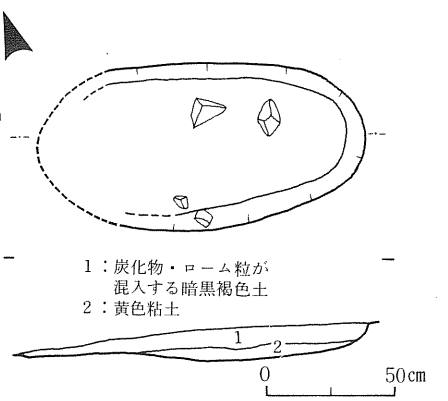
第９図　２号土拡墓（北→）

２号土拡墓

１号土拡墓の南東にあり、西に傾斜し、西壁ははっきり確認できなかった。拡口部は約130cm×67cmで小判形を呈し、長軸方向はN72°Wで、拡底北側に礫がみられ、埋土中に粗製鉢の胴部、石片が出土した。



第10図
２号土拡墓出土土器



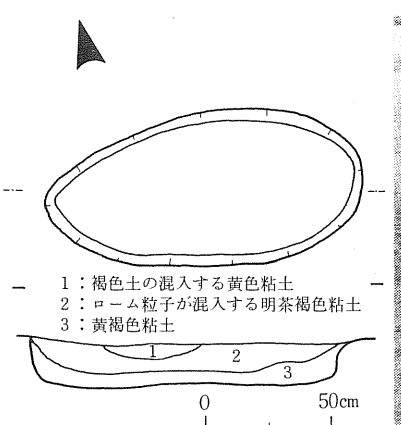
第11図　２号土拡墓

３号土拡墓

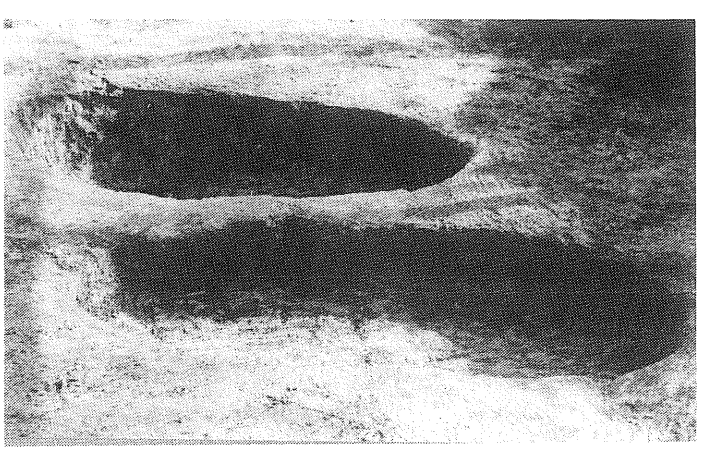
調査区南の西壁際にあり、拡口部は127cm×62cmでほぼ楕円形を呈し、長軸方向はN83°Wで、拡底は平らで壁は比較的直立し、遺物は粗製土器片が１点出土している。

４号土拡墓

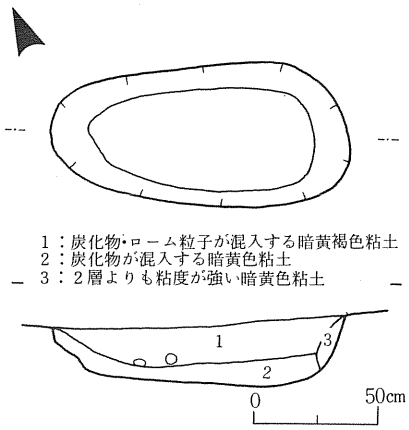
３号土拡墓とややずれて南側に並んでいる。拡口部は120cm×55cmでほぼ小判形を呈し、長軸方向はN71°Wで、出土遺物はない。



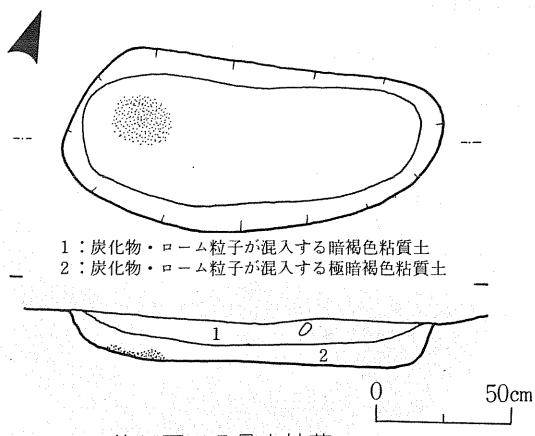
第12図　３号土拡墓



第13図　３号・４号土拡墓（手前３号）（北→）



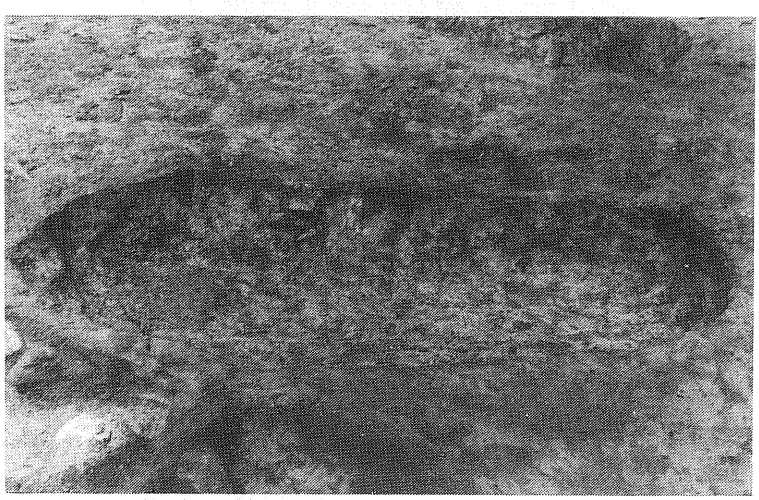
第14図　4号土坑墓



第15図　5号土坑墓

5号土坑墓

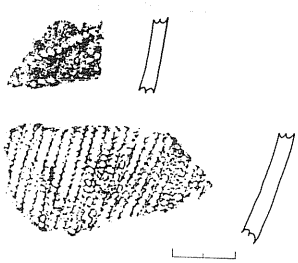
4号土坑墓の南側にあり、坑口部は142cm×65cmで、多少変形であるが長い小判形を呈し、長軸方向はN120°Wで、坑底南西にベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。



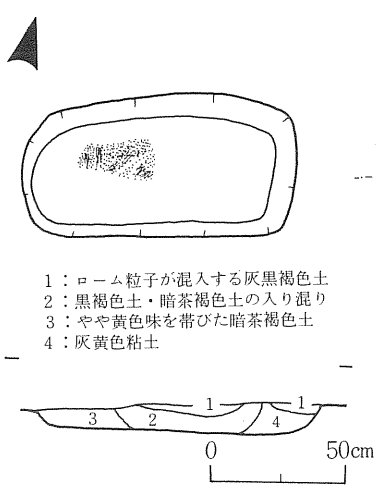
第16図　5号土坑墓（南→）

6号土坑墓

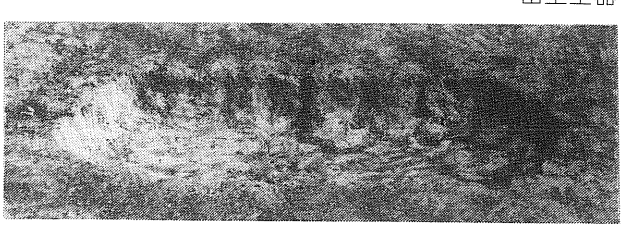
調査区中央部東側にあり、坑口部は102cm×54cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN109°Wで、坑底は平らで、中央西側寄りにベニガラの散布がみられ、特にベニガラが繊維状のものに付着したような形跡が確認されたが、詳細は不明である。埋土中の遺物は粗製土器片が数点出土している。



第17図　6号土坑墓
出土土器



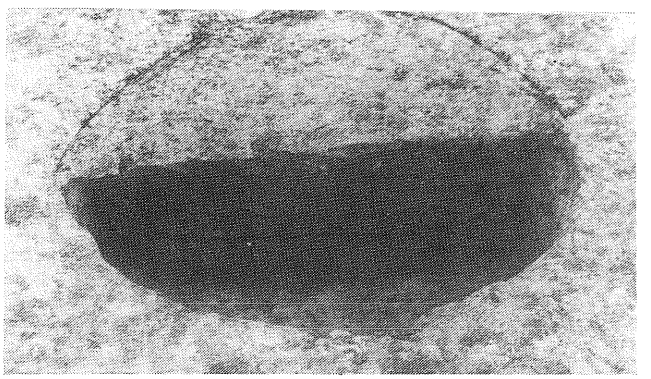
第18図　6号土坑墓



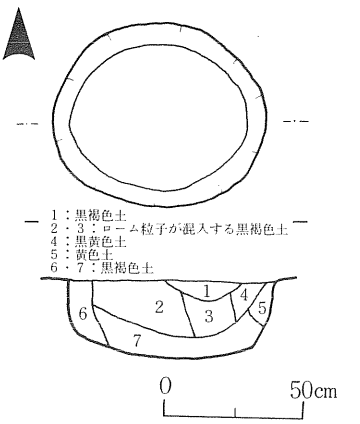
第19図　6号土坑墓（北→）

7号土坑墓

6号土坑墓の南側2mのところにあり、坑口部は75cm×70cmのほぼ円形を呈し、坑底は鍋底状で、埋土は他の土坑墓に比べ黒色が強い。出土遺物はない。（長軸方向N93°E）



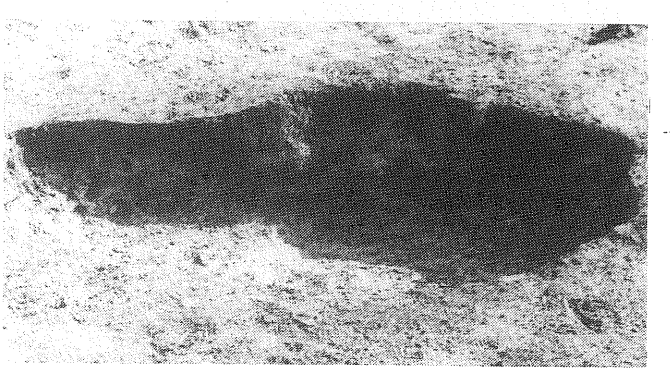
第20図　7号土坑墓（南→）



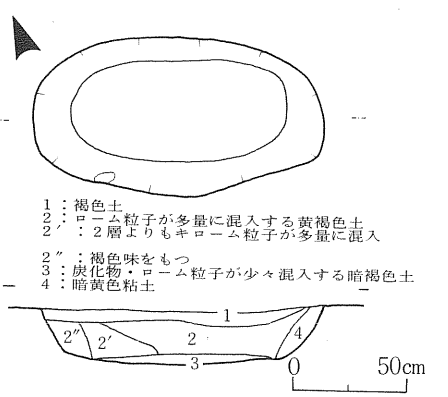
第21図　7号土坑墓

8号土坑墓

台地南端、中央部にあり、坑口部は127cm×70cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN67°Wで、坑底はゆるやかな鍋底状である。出土遺物はない。



第22図　8号土坑墓（南→）



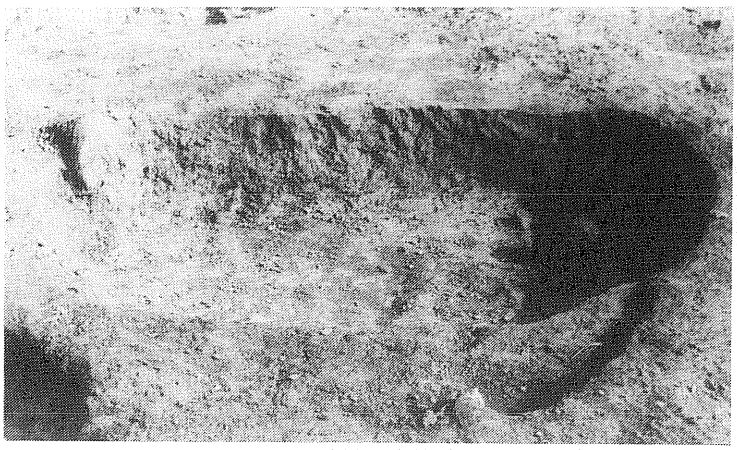
第23図　8号土坑墓

9号土坑墓

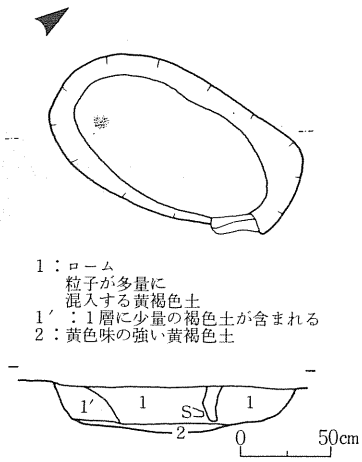
台地南端。中央部8号土坑墓の南西にあり、坑口部は140cm×77cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN120°Wで、南西坑底近くでベニガラの散布がみられた。坑底はほぼ鍋底状で、出土遺物は粗製土器片2点である。

10号土坑墓

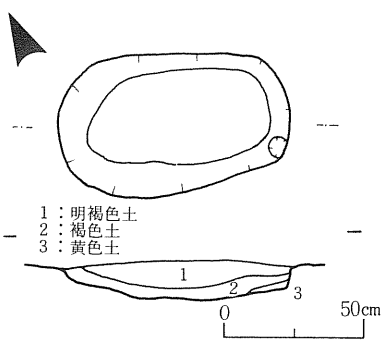
8号土坑墓の北西にあり、坑口部は83cm×50cmで、小判形を呈し、長軸方向はN70°Wで、出土遺物はない。



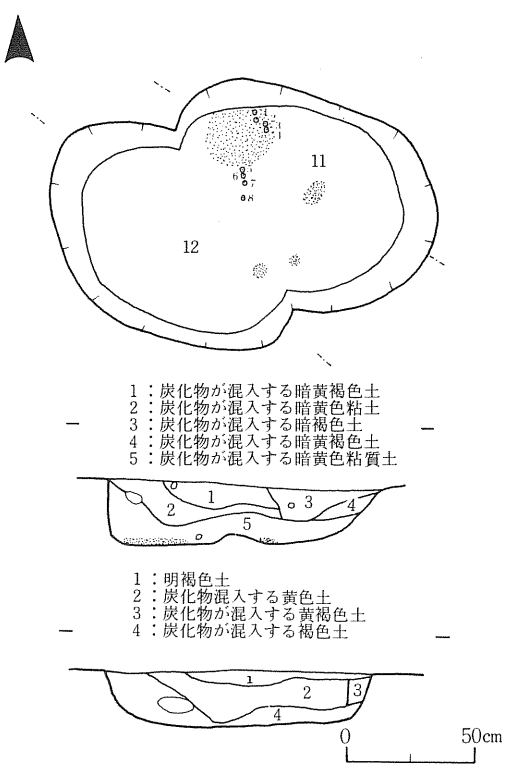
第24図　9号土坑墓（北→）



第25図　9号土坑墓



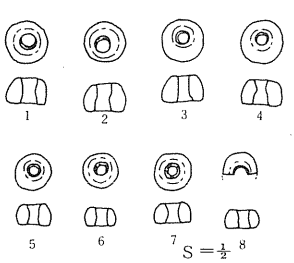
第26図　10号土坑墓



第28図　11.12号土坑墓

11号・12号土坑墓

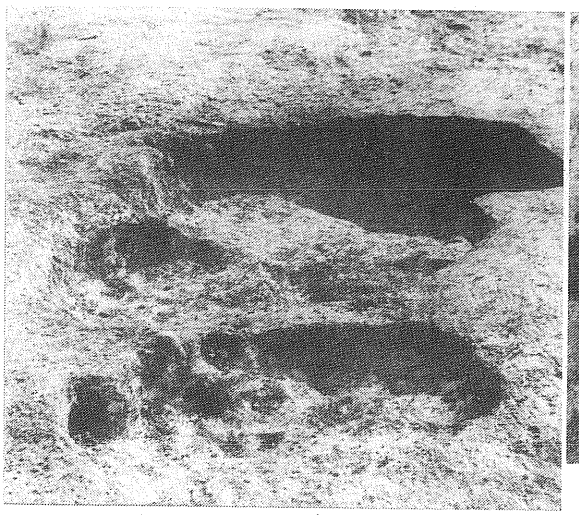
10号土坑墓の南西にあり、重複している土坑墓で11号の方が12号より新しい。11号の坑口部は 110cm×約82cmで、小判形を呈すると思われ、長軸方向はN69°Wで、西側、中央部南側の4ケ所にベニガラの散布がみられ、西側のベニガラ周辺から8個の小玉（うち1個は半分のみ）が検出された。玉は緑色凝灰岩製である。12号の坑口部は 115cm×約75cmで、楕円形を呈すると思われ、長軸方向はN48°Wで、坑底は平らである。出土遺物はない。



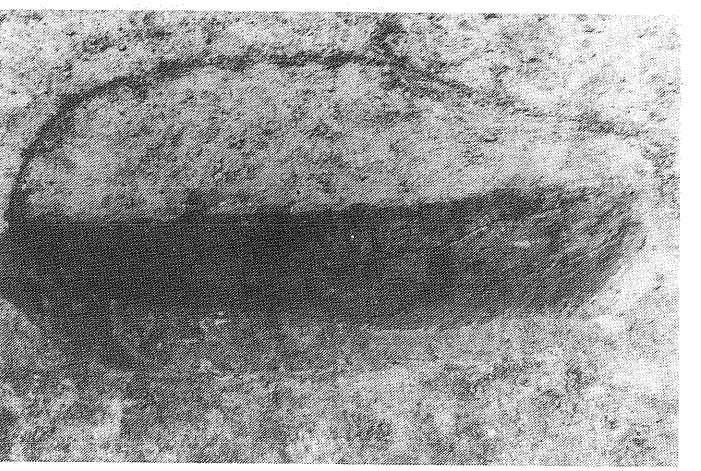
第27図　11号土坑墓出土小玉

13号土坑墓

調査区南端にあり、坑口部は135cm×85cmで楕円形を呈し、長軸方向はN85°Wで、中央北寄り坑底近くでベニガラがみられた。出土遺物は粗製土器片1点である。



第29図　10号・11号・12号土坑墓(手前10号)(北→)



第30図　13号土坑墓（南→）

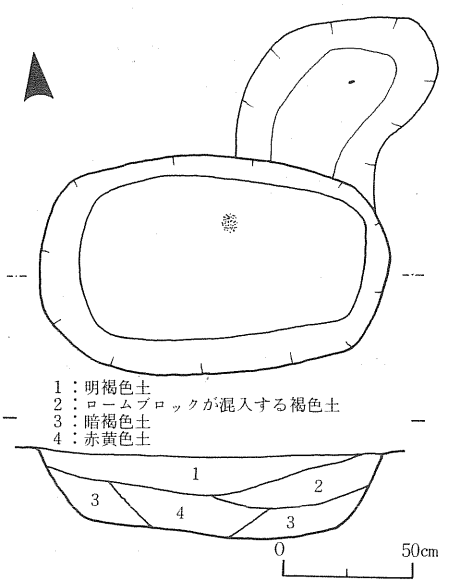
近くでベニガラがみられた。出土遺物は粗製土器片１点である。

14号土坑墓

13号土坑墓の東側にあり、坑口部は95cm×67cmで、隅丸方形を呈し、長軸方向はN96°Wで、中央よりやや西側にベニガラが散布し、小玉４個、勾玉１個が検出された。小玉、勾玉は緑色凝灰岩製で小玉は軟質のものである。

15号土坑墓

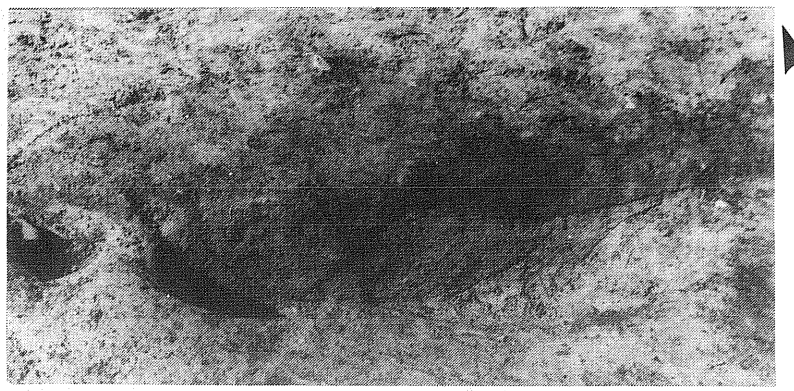
調査区最南端にあり、坑口部は220cm×105cmで、西側にやや細くなる楕円形を呈し、長軸方向はN117°Wで、坑底はほぼ平らであるが、礫が多く凹凸の感じである。これは礫層の部分に土坑墓をつくったためである。北側にこの土坑墓を切って径約50m のピットが確認された。中に人頭大の石２個と粗製の土器片が１点検出された。



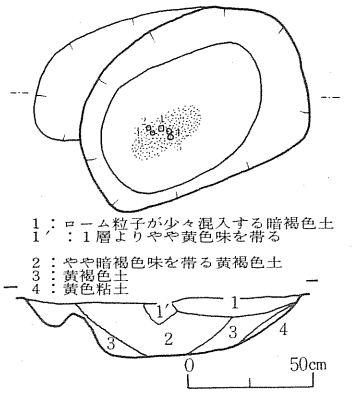
第31図　13号土坑墓

16号土坑墓

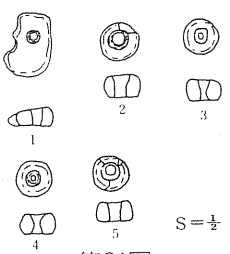
調査区南、中央部にあり、西側の土坑と重複し、これによって切られ、長軸方向坑口部ははっきりしないが、約140cm×70cmで、変形の小判形を呈し、長軸方向はN110°Wで、埋土中から粗製土器片１点が出土した。西側の土坑は土坑墓としては判然としないものである。



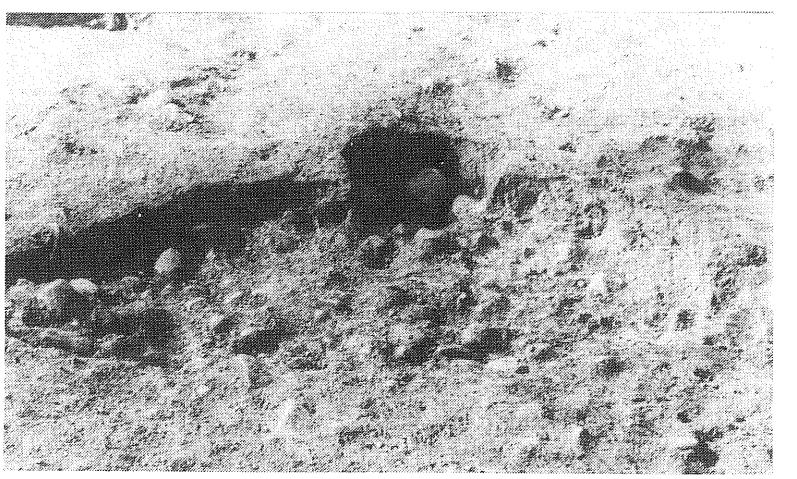
第32図　14号土坑墓（南→）



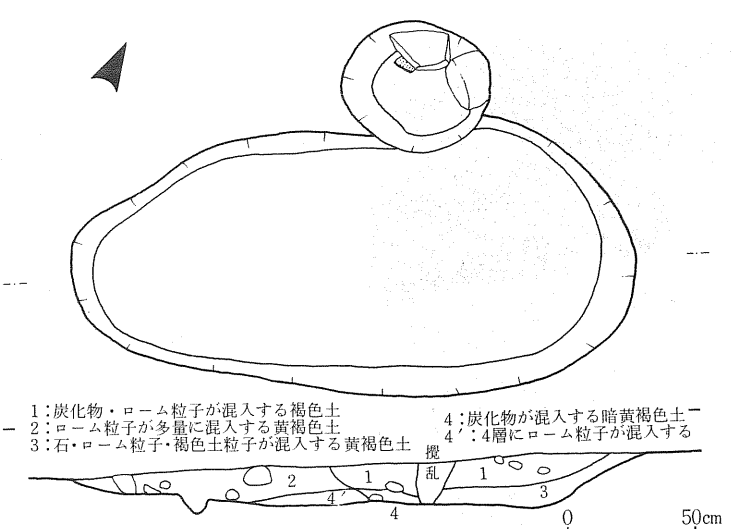
第33図　14号土坑墓



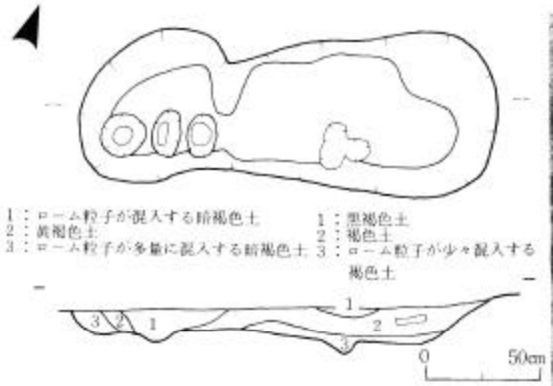
第34図
14号土坑墓出土
勾玉・小玉



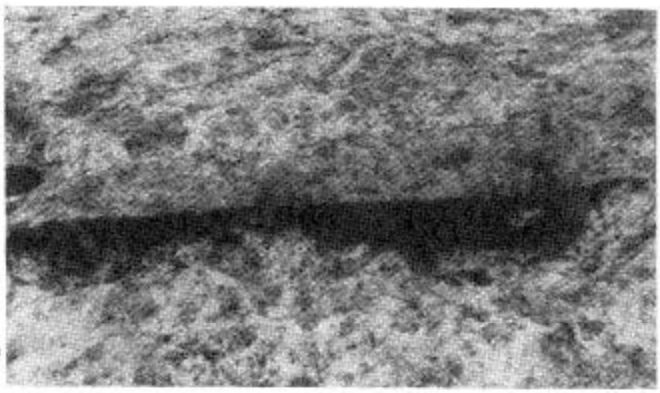
第35図　15号土坑墓（南→）



第36図　15号土坑墓



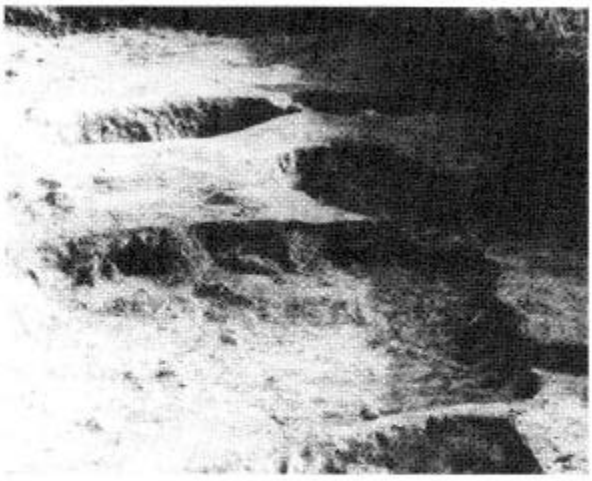
第37の1図　16号土壙墓・3号土壙



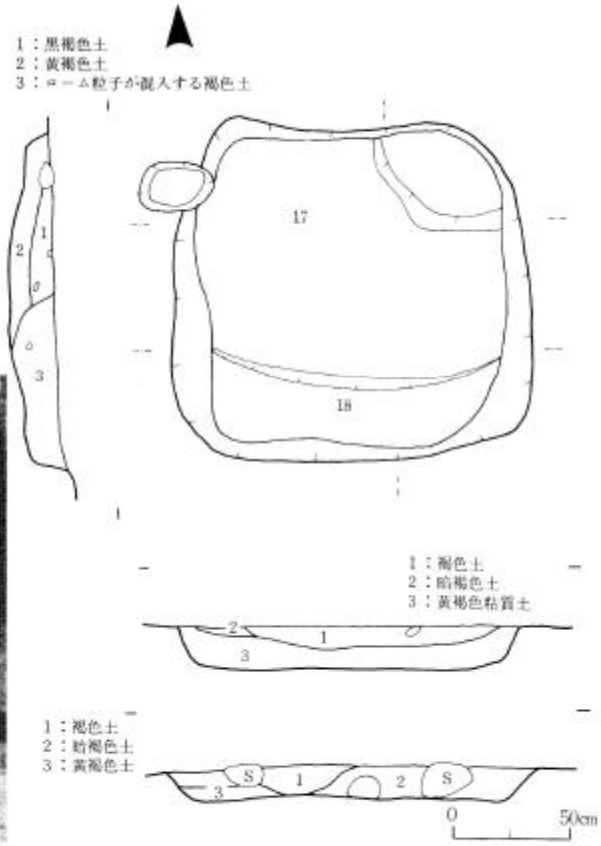
第37の2図　16号土壙墓（南→）

17号・18号土壙墓

5号土壙墓の南側にあり、ほぼ正方形であるが、これは重複しているためで、17号が18号より新しい。壙底は南に約10cmのゆるやかな段があり、17号の南壁と考えられるものである。17号の壙口部は150cm×約115cmで、変形的だが楕円形を呈する。長軸方向はN89°Wである。18号の壙口部は155cm×約75cmで、隅丸長方形を呈するものであろう。長軸方向はN89°Wである。埋土中から晩期および後期の土器片が出土している。（第56図1～2）



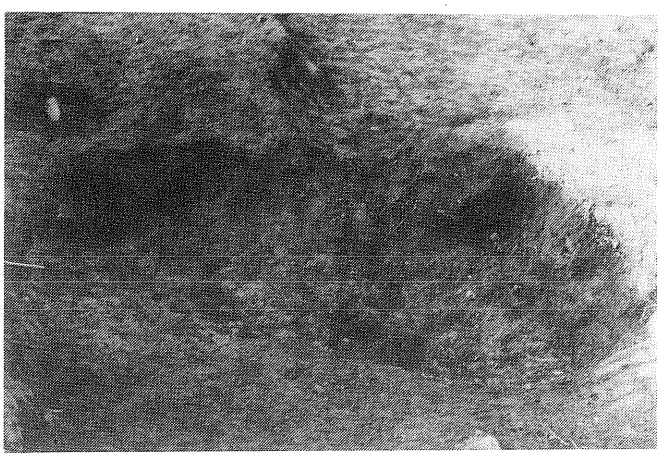
第38図　17・18号・土壙墓（北→）



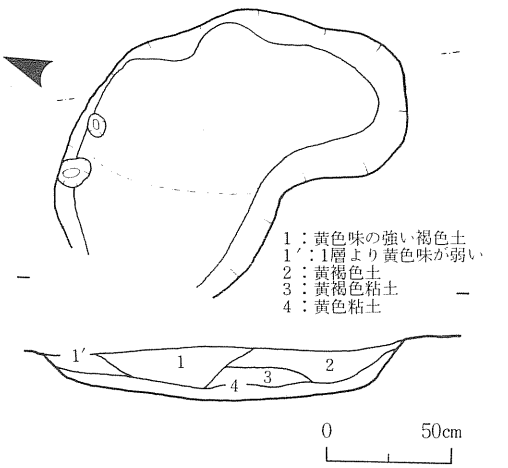
第39図　17・18号土壙墓

19号土坑墓

調査区南西壁際にあり、18号土坑墓に接し、西側は西に広がる土坑により切られている。坑口部は130cm×約70cmで小判形を呈し、長軸方向はN67°Wで、坑底はゆるやかな鍋底状である。出土遺物はない。



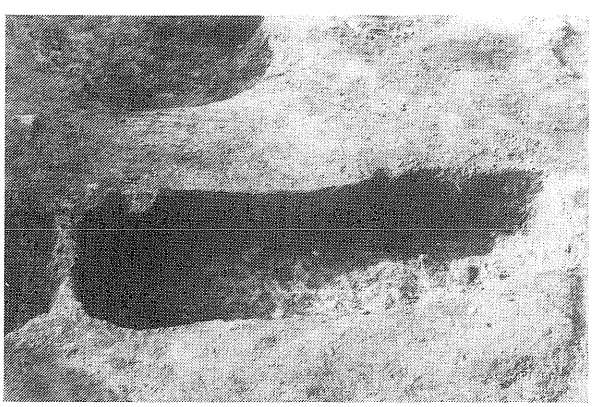
第40図　19号土坑墓（南→）



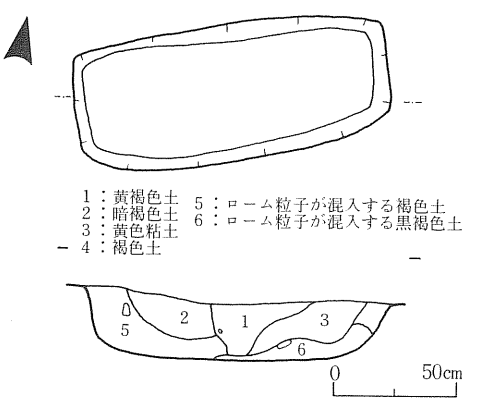
第41図　19号土坑墓

20号土坑墓

調査区南西端、19号の南側にあり、坑口部127cm×55cmで、最もしっかりした隅丸長方形を呈し、長軸方向はN110°Wである。坑底はほぼ平担で、出土遺物はない。



第42図　20号土坑墓（南→）



第43図　20号土坑墓

土　　坑

A地区の土坑は4基確認された。

1号土坑

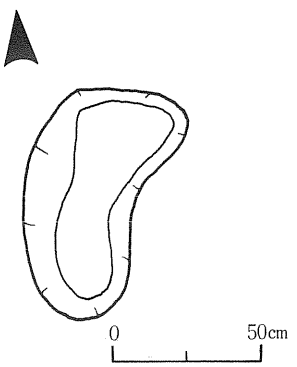
6B2グリッド内にあり、80cm×約40cmの変形の土坑で、注口土器（注口部）、土器片等が数点出土している。

2号土坑

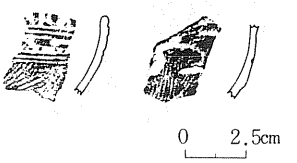
調査区、沢の北側８Ｃ３グリッド内にあり、70cm×60cmの楕円形で、土器片が数点出土している。

3号土坑は16号土坑墓と重複しているもの

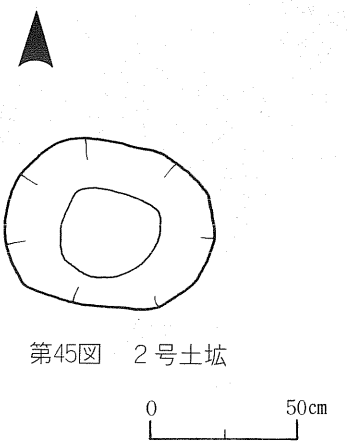
4号土坑は19号土坑墓と重複しているものである。



第44の１図　１号土坑



第44の２図
１号土坑出土土器



第45図　２号土坑

出　土　遺　物

Ａ地区の出土遺物のほとんどは、集石遺構の範囲にみられる。数点の縄文時代後期の土器片を除いては、縄文時代晩期の遺物で、完形で出土した土器はほとんどない。特に土器については、Ⅱ章で記述したように、層序の積極的分け方が出来なかったため、層位による土器の分類は無理であった。石器では凹石の出土量が多いのが注目される。整理作業は現在も続行中で、短期間による分類や整理作業で十分なものとは言えない。

土　　器

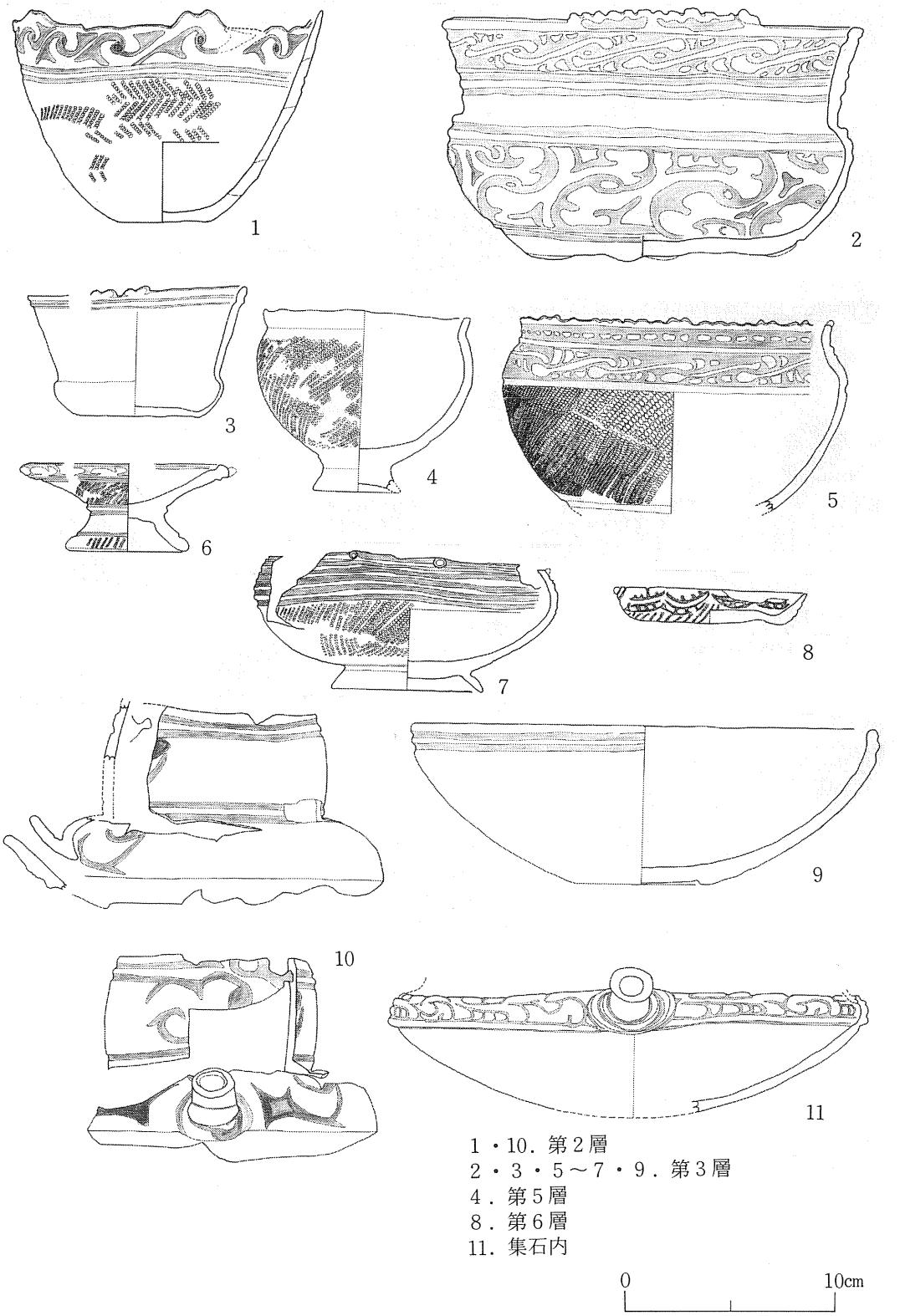
前述したように、層位的な問題はあるが、（遺跡の性格によるものであろう）一応、２層、３層を中心に出土した土器を類別した。

Ⅰ類土器（第46図１、10　第47図１～23）

器形は、深鉢形土器、台付鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器がある。口縁部、頸部を中心に入組文、三叉文が施されているもので第47図１、３、５、６、10、11、15は粗製鉢形、台付鉢形土器である。第47図19の浅鉢形、21の壺形土器は内外面にベニガラが塗布されている。第46図１は６個の突起があり、口頸部に三叉状入組文が施され、二本の沈線と羽状縄文のある鉢形土器で、10は精製で底部が欠損している注口土器である。

Ⅱ類土器（第46図2、5、8、11　第47図24～37　第48図１～21）

器形は、台付鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器などがある。口頸部を中心に羊歯状文が主体的に施文され、のの字状文、Ｋ字状文のものもある。台付鉢形土器の口縁、胴部の内外面には煤状炭化



1・10．第2層
2・3・5～7・9．第3層
4．第5層
8．第6層
11．集石内

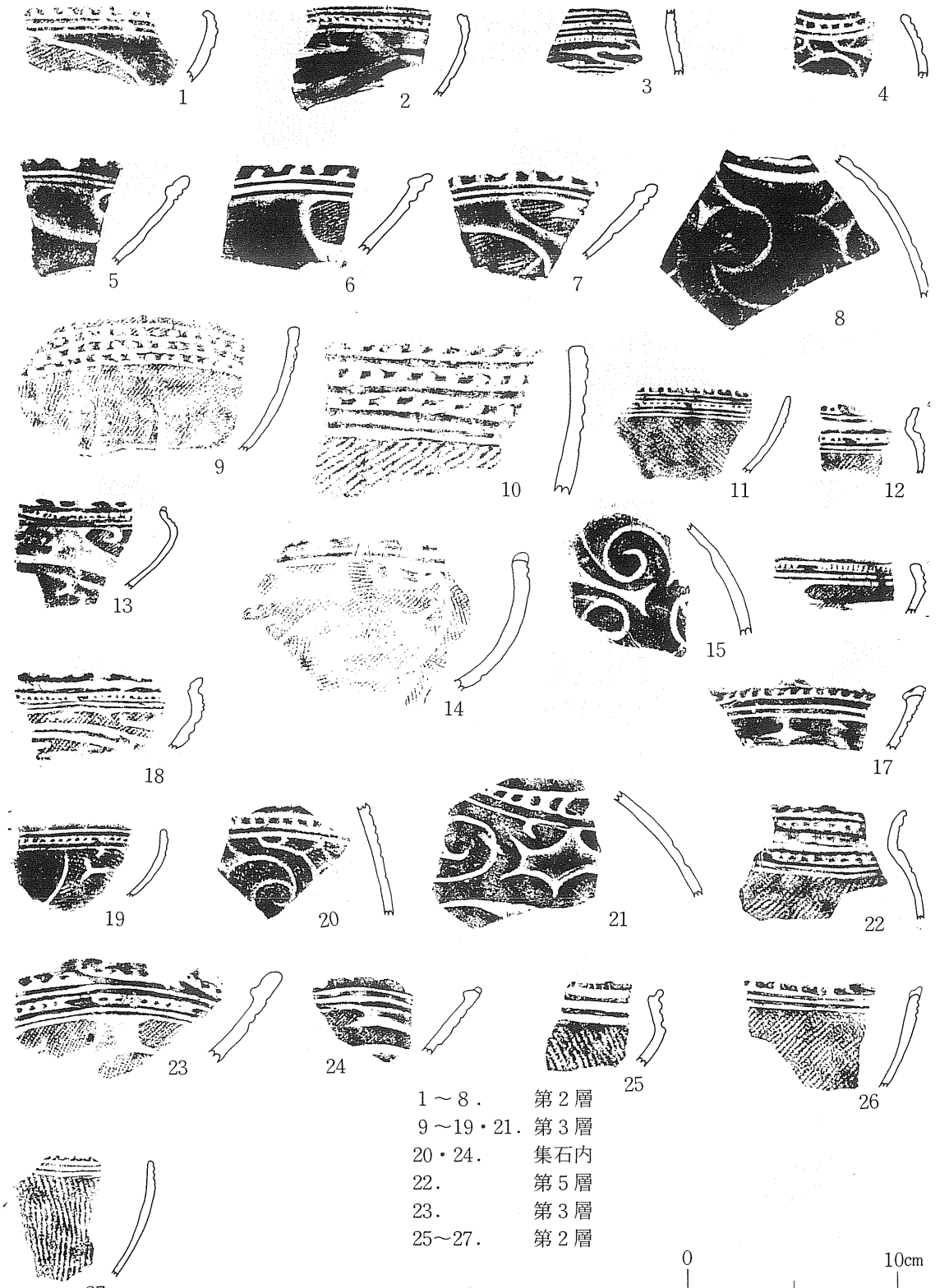
第46図　A地区出土土器

1～9．第2層　　23．　　第6層
10～21．第3層　　24～37．第2層
22．　　第5層

0　10cm

第47図　A地区出土土器

第48図　A地区出土土器



1～8.　第2層
9～19・21.　第3層
20・24.　集石内
22.　第5層
23.　第3層
25～27.　第2層

第49図　A地区出土土器

物が付着しているものが多い。第46図２の鉢形土器は底部と胴部の一部を欠くがほぼ完形で、口唇部の一ヶ所に波状突起をもち、口縁部に羊歯状文、胴部はＫ字状文を浮彫手法により表現し、底部には四足がつくもので、内外面全体にベニガラを塗布してある。５は小突起の波状口縁をもち、頸部に羊歯状文、胴部はLRの縄文が施される台付鉢形土器である。８は小形の皿形土器である。

Ⅲ類土器（第46図４　第48図22～30　第49図１～40）

器形は、深鉢形土器、台付鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器、壺形土器、皿形土器などがある。口縁部に連続突起をもつもの、口頸部は羊歯状文の退化した形の刻目を施すもの、胴部にかけ雲形文、X字状文、大腿骨文などが磨消縄文の手法により施文される。第49図９、10のように波状口縁で四～五本の平行沈線間を二～三段の連続刺突文のある台付鉢形土器などがある。

Ⅳ類土器（第46図3、6、7、9　第49図25～27　第50図１～16）

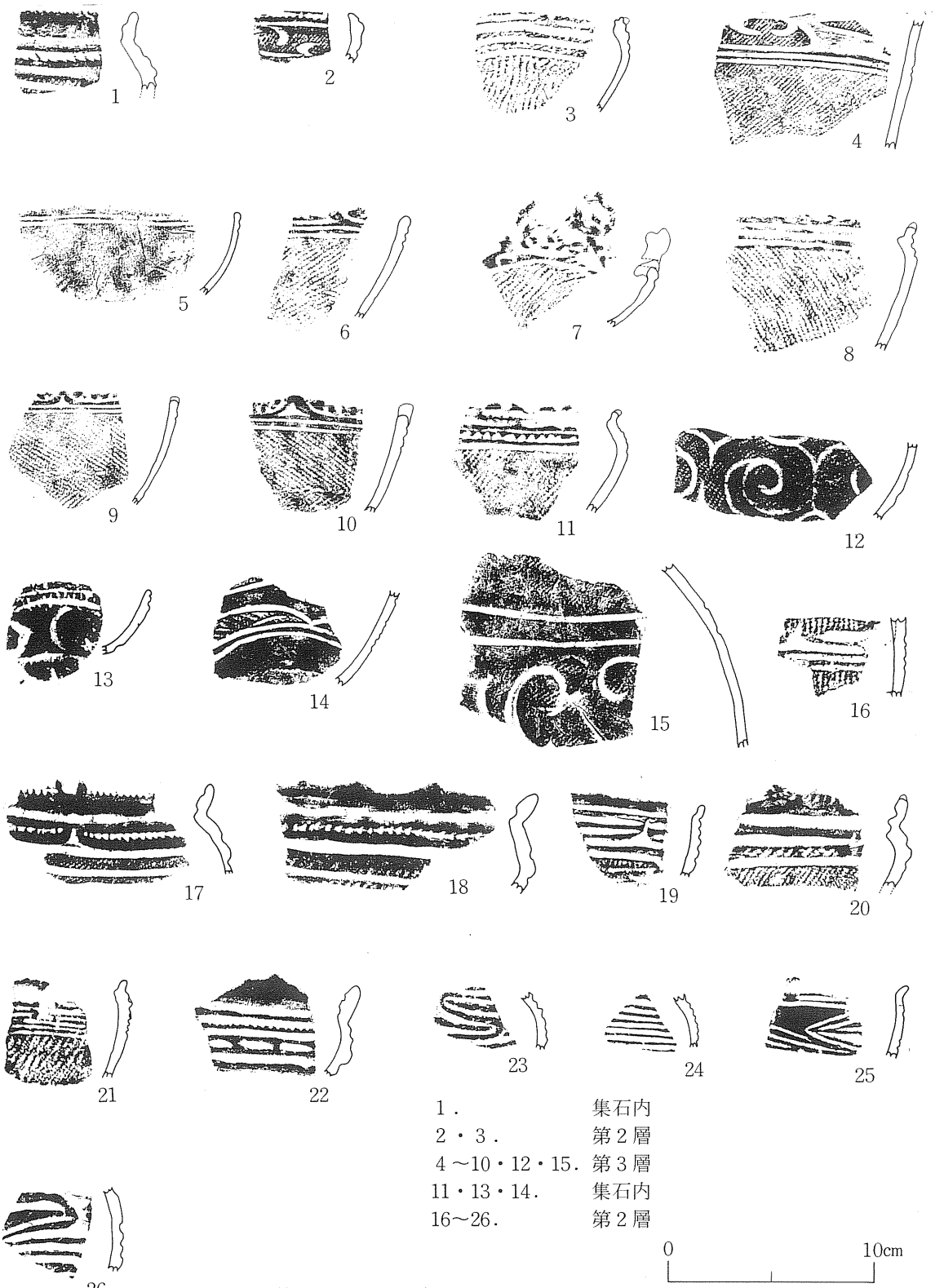
器形は、深鉢形土器、台付鉢形土器、浅鉢形土器などがある。口縁部に二個一対の小突起をもつもの、口頸部は二～三条の平行沈線がめぐるものが多い。胴部は縄文の施文が主で、雲形文、X字状文もみられる。第46図３は小形の鉢形土器で、口唇部に二個一対の小突起をもち、口縁部に二条の平行沈線がめぐり、全面が磨かれ、内外面にベニガラが塗布されている。６は高杯で、全体の$\frac{1}{8}$程度の破片を図上復元したもので、口唇部に突起がめぐり、口縁部内側に一条、外側に二条、台部付根、台部に平行沈線があり、胴部、台部にＬＲの縄文が施されている。７は六～七条の平行沈線が口縁、胴部にめぐり、沈線間に二個一対の瘤がある台付鉢形土器である。９、第50図５は、口縁部に二条の平行沈線がめぐる浅鉢形土器で、いずれも内外面全体にベニガラが塗布されている。

Ⅴ類土器（第50図17～26、第51図１～34、第52図１～５）

器形は、台付鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器がある。平行な沈線を基本とし、工字文を施文するもので、口唇部に刻目を入れたもの、頸部に連続刺突文のあるものなどで、流水文状に工字文が配される。第51図６、８、10のような鉢に比較的大きい突起（形状はいろいろある）をもつもの（煤状炭化物が付着している）、第52図４の肩の張る大形の壺形土器（内部の口頸部、外面にベニガラ塗布）などがある。第50図25、第51図27はいずれも台付鉢形土器で、口縁部内側に一条の沈線があり、口縁に二条の平行沈線をめぐらし、沈線を小瘤状の突起で区切り、下に矢印状の沈線文のあるⅤ類の中では新しいと思われるものや、第51図34の壺形土器の肩部と考えられ、平行沈線間に幾何学的表現をする（Ⅵ類に属するものとも考えられる）ものなどがあり、この類の土器は比較的多い。

Ⅵ類土器（第51図６）

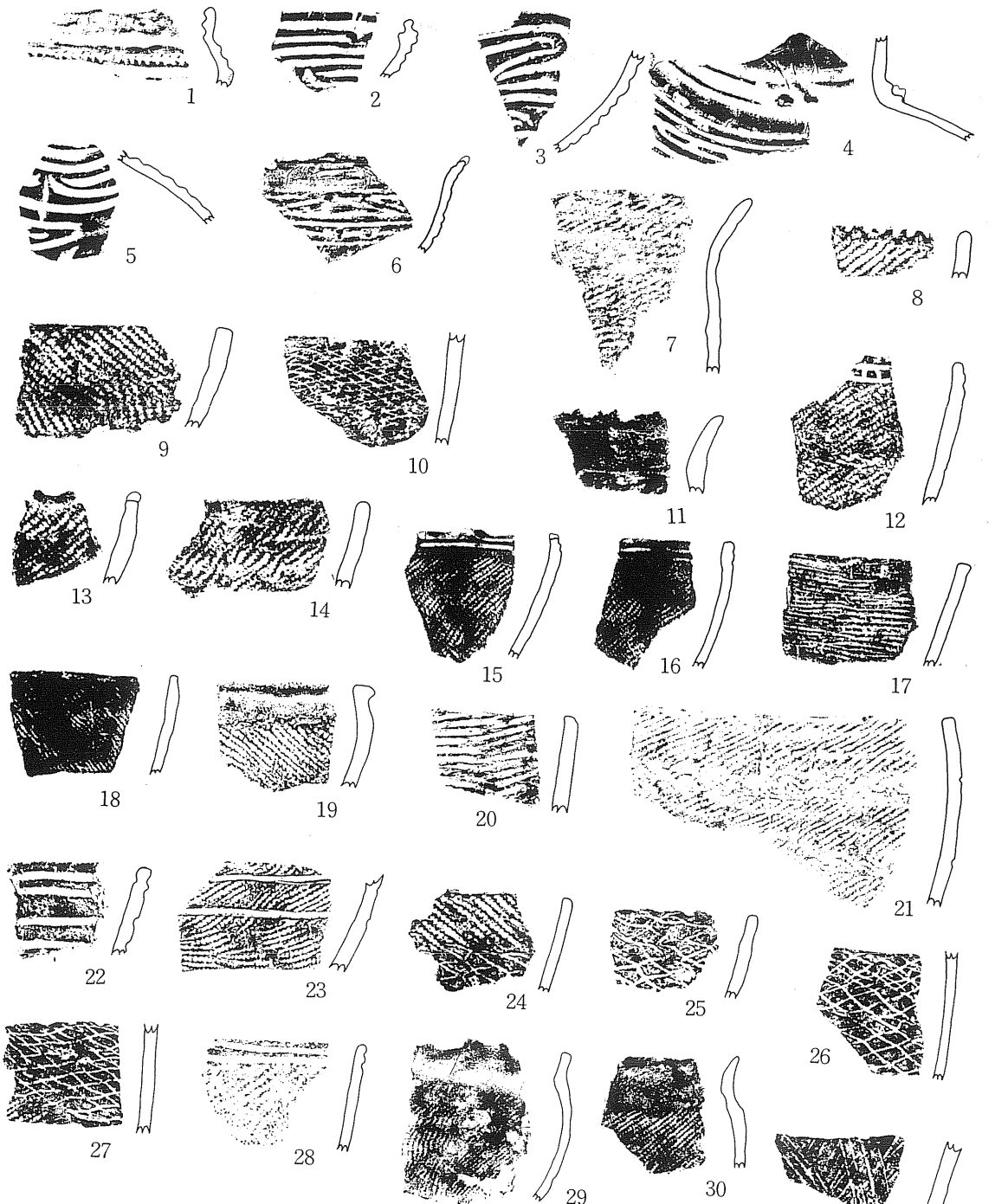
Ⅵ類土器として分けたのはこの土器だけで、台付鉢形土器の口縁部で、口縁部に山形突起があり、二条の平行沈線がめぐり、上部沈線に二つの粘土粒（瘤）がつけられ、そこから斜線が施され、下の三条めぐり平行沈線の中の沈線にも二つの粘土粒（瘤）がつき、くり返される表現のものである。



1．　集石内
2・3．　第2層
4～10・12・15．　第3層
11・13・14．　集石内
16～26．　第2層

第50図　A地区出土土器

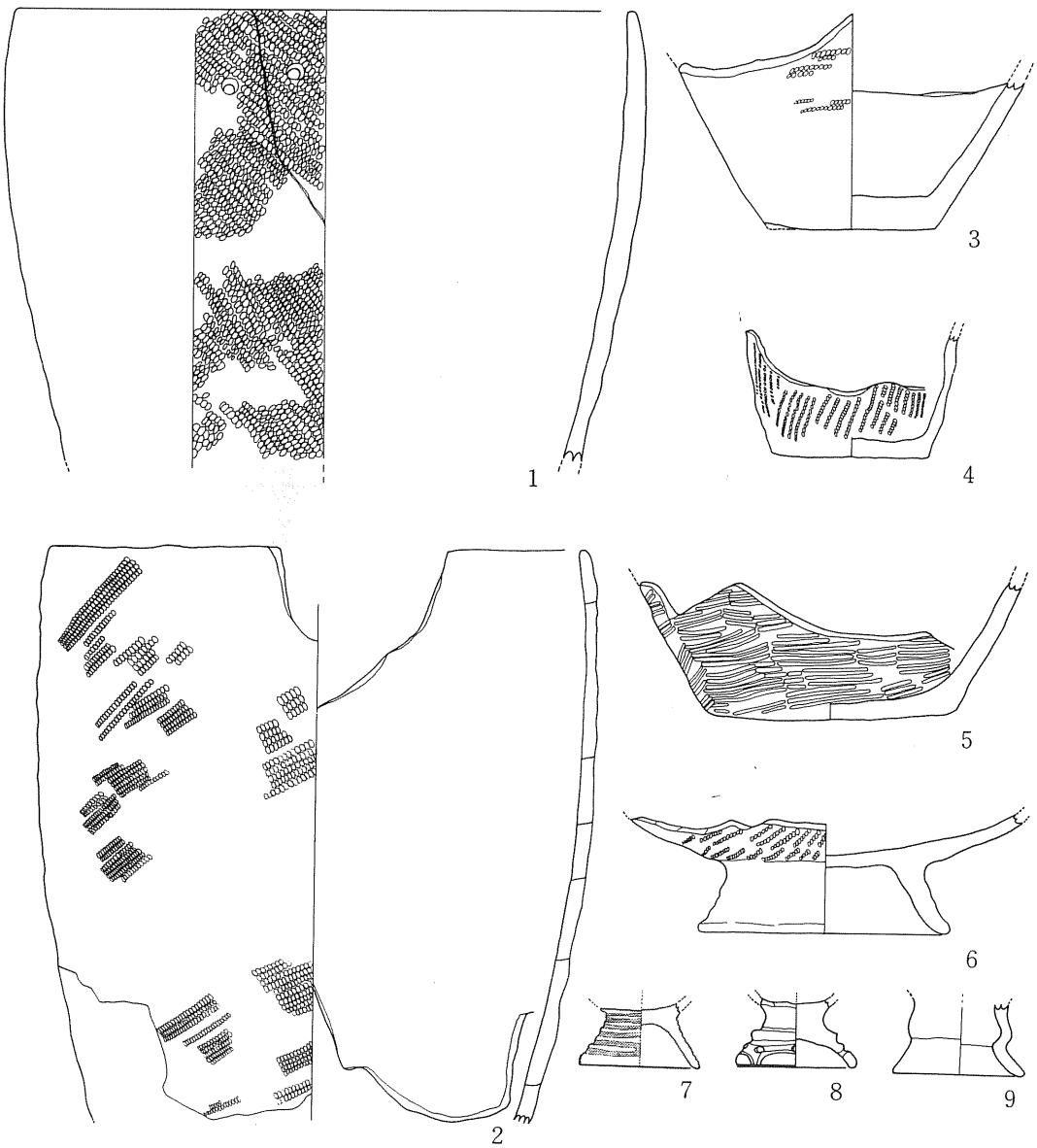
第51図　Ａ地区出土土器



1～3・5．集石内　　20・21・23～31第3層
4．　　第3層
6．　　第2層
7～17．　　第2層
18・19・22．集石内

0　10cm

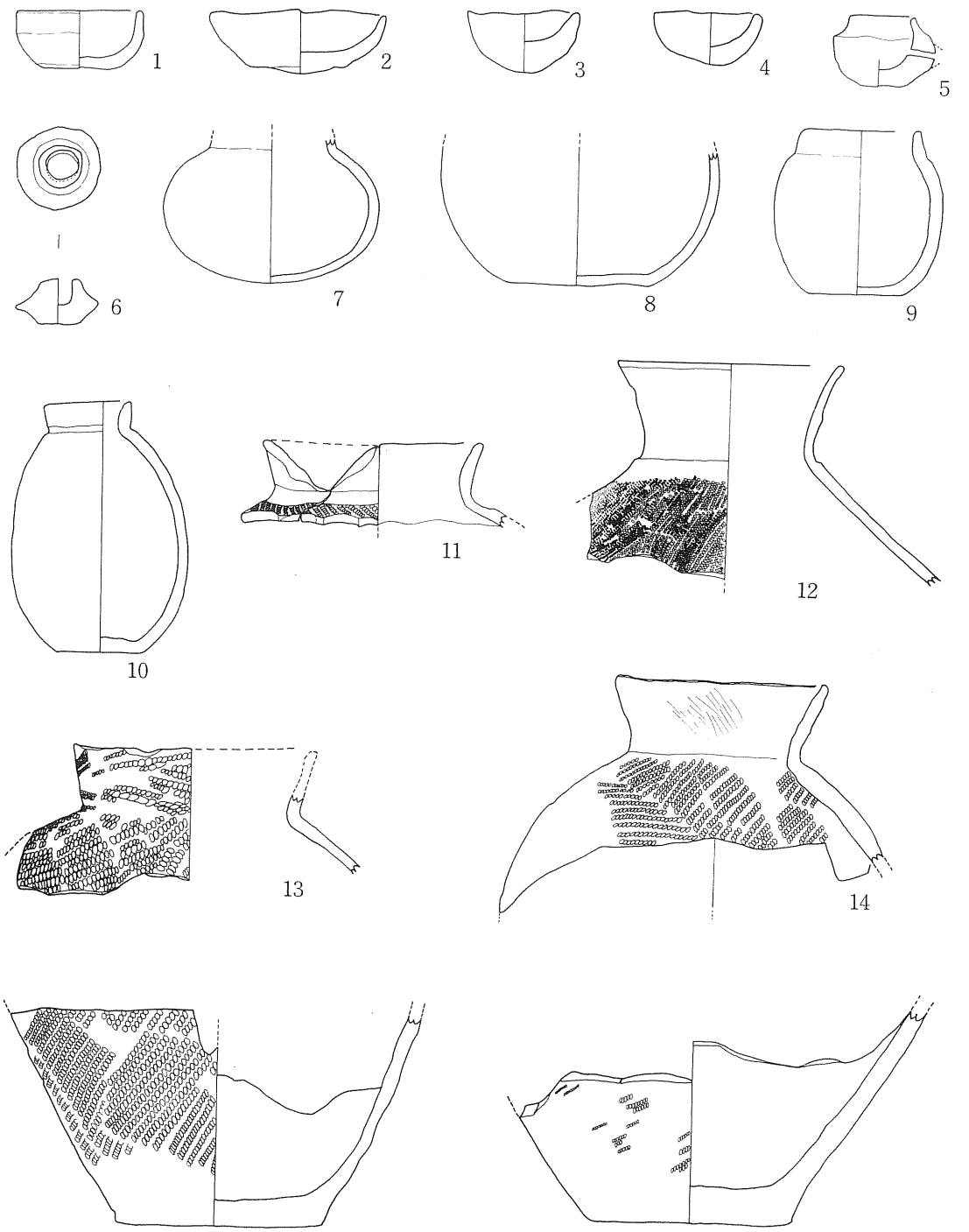
第52図　A地区出土土器



1・3～5．第3層　　7・8．第2層
2．　　第6層　　9．　　集石内
6．　　第5層

0　10cm

第53図　A地区出土土器



1・3・4．第2層
2・6・8・10・12・14～16．第3層
9．　　第4層
7・11・13．第5層
5．　　第6層

0　10cm

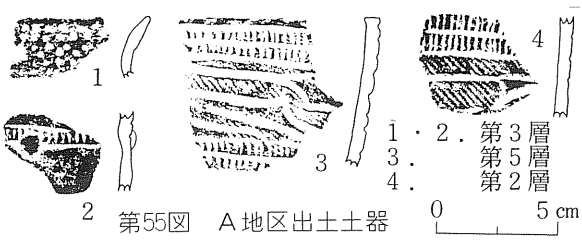
第54図　A地区出土土器

Ⅶ類土器（第52図７～31）

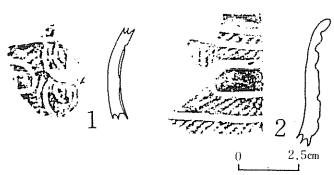
粗製の土器で、深鉢形土器、台付鉢形土器である。口唇部が波状のもの、突起がつくもの、肥厚するもの、角頭状、丸頭状、炎頭状に区別される。胴部は縄文が施されるものが主体であるが、17 20、第53図５のようにかき目条痕文が横位するもの、10、24、25、26、27の網目撚糸文の土器がある。

Ⅷ類土器（第55図１～４　第56図１～２）

第55図１は口縁部に竹管状工具で刺突文を有するもの、２はコブ付土器で刻目の部分につけられている。３は深鉢形土器の口縁部で、先の細い棒状工具で刺突した二条の刻目帯を間隔をおいて施文し、その間に入組帯状文を表現している。縄文はＲＬである。



第55図　Ａ地区出土土器



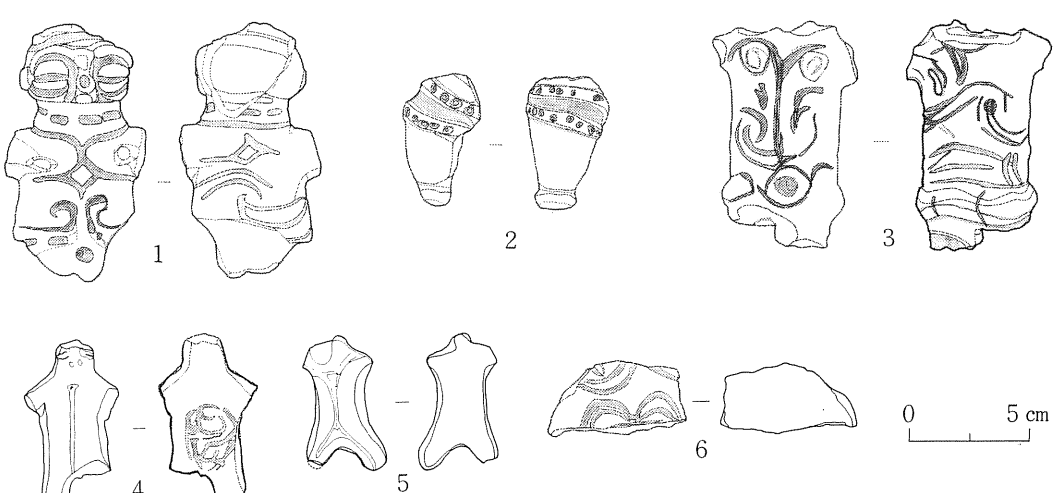
第56図　18号土坑墓出土土器

その他の土器（第54図１～16）

１～６は小形の土器類で２、３、４はつくりの悪い盃状土器である。７～14は壺形土器で７～10は器全体が磨かれ光沢のあるもので、11～14は大形壺で胎土は良くない。

土 製 品（第57図１～６、図版20）

１～６は土偶または破損部である。１は中空の遮光器土偶で後頭部、両腕脚が欠損している。ロとへそは刺突で表現され、沈刻部にはベニガラを塗布している。２は脚部で、胴部へつく部分にアスファルトの付着がみられる。３は中空の土偶で頭部、両腕脚が欠損している。乳部、下腹部（へそ）が盛上るもので、沈刻線文のある胴部は長い。４、５は小形の土偶で胎土は砂を多く含む簡素なもので、４は顔部の表現もないものである。６は土偶の胸部と思われるものである。図版20は円板状土製品で土器片を利用したもので径約３cm～5.5cmほどの大きさである。



第57図　Ａ地区出土土製品

石　器

石　鏃（第58図１～56）

有茎の石鏃が大部分を占め、14、54の黒曜石製のほかは硬質頁岩製である。茎部にアスファルトの付着がみられるものが９点出土している。

石　錐（第59図１～13）

３タイプの石錐があり、硬質頁岩製である。

石　匙（第59図14～28　第60図１～15）

横型のものが大部分で、第59図15、第60図４のチャート製のほかは硬質頁岩製である。つまみ部にアスファルトの付着がみられるものが１点出土している。

ヘラ状石器（第60図16～20　第61図１～３）

硬質頁岩製のものである。この遺跡出土のものは４タイプに分けられる。簡単に説明すると、両端を切断した比較的大形のものＡ、一端に調整を加え（スクレイパー状に作る）、中形のものＢ、二等辺三角形を呈し、小形および中形のものＣ、やや細身で両端が丸くなり中形のものＤである。特に第61図３のＤタイプの石器に（図の左側）アスファルトの付着が両面に見られ、左側の剝離面は鋭くツヤがなく、逆に右側はツヤがあり、刃部は刃こぼれが著しいものである。これらヘラ状石器と呼ばれるものは、左右両面が剝離されるもので、鋸としての機能が考えられる。出土数が少ないので詳述はできなかった。

槍先状石器（第61図４～16）

硬質頁岩製のものである。

削　器（第61図17）

硬質頁岩製で石器背面に剝離調整がある。

異形石器（第61図18～20）

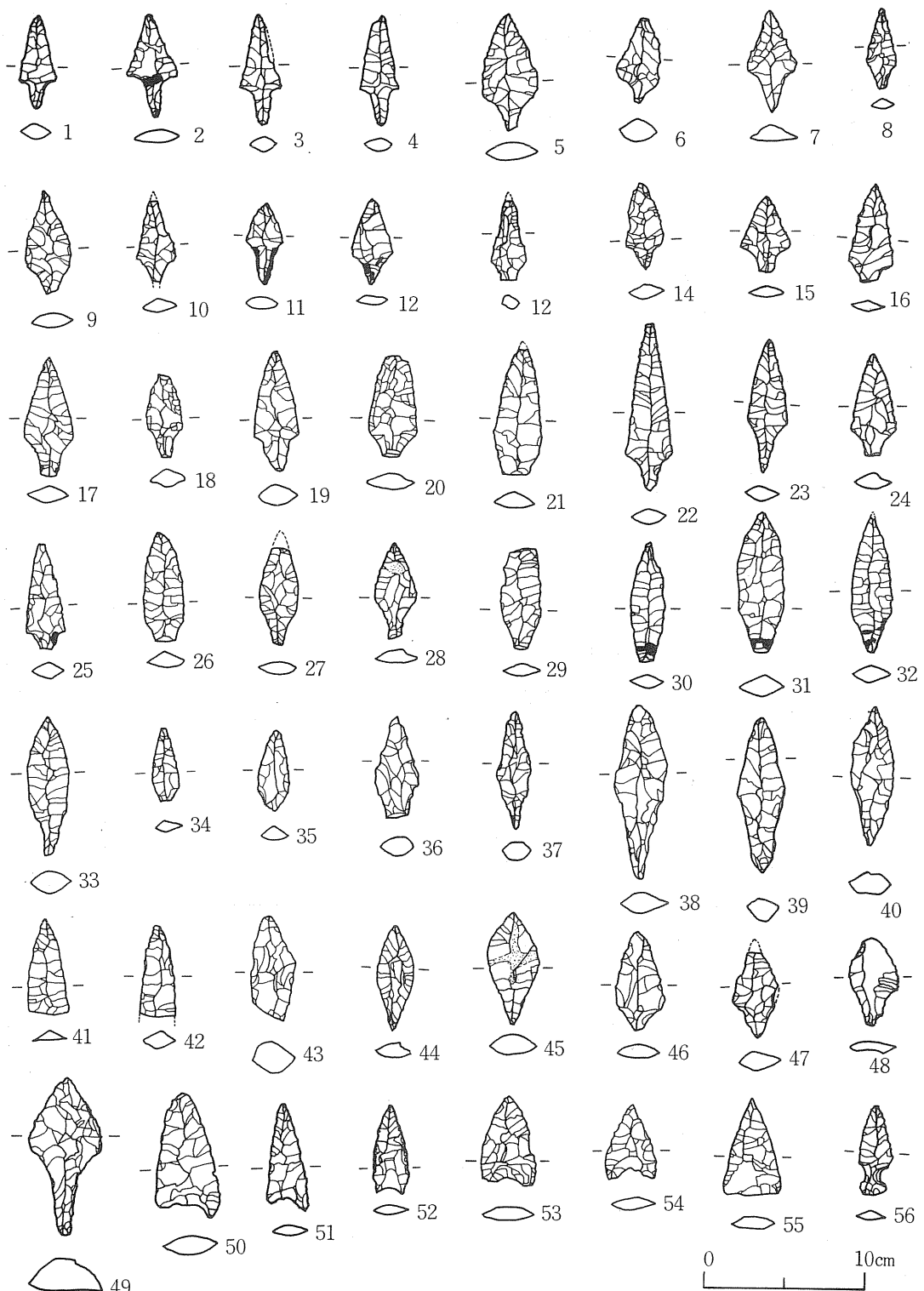
いずれも硬質頁岩製である。19は握りと思われる部分があり刃つぶしを施こし、矢印の部分の磨滅が著しく、敲石または磨石に分類されるものかもしれない。

凹　石（第62図１～20　第63図１～20　第64図１～19　第65図１～15　第66図１～15）
第67図１～19　第68図１～13）

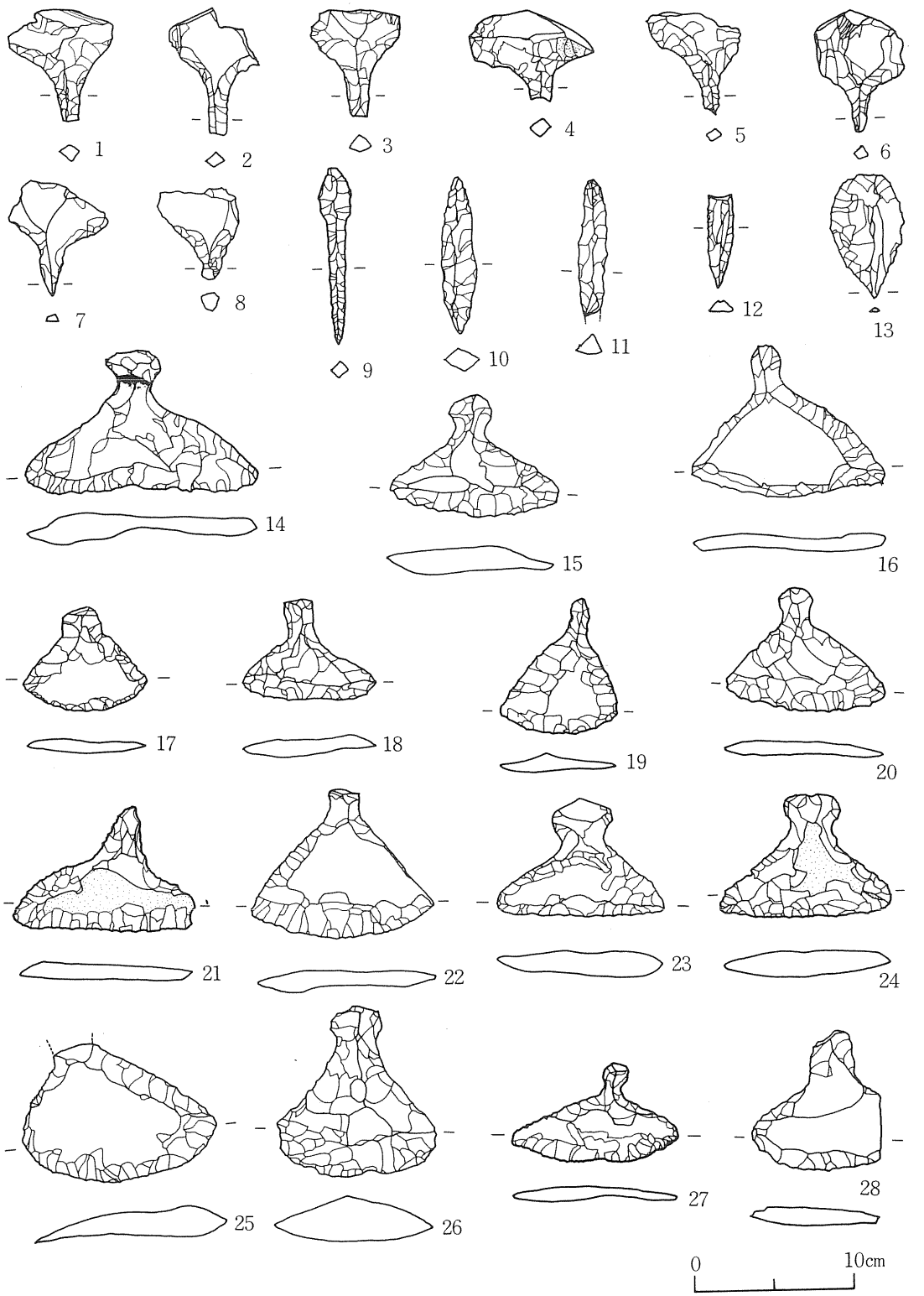
出土石器の中では最も数が多く、大小さまざまである。片面、両面に１～３の凹をもつものなどがあり、石質は安山岩製が多く、凝灰岩、花崗岩、閃緑岩製のものもある。

敲石・磨石（第68図14～21）

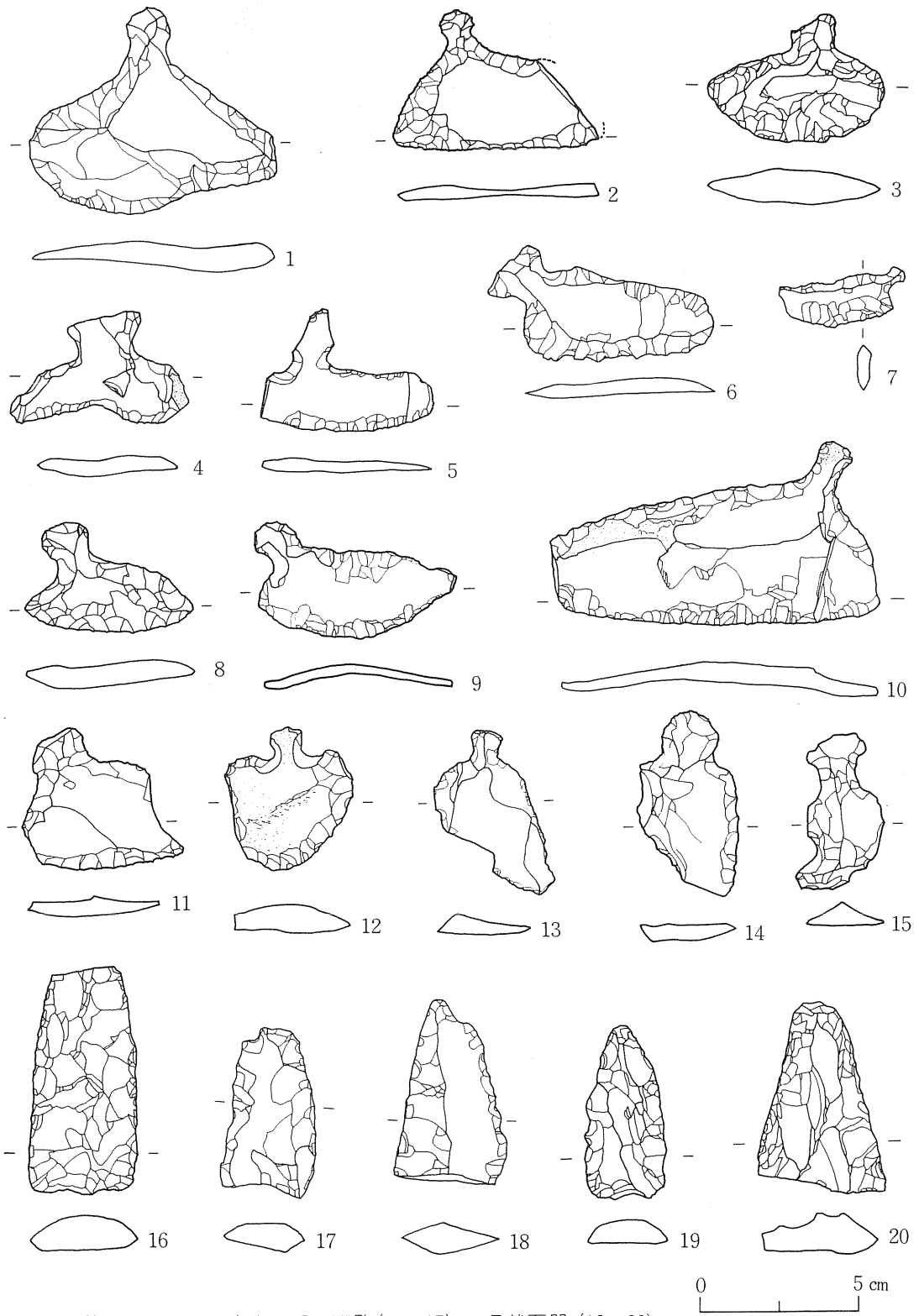
安山岩、凝灰岩、花崗岩、硬質頁岩製のもので部分的に全体的に磨滅している。19の磨石には全面にベニガラの塗布がみられ、両面中央部の擦痕の部分はなく、ベニガラが楕円形になり良く残っている。



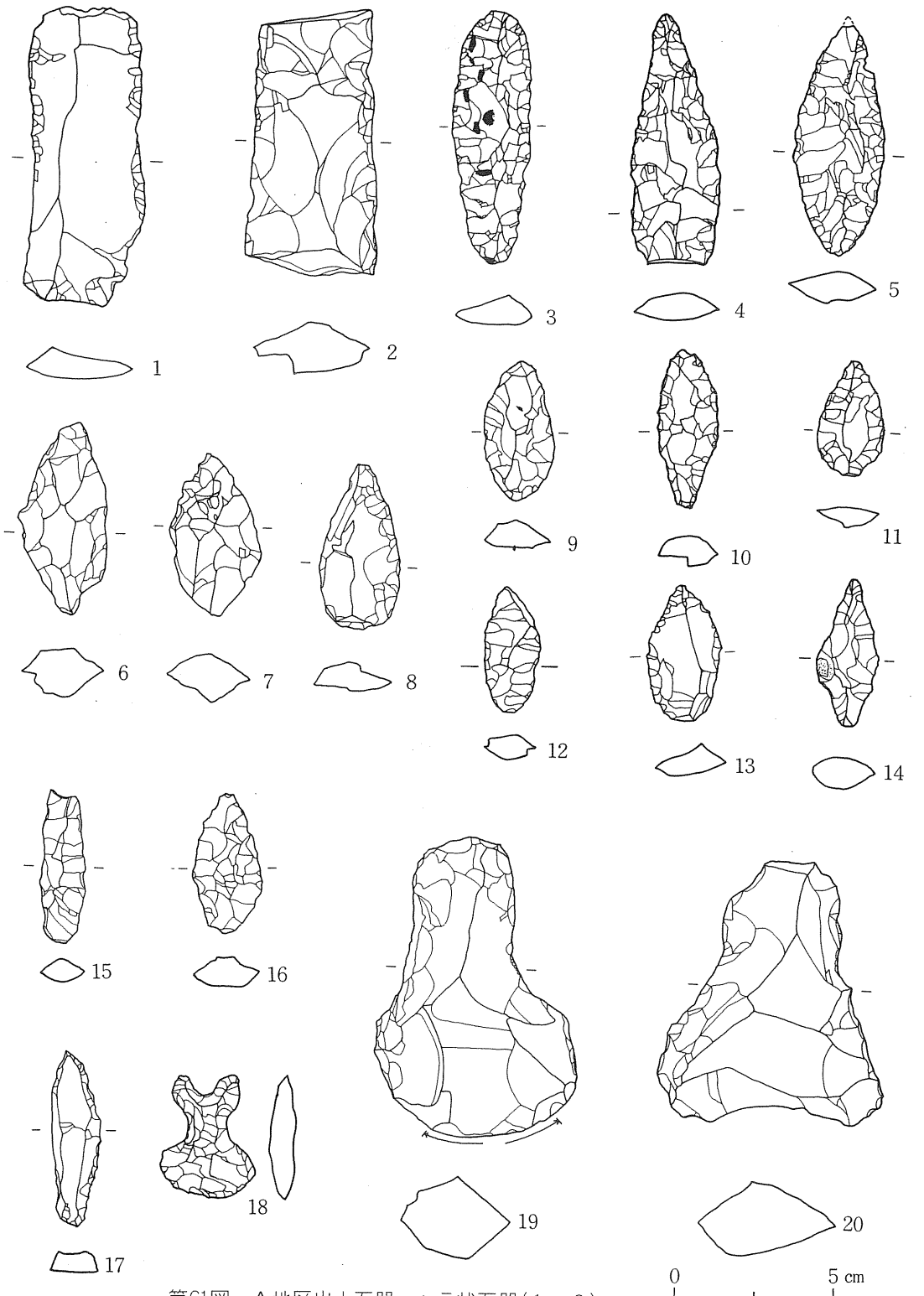
第58図　A地区出土石器　石鏃



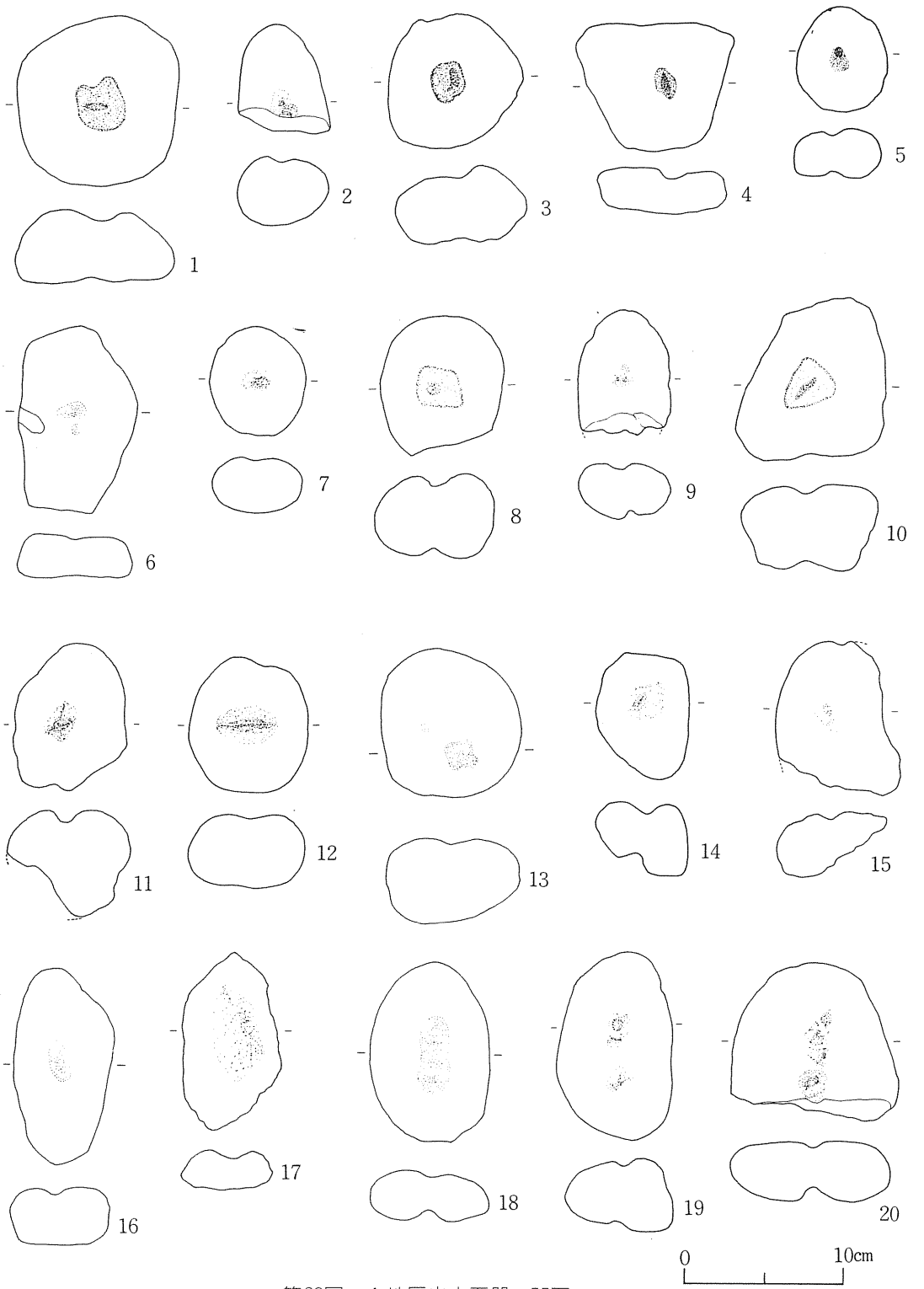
第59図　A地区出土石器　石錐(1～13)・石匙(14～28)



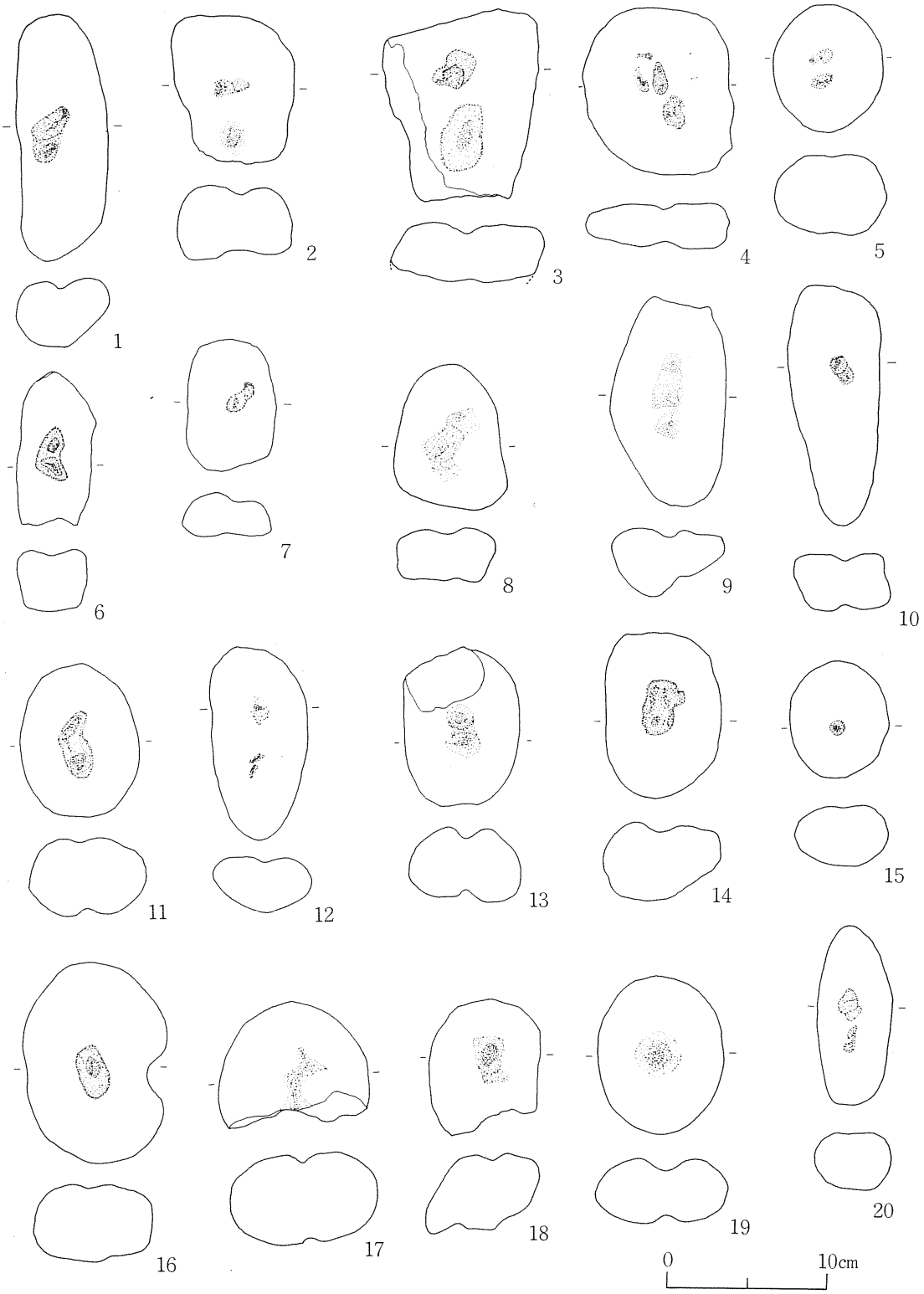
第60図　A地区出土石器　石匙(1～15)・ヘラ状石器(16～20)



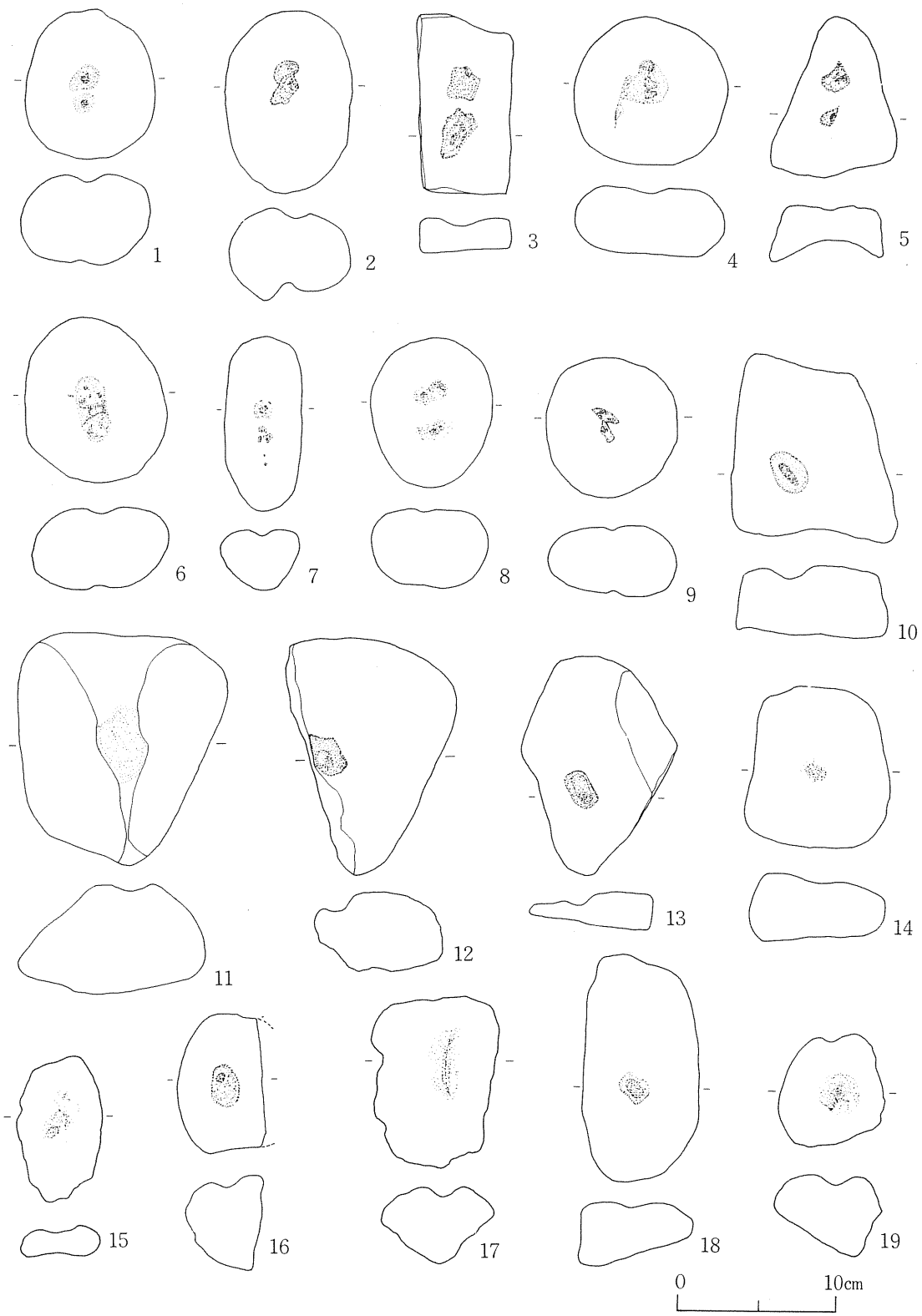
第61図　A地区出土石器　ヘラ状石器(1～3)・
槍先状石器(4～1)・ 削器(17)・異形石器 (18～20)



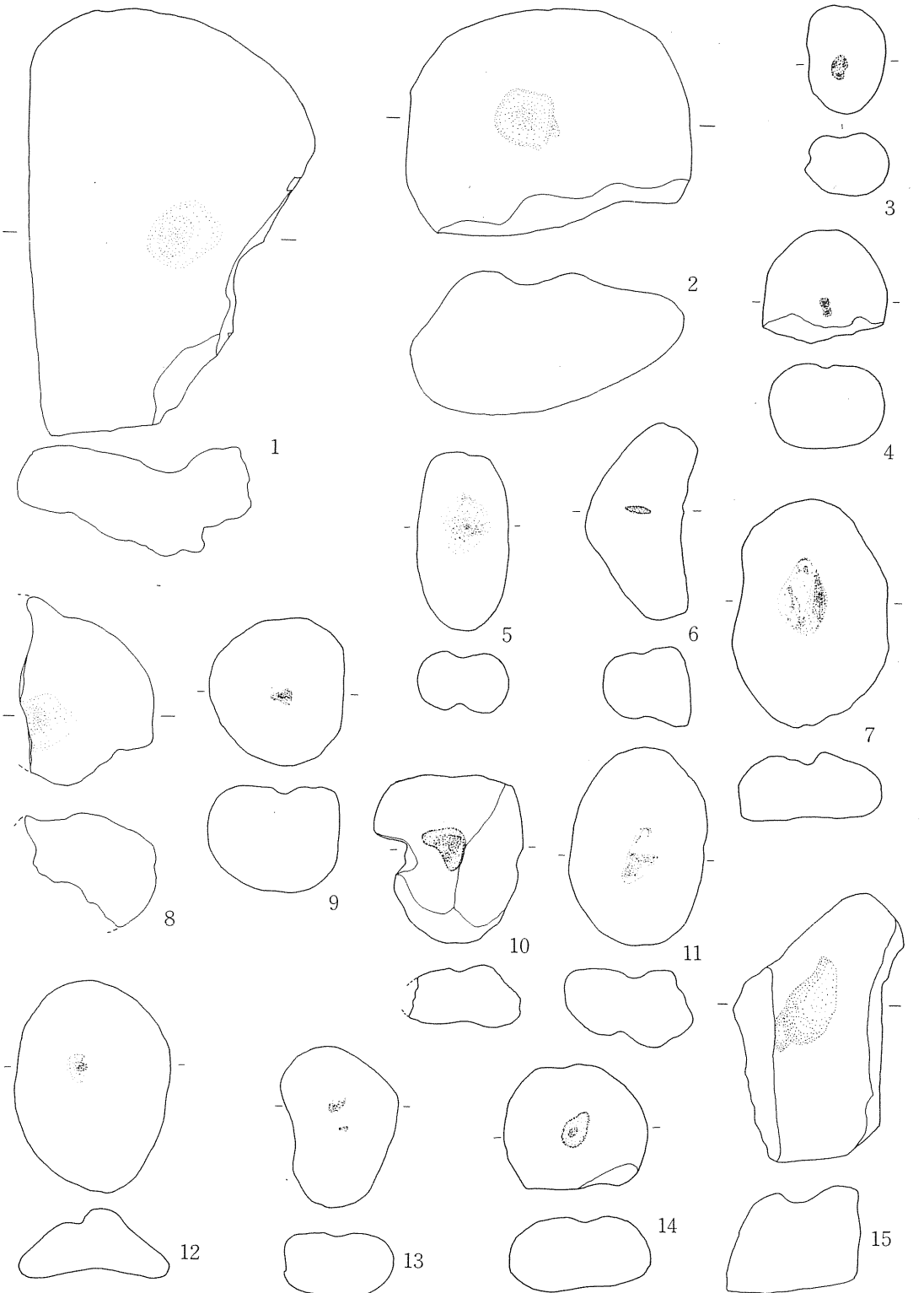
第62図　A地区出土石器　凹石



第63図　A地区出土石器　凹石



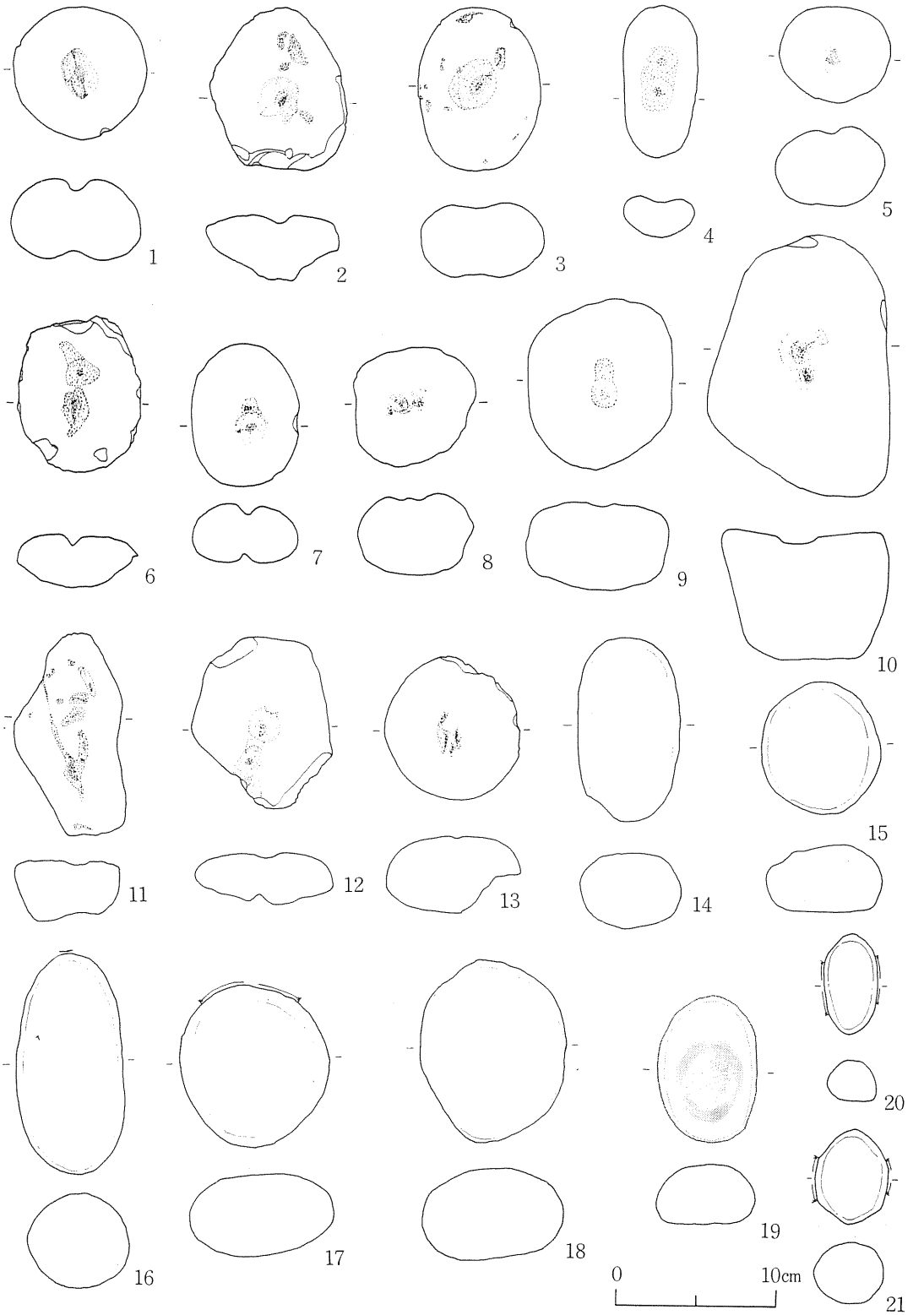
第64図　A地区出土石器　凹石



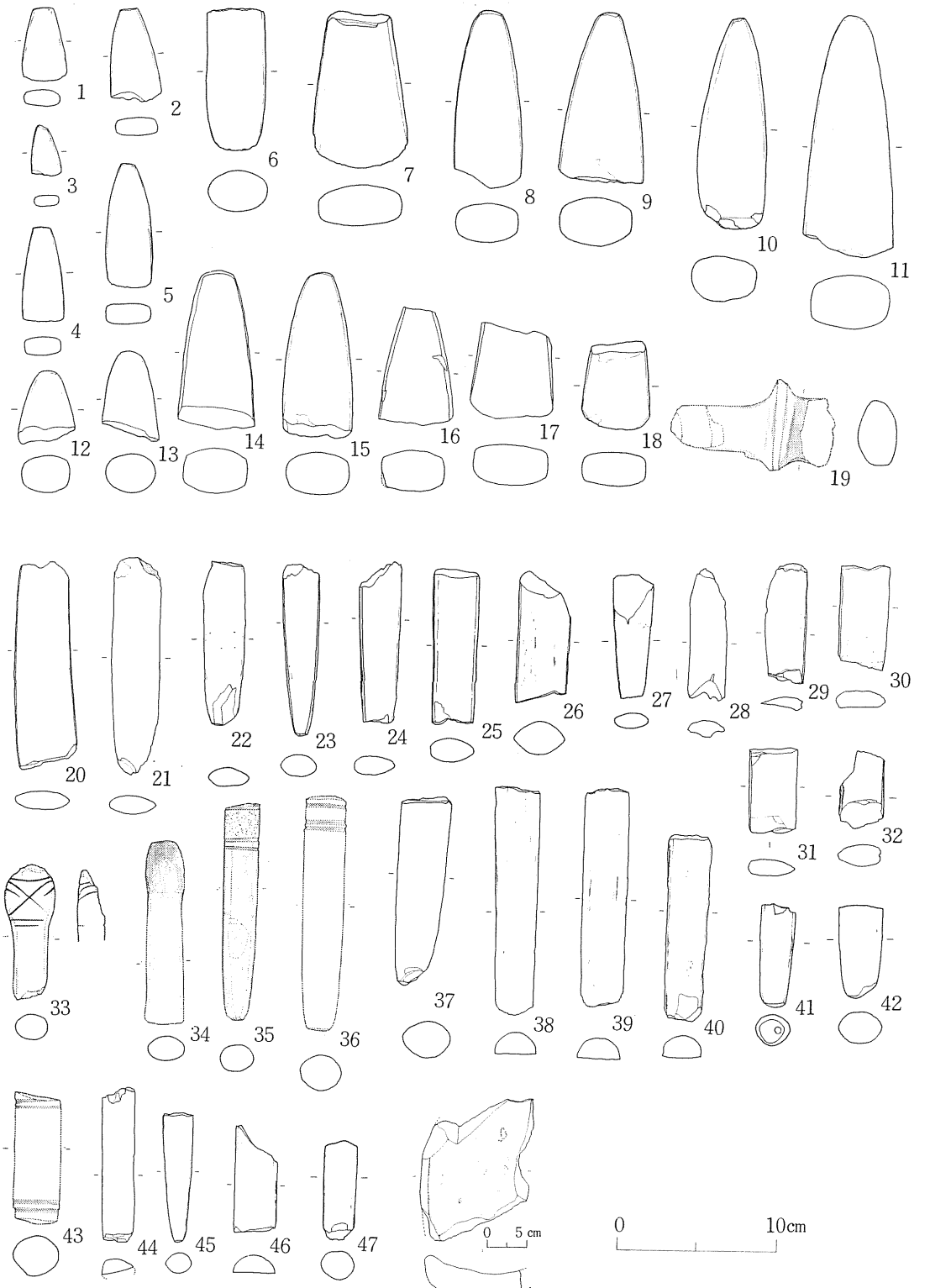
第65図　A地区出土石器　凹石

第66図　A地区出土石器　凹石

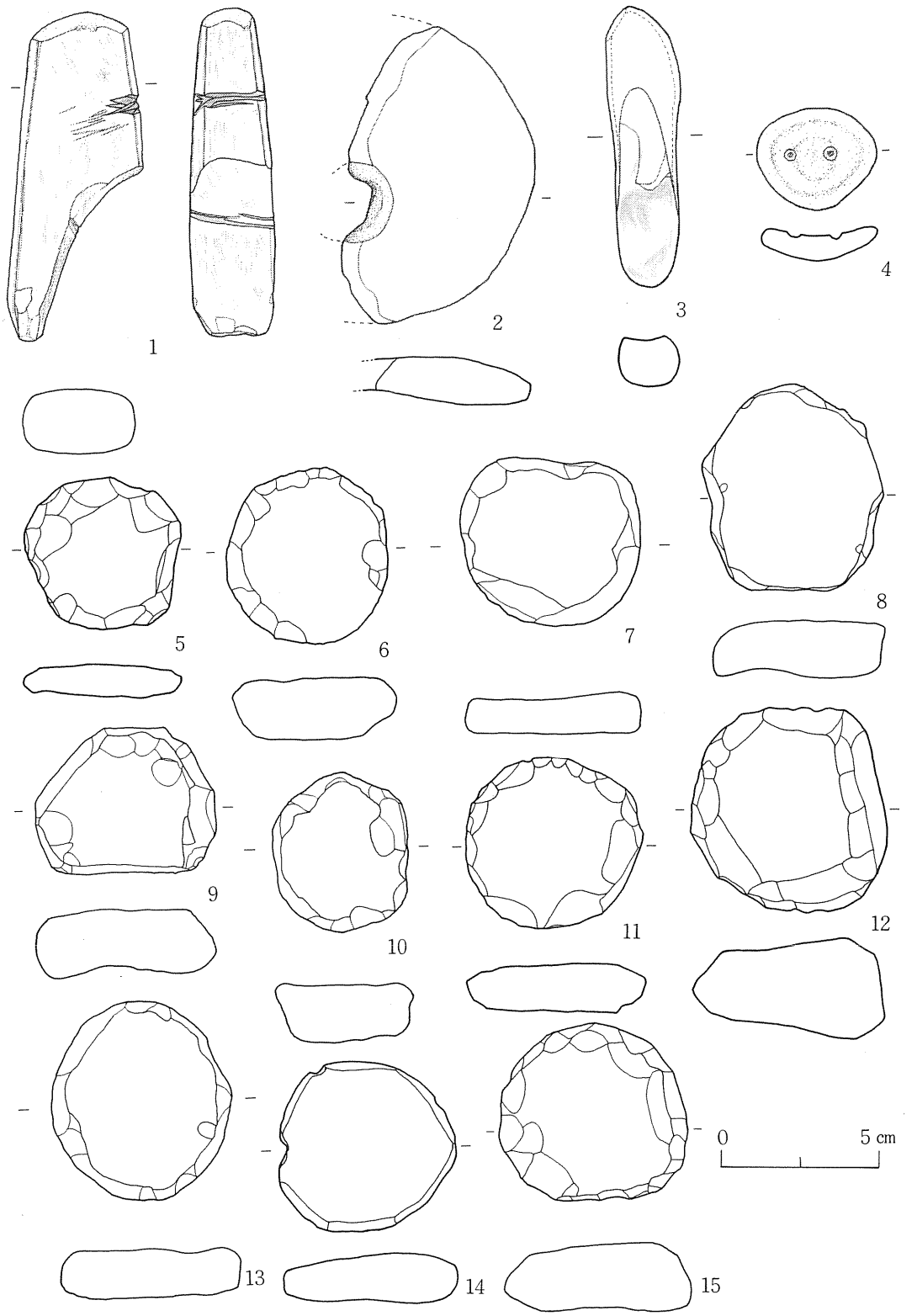
第67図　A地区出土石器　凹石



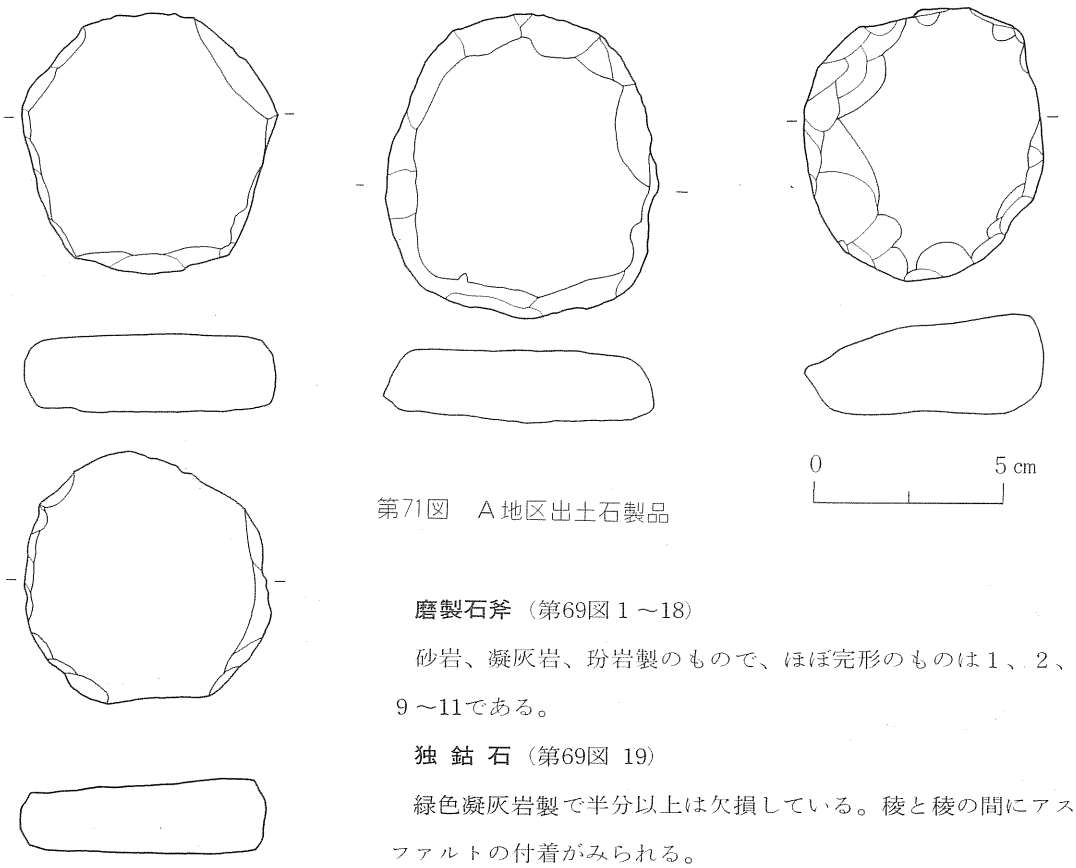
第68図　A地区出土石器　凹石(1～13)・敲石磨石(14～21)



第69図　A地区出土石器　磨製石斧(1～18)・独鈷石(19)・
石剣(20～32)・石棒(33～47)・石皿(48)



第70図　A地区出土石製品



第71図　A地区出土石製品

磨製石斧（第69図１～18）

砂岩、凝灰岩、玢岩製のもので、ほぼ完形のものは１、２、９～11である。

独 鈷 石（第69図 19）

緑色凝灰岩製で半分以上は欠損している。稜と稜の間にアスファルトの付着がみられる。

石　　剣（第69図20～32）

24の緑色凝灰岩製のほかは灰色の粘板岩製で、全て欠損し、表面に擦痕がみられる。

石　　棒（第69図33～47）

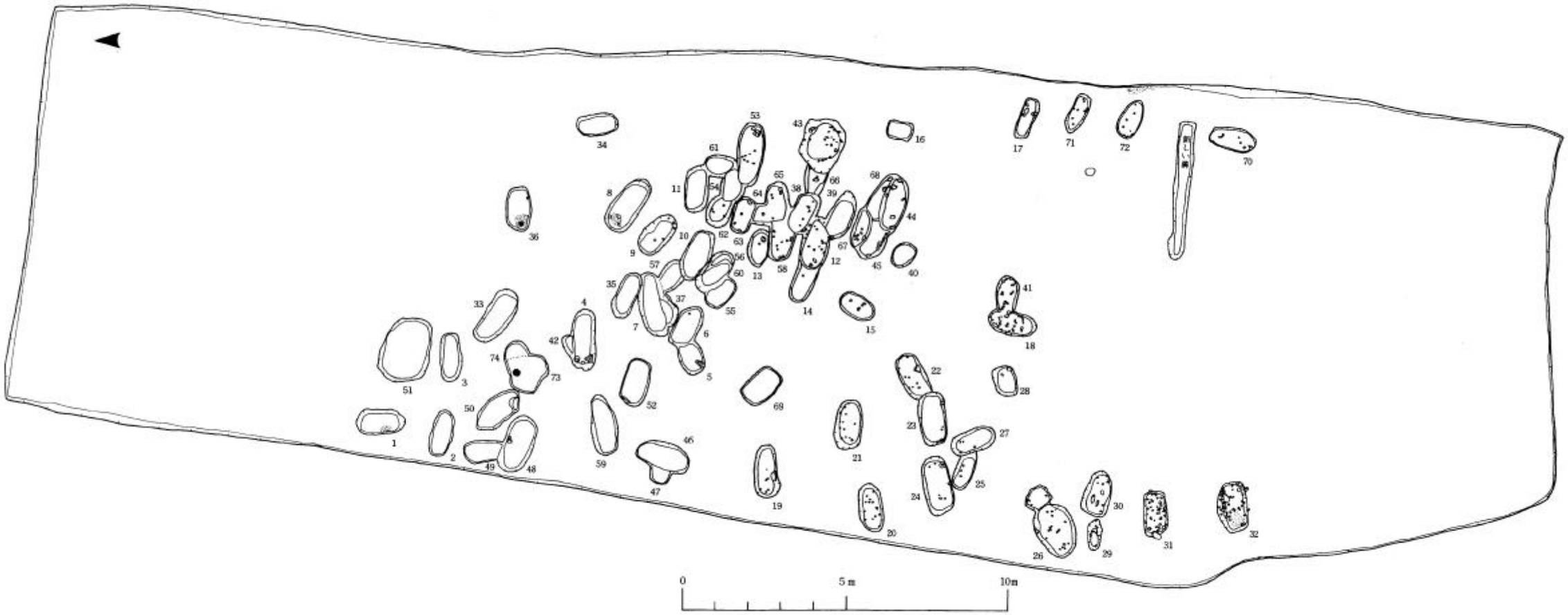
粘岩製のものが多く、半円状に割れていたり、いずれも欠損しているものばかりである。33は結晶片岩製で頭部に刻線がある。34は流紋岩製で頭部全体が火を受けたようで、黒っぽく多少軟かくなっている。

石　　皿（第69図 48）

凝灰岩製のもので、大部分が欠損している。

石 製 品（第70図１～15　第71図１～４）

１は緑色凝灰岩製で、本来は磨製石斧であったと思われるものであるが、石斧の欠損後、側面および残部に刻線を１～２条入れたものである。用途は不明である。２は環状石製品で半分ほど欠損している。３は細長い河原石を利用したもので、半分ほどにベニガラの付着（塗られているのかもしれない）がみられる。４は河原石を利用したボタン状の石製品で二つの穴はどちらも途中まで穿ってある。第70図４～15、第71図１～４は円板状石製品で、石質は安山製である。（９は頁岩）



第72図　B地区遺構図

2.B地区

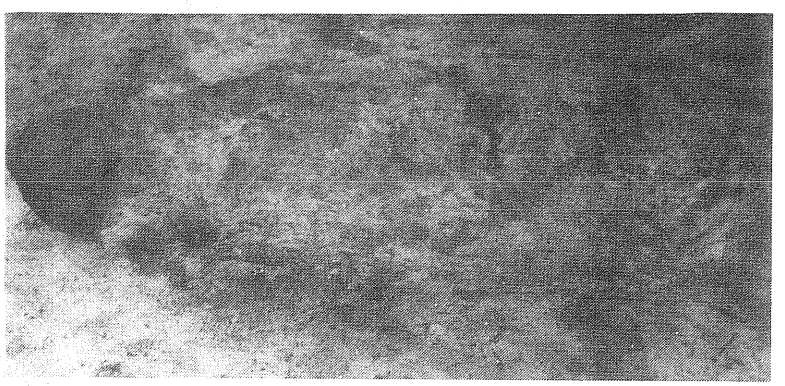
調査面積　600㎡

校舎の東から北東側に沢が入り込んでいる。この沢は丹土沢と呼ばれ、成分は不明だが赤色の土が採集される所であるらしい。この沢より約35m西側の地域が調査区である。この調査は校舎のある台地と比高が約5～10mほどあり、南東に緩傾斜している所である。発見された遺構は土坑墓群で調査区西の林の中に広がると考えられる。

土　坑　墓

1号土坑墓

調査区の最も北にあり、坑口部は 147cm×77cmで、小判形を呈し、長軸方向はN1°Wで、坑底中央部より西と南にベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。

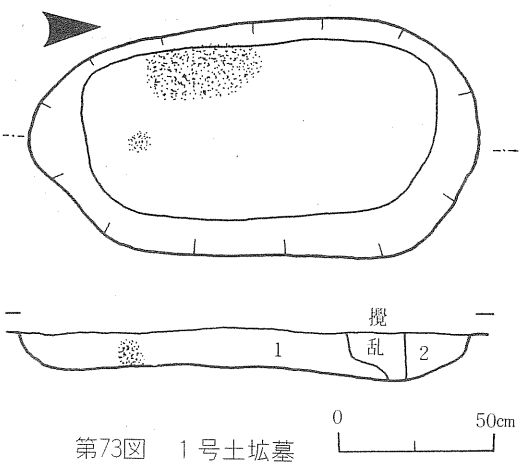


第73図　1号土坑墓（東→）

1：炭化物・褐色土粒が混入し、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物が混入する暗黄褐色土

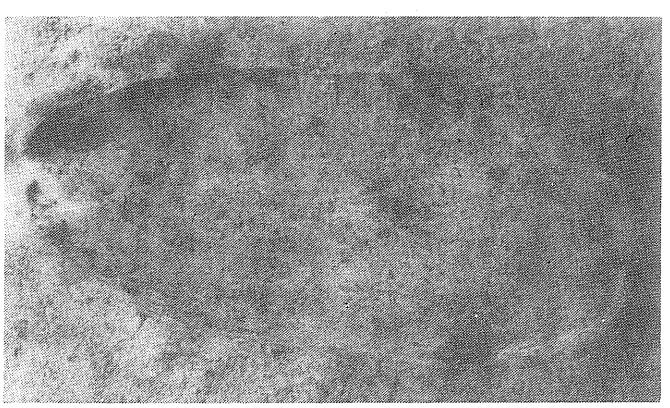
2号土坑墓

調査区北の1号の南側にあり、坑口部は 143cm×63cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN77°Wである。土坑を確認した時からベニガラがみられ、その範囲は40cm×50cmで坑底まで厚く散布していた。出土遺物はない。



第73図　1号土坑墓

1：炭化物が混入し、黄色味のある極暗褐色土
2：炭化物・黒色土ブロックが混入し、黄色味のある暗褐色土
3：炭化物が混入する極暗黄褐色土
4：炭化物が混入する暗褐色土
5：炭化物が少々混入する暗黄褐色土
6：炭化物が混入する暗黄褐色土

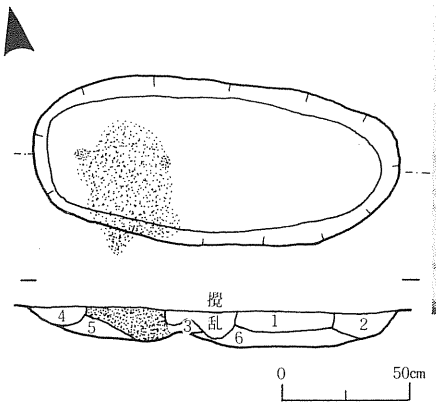


第74図　2号土坑墓（南→）

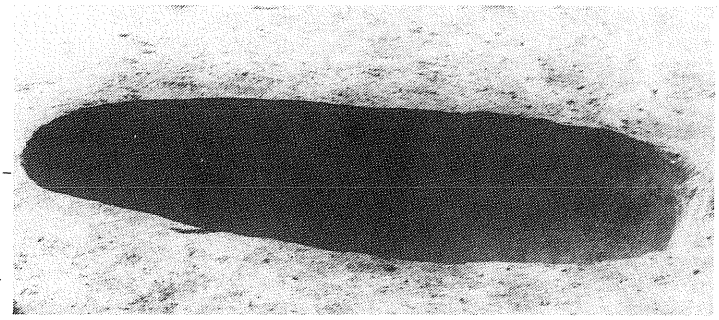
3号土坑墓

2号の東側にあり、坑口部は 145cm×65cmで、ほぼ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN90°Wである。坑底はゆるやかな鍋底状で比較的深いものである。出土遺物はない。

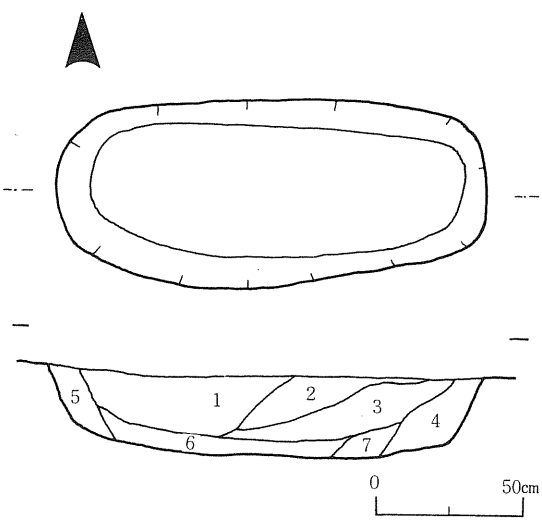
1：炭化物が多く混入する黒褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する黒褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物が混入する暗黄褐色土
6：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
7：炭化物が混入し褐色味の強い暗黄褐色土



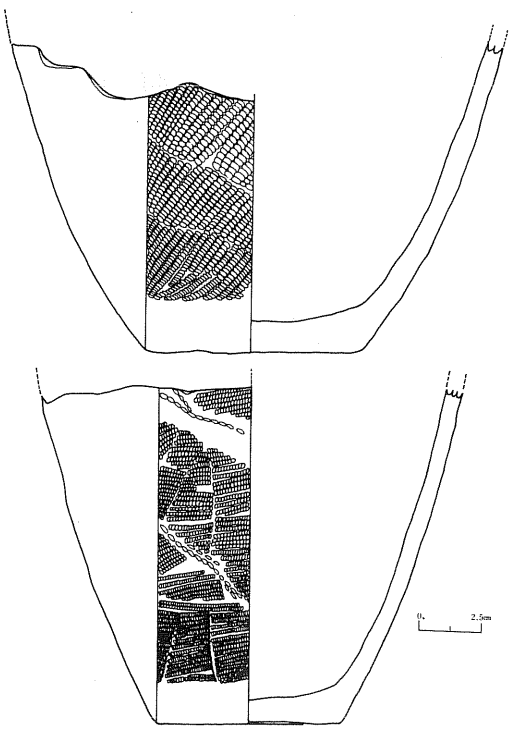
第75図　2号土坑墓



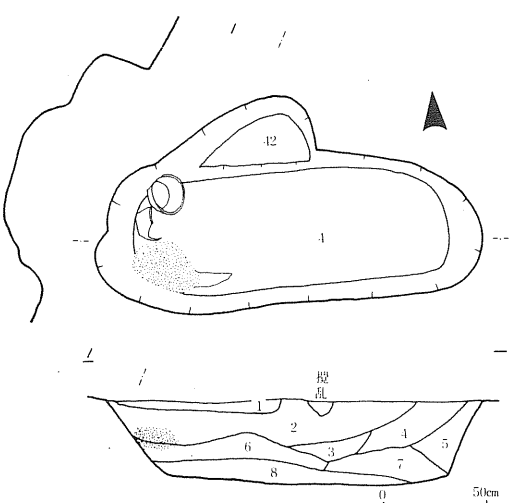
第76図　3号土坑墓（南→）



第77図　3号土坑墓



第78図　4号土坑墓出土土器



第79図　4・42号土坑墓

4号土坑墓

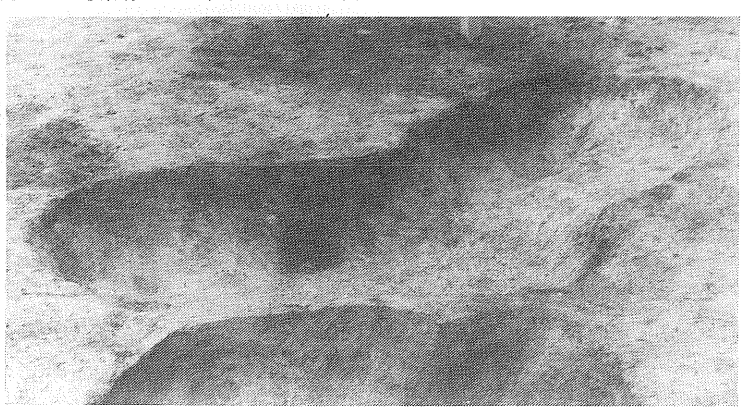
42号土坑墓と重複し、4号の方が新しい。坑口部は180cm×73cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN88°Wである。西側の埋土にベニガラの散布がみられ、坑底に接し、2個体の深鉢形土器と土器片（胴部）が検出された。深鉢形土器はいずれも粗製で口縁部を欠いている。

1：黒褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する極暗褐色土
3：炭化物・ロームブロックが混入する暗褐色土
4：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
5：炭化物・ローム粒子が混入する暗褐色土

6：炭化物・ローム粒子が混入する極暗黄褐色土　7：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄色土　8：炭化物が混入し、少々硬い極暗褐色土

5号土坑墓

調査区中央部にあり、6号と重複している。坑口部は約120cm×71cmで、小判形を呈すると思われる。長軸方向はN108°Wである。西側のベニガラは土坑確認の時からみられたもので坑底ではみられなかった。出土遺物はない。



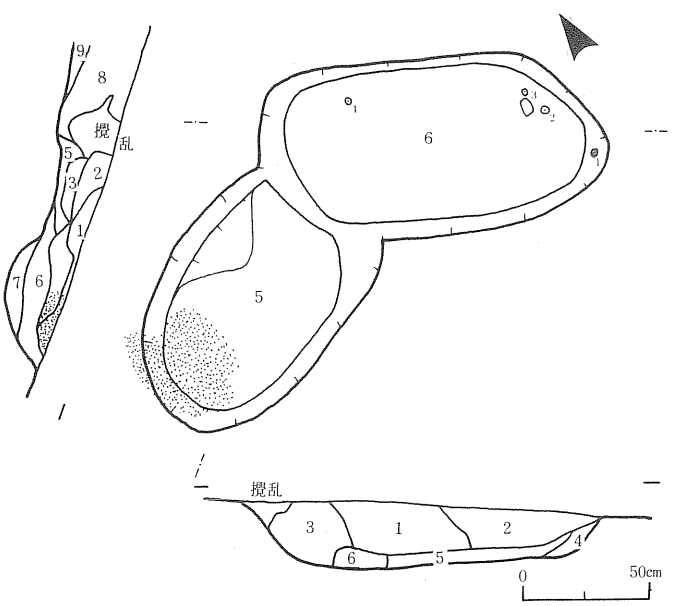
第80図　5号・6号土坑墓（北→）

1：炭化物が混入し、やや褐色味の強い黒褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入し、やや黄色味のある極暗褐色土
3：ロームブロック
4：褐色味の強い暗褐色土
5：炭化物が混入し、比較的柔かい暗黄褐色土
6：炭化物・ロームブロックが混入する暗黄色土
7：やや汚れのある黄色土
8：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味がやや強い暗黄褐色土
9：炭化物・ローム粒子が混入し、硬くしまっている暗黄褐色土

6号土坑墓

5号と重複し、5号より新しい。坑口部は140cm×70cmで、小判形の変形を呈し、長軸方向はN60°Wである。東、北壁寄りから小玉が4個検出された。いずれも緑色凝灰岩製のものである。

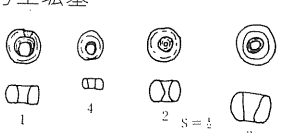
1：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混し、やや黄色味のある暗黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味が強い暗黄色土
4：ロームブロック
5：炭化物・ローム粒子が混入し、硬くしまり、やや黄色味の強い暗黄褐色土
6：炭化物・暗黄褐色土が少々認められる。ロームブロック



第81図　5・6号土坑墓

7号土坑墓

調査区中央部にあり、35号、37号、57号土坑墓と重複する。坑口部は195cm×約80cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN100°Wである。深さは土坑確認面から約40cmを測る。新旧の関係は35→7号→37号である。出土遺物はない。

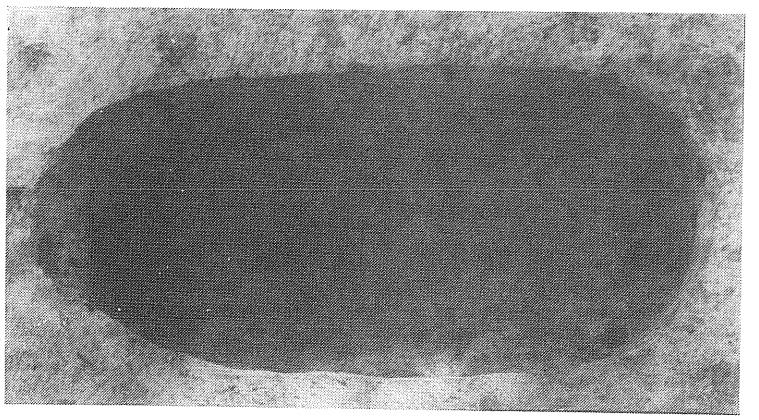


第82図　6号土坑墓出土小玉

1：炭化物・黒色土粒子が混入し、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄褐色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物が混入し、硬くしまっており、黄色味のある暗褐色土

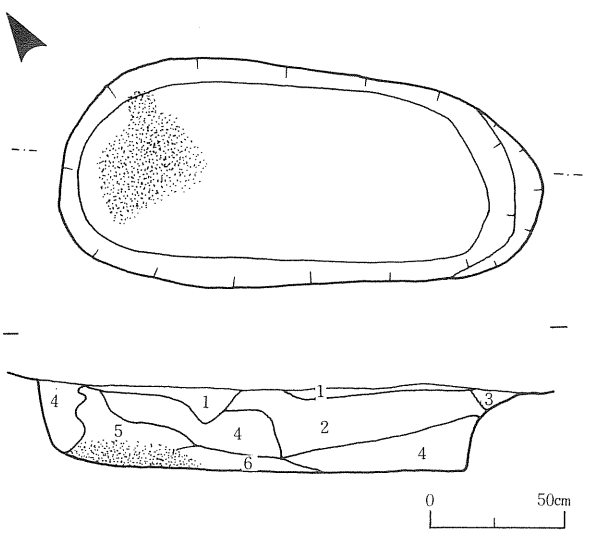
8号土坑墓

調査区北東にあり、坑口部は 180cm×80cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN54°Wである。坑底は平坦で北西に30cm×40cmのベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。



第83図　8号土坑墓（北→）

1：比較的柔かい黒褐色土
2：炭化物が混入している汚れた暗黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する黄色粒土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物・ローム粒子が混入する黄色粒土
6：炭化物が混入し、硬くしまっている黄褐色土

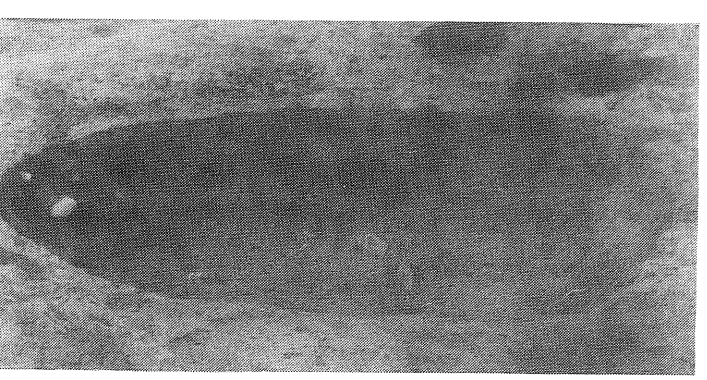


第84図　8号土坑墓

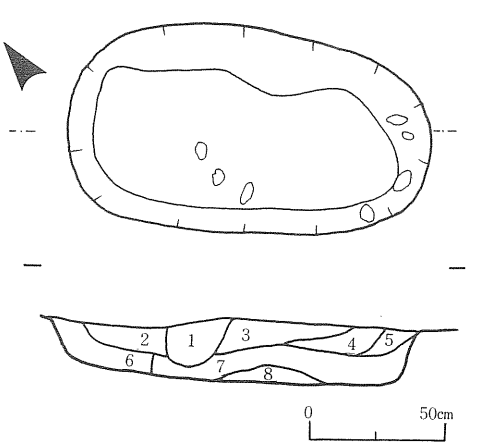
9号土坑墓

8号の南西にあり、坑口部は 147cm×78cmで、小判形を呈し、長軸方向はN51°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
2：炭化物が混入し、汚れた黄褐色土
3：炭化物が混入する極暗褐色土
4：炭化物・ローム粒子が多く混入する暗黄褐色土
5：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
6：炭化物が混入する暗褐色土
7：炭化物が混入し、黄色味のある暗褐色土
8：炭化物が混入する黄褐色土



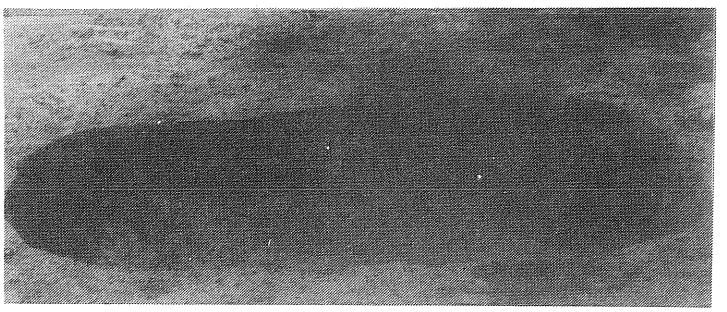
第85図　9号土坑墓（北→）



第86図　9号土坑墓

10号土坑墓

４Ａ１、４Ｂ１、４Ａ２グリッドは重複する土坑墓の多い所で、この10号もその中にある。坑口部は 160cm×80cmで、ほぼ小判形を呈し、長軸方向はＮ65°Ｗである。壁はほぼ直立し、深さは35cmほどである。57号と重複し、56号、60号と接する。57号より新しい。出土遺物はない。



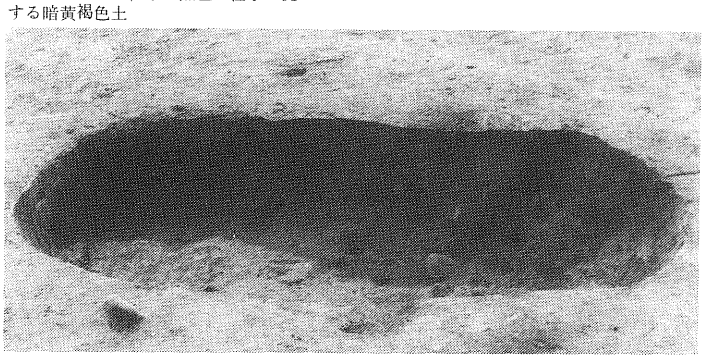
第87図　10号土坑墓（南→）

第161図

1：炭化物が混入し、少々硬い暗黄色土
2：炭化物が混入し、少々褐色味のある暗黄色土
3：炭化物が混入し、少々汚れた黄色土

11号土坑墓

10号の東側にあり、61号と重複し、坑口部は 140cm×70cmで変形の小判形を呈し、61号により切られている。長軸方向はＮ87°Ｗである。出土遺物はない。



第88図　11号土坑墓（北→）

第160図

1：炭化物・ローム粒子が混入し、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物が混入し、少々硬くしまっている暗黄色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土

12号土坑墓

14号、39号と重複し、坑口部は約 165cm×82cmで、隅丸長方形を呈すると思われる。長軸方向はＮ76°Ｗである。土坑確認面より40cmの深さで坑底は平坦である。新旧関係は39号→12号→14号の順に古い。出土遺物はない。

第89図　12号土坑墓（南→）

第161図

1：炭化物・ローム粒子が多く混入し、汚れのある暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入し、汚れのある暗黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入する極暗黄褐色土
5：炭化物・ローム粒子・黒色土粒子が混入する暗黄褐色土
6：２層と同じ
7：炭化物が混入する暗黄褐色土
8：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄褐色土
9：炭化物が混入し、硬くしまっている暗黄褐色土

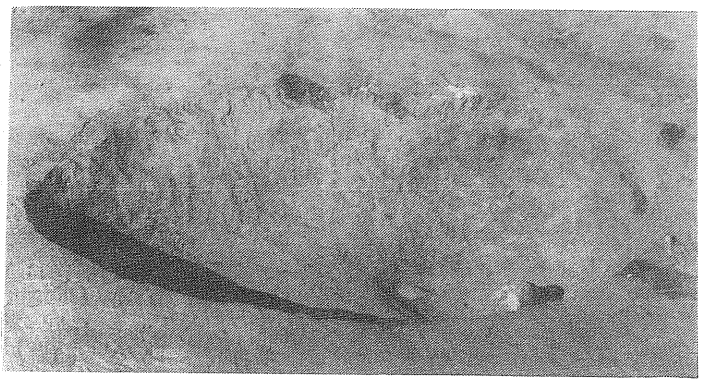
第160図

1：炭化物、黒色土が混入する汚れた暗黄褐色土
2：黒色土、黄褐色土が混る。
3：炭化物が混入する黄褐色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物が混入する暗黄色土
6：炭化物が混入し、硬くしまっている極暗黄褐色土

13号土坑墓

58号と重複し、坑口部は 115cm×68cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN82°Wである。坑底はほぼ平らで出土遺物はない。

1：炭化物が混入し、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物が混入する暗黄色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する極暗黄褐色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土



第90図　13号土坑墓（南→）

14号土坑墓

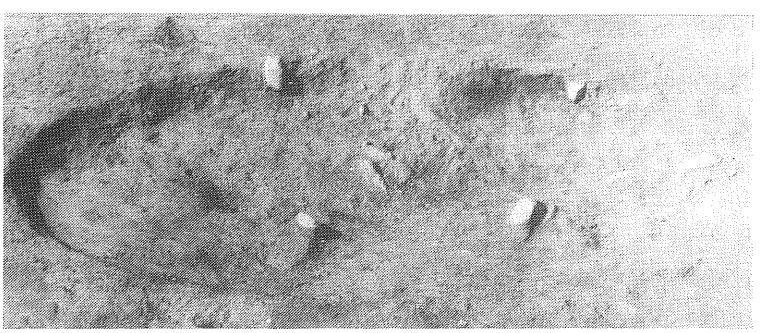
12号と重複し、12号より古い。坑口部は約140cm×67cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN70°Wである。坑底は平担で出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗黄褐色土　　2：炭化物・ローム粒子が混入する黄褐色土　　3：炭化物が混入する極暗黄褐色土

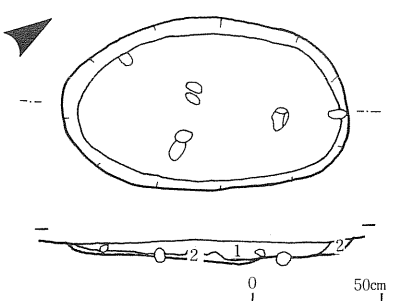
15号土坑墓

調査区中央部にあり、坑口部は 112cm×68cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN151°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物が混入し、少々黄色味のある暗褐色土
2：黄色土



第91図　15号土坑墓（東→）

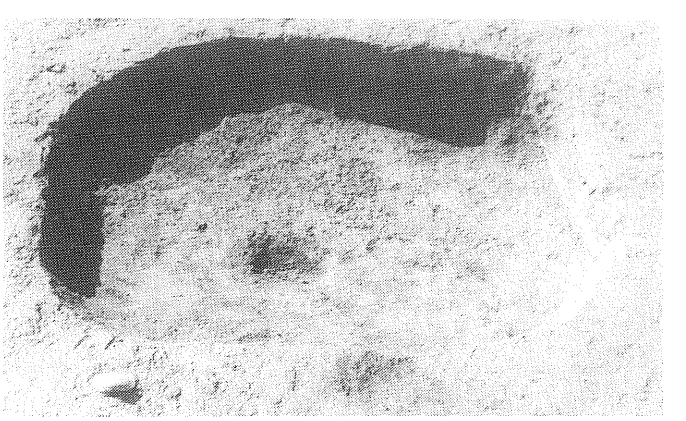


第92図　15号土坑墓

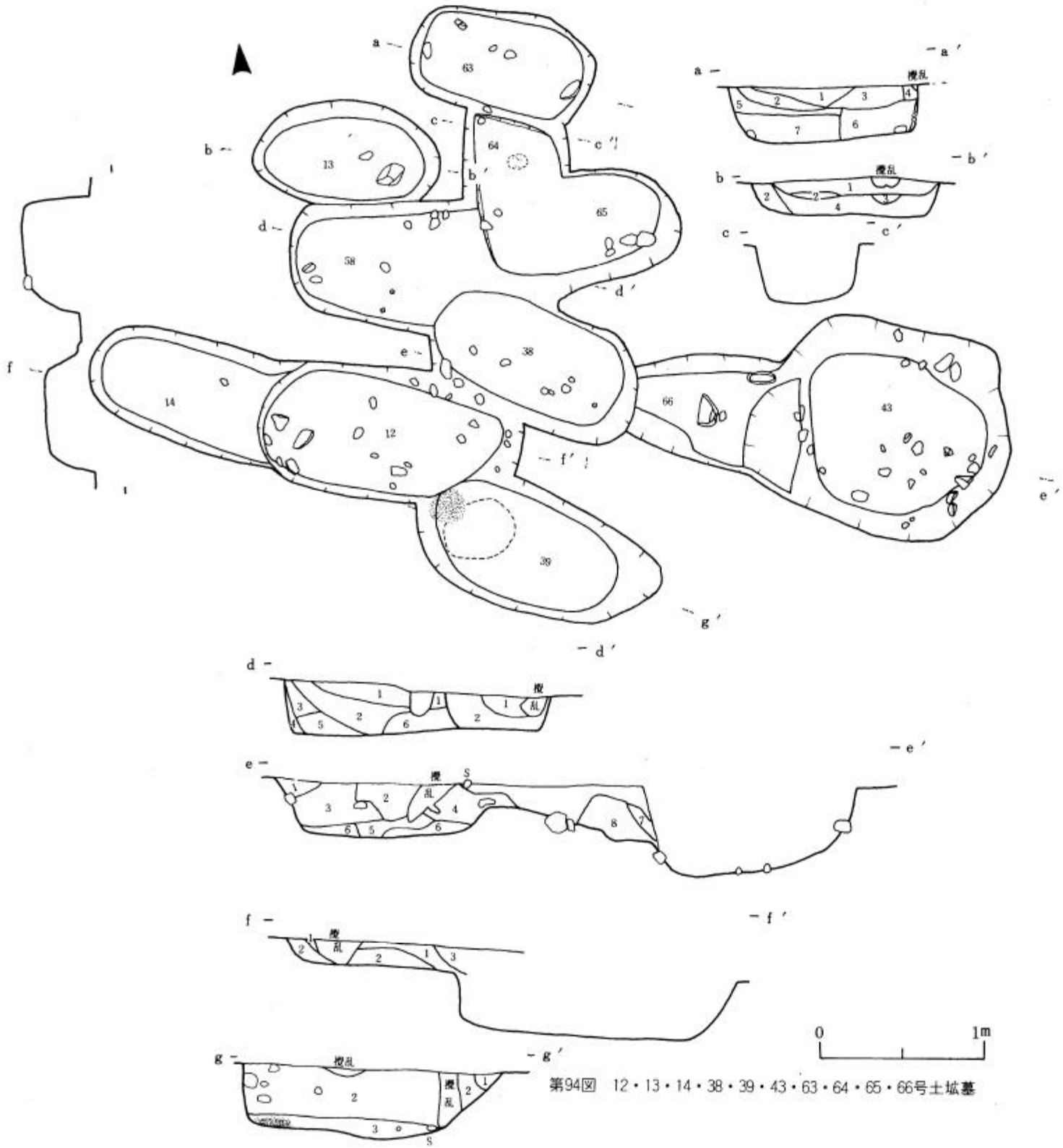
1：炭化物が混入し、少々硬い暗黄色土
2：炭化物が混入し、少々褐色味のある暗黄色土
3：炭化物が混入し、少々汚れた黄色土

16号土坑墓

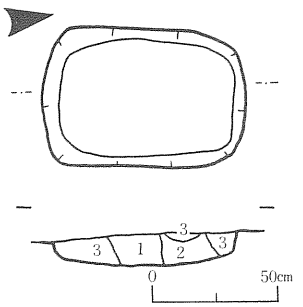
調査区中央部東側にあり、坑口部は80cm×55cmで、隅丸方形を呈し、長軸方向は168°Wである。出土遺物はない。



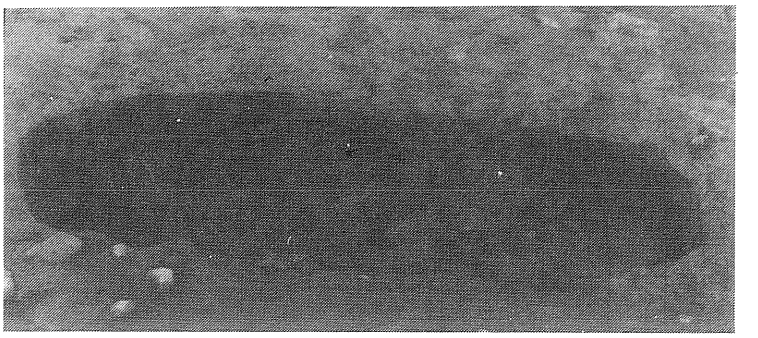
第93図　16号土坑墓（東→）



第94図　12・13・14・38・39・43・63・64・65・66号土坑墓



第95図　16号土坑墓

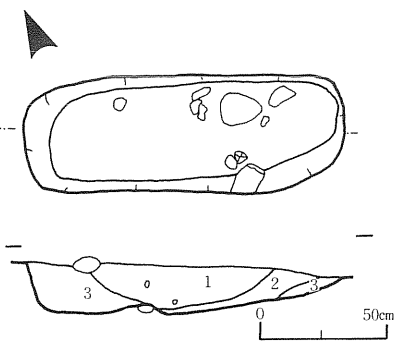


第96図　17号土坑墓（南→）

17号土坑墓

調査区南東、道路際にあり、坑口部は 120cm×47cmで、長い隅丸方形を呈し、長軸方向はN70°Wである。この土坑墓のある所はゆるやかに南東へ傾斜している。

1：炭化物・ローム粒子が混入し、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物が混入し、少々硬くしまっている暗黄色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土

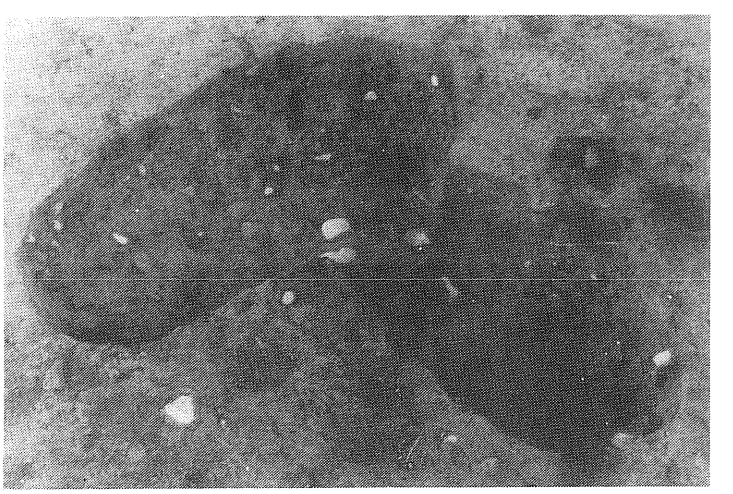


第97図　17号土坑墓

18号土坑墓

調査区中央南側にあり、41号と重複している。この土坑のある辺から地形は南に傾斜し、礫層が露出している場所である。埋土、坑底の礫は前述のものである。18号は41号より古く、坑口部は150cm×73cmで、小判形を呈し、長軸方向はN165°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
2：やや黄色味の強い暗黄褐色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、やや黄っぽい暗褐色土

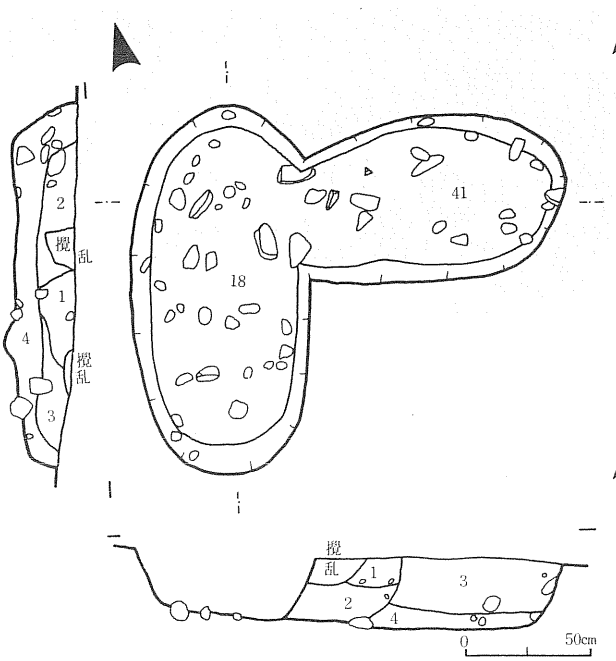


第98図　18号・41号土坑墓（南→）

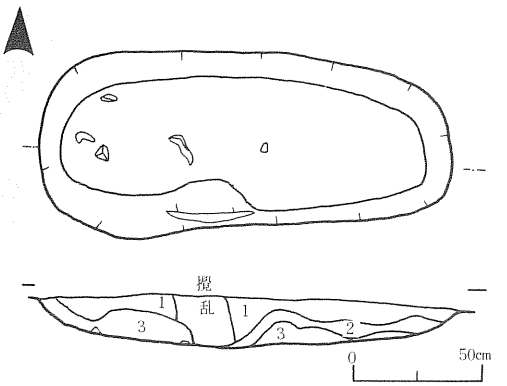
19号土坑墓

調査区中央西にあり、坑口部は160cm×70cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN89°Wである。出土遺物はない。

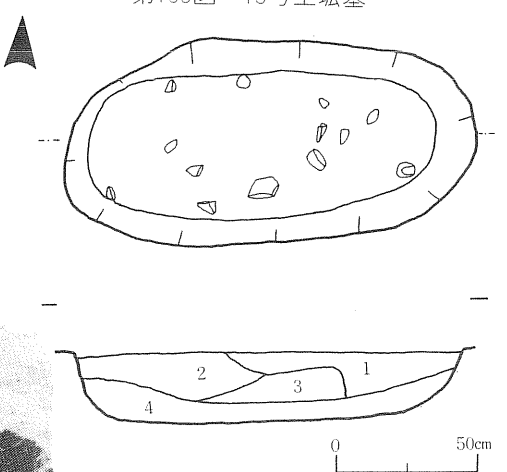
1：炭化物が混入する暗黄褐色土　　2：炭化物が混入し、粘土っぽい暗黄色土　3：黄色粘土



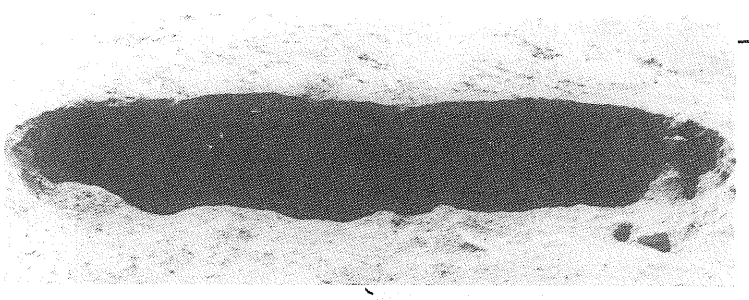
第99図　18・41号土拡墓



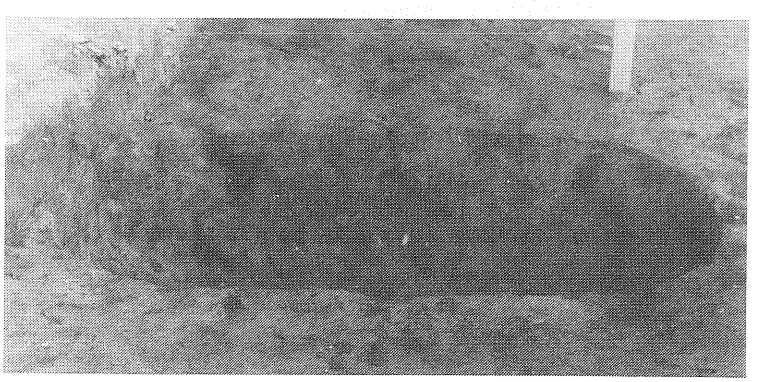
第100図　19号土拡墓



第102図　20号土拡墓



第101図　19号土拡墓（北→）



第103図　20号土拡墓（南→）

20号土拡墓

調査区中央西、19号の南にあり、坑口部は 146cm×72cmで、小判形を呈し、長軸方向はN97°Wである。坑底は平坦である。埋土より粗製深鉢形土器の口縁部（ＲＬ縄文）、石片が１点出土している。

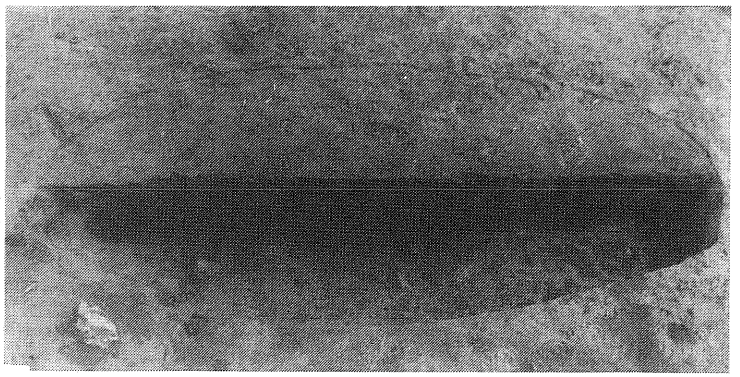
1：炭化物・ローム粒子・黒色土粒子が混入する極暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入する暗黄色土
4：炭化物が混入する極暗黄褐色土

第104図　20号土拡墓出土土器

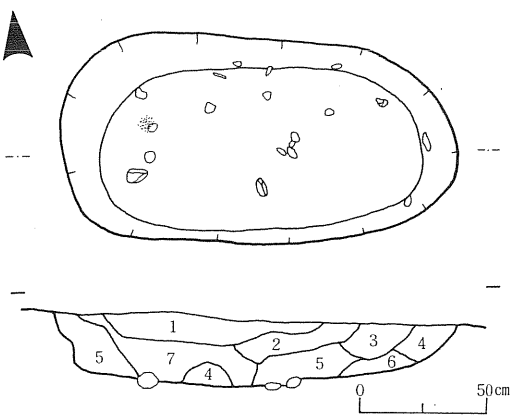
21号土坑墓

20号の東側にあり、坑口部は 155cm×80cmで、ほぼ小判形を呈し、長軸方向はN80°Wである。西にベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が多く混入する黒褐色土
2：黄褐色土
3：炭化物・黒色土が混入する暗褐色土
4：炭化物が混入する暗黄色土
5：炭化物が混入する暗黄褐色土
6：炭化物が混入し、褐色味の強い暗褐色土
7：炭化物が混入する極暗黄褐色土



第105　21号土坑墓（南→）



第106図　21号土坑墓

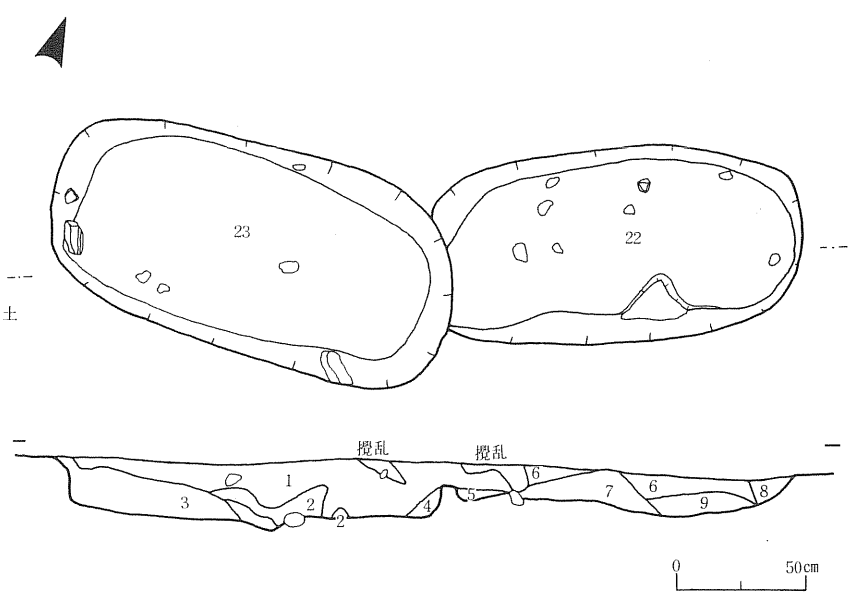
22号土坑墓

23号と重複し、23号より古い。坑口部は145cm×76cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN118°Wである。出土遺物はない。

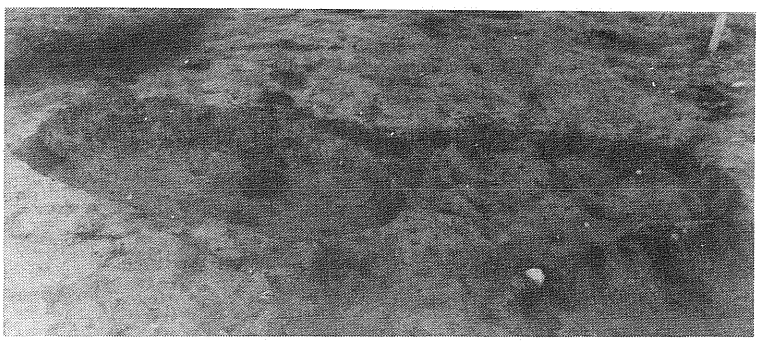
23号土坑墓

22号を切ってつくられている。坑口部は168cm×82cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN93°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味のある暗褐色土
2：炭化物・ローム粒が混入する暗黄褐色土
3：炭化物・ロームブロックが混入する暗黄褐色土
4：炭化物・灰色土が混入する暗黄色土
5：炭化物が混入し、灰色味のある暗黄色土
6：炭化物が混入する暗黄灰褐色土
7：ローム粒子が混入する黒色土黒色土
8：炭化物が混入する黄灰褐色土
9：炭化物・ローム粒子・灰色土が混入する暗黄色土



第107図　22・23号土坑墓

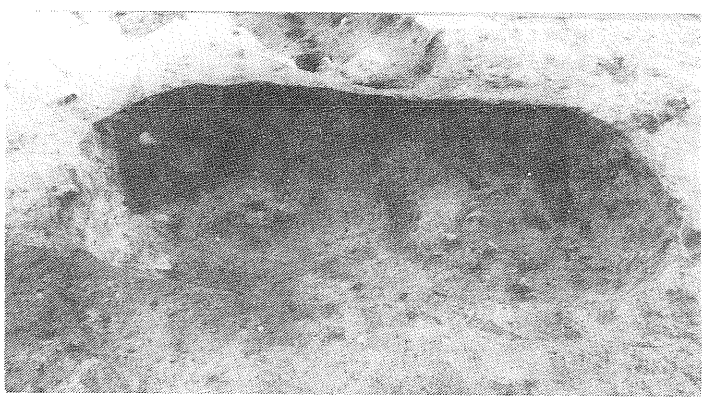


第108図　22号・23号土坑墓（右22号）（南→）

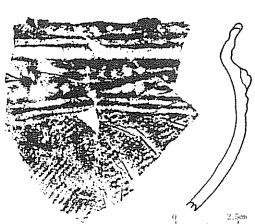
24号土坑墓

22、23号の西にあり、坑口部は 178cm×83cmで、ほぼ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN80°Wである。坑底西にベニガラの散布がみられた。東側坑壁近くに土器が検出された。土器は胴、底部であるが粗製深鉢形（RL縄文）で、非常にもろく、復元が出来ない程である。この土器とともに大洞BC式の台付鉢形土器（精製）の口縁部が検出された。

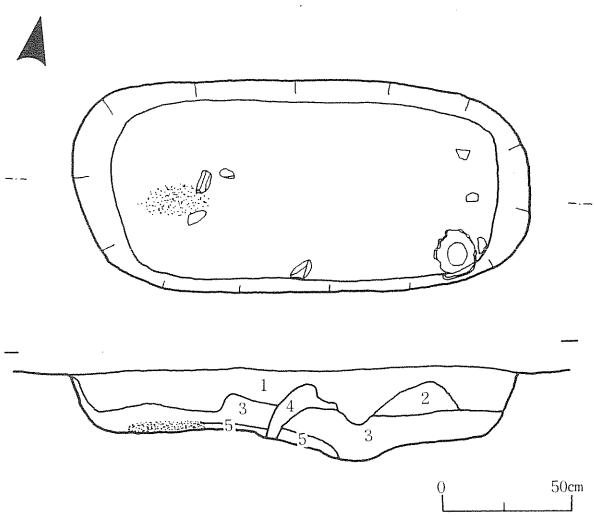
1：炭化物・少々ローム粒子が混入し、やや黄色味のある暗褐色土
2：炭化物が混入する黒褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味のある暗褐色土
4：炭化物・ローム粒子が混入する黒褐色土
5：炭化物が混入し、硬くしまっている暗黄褐色土



第109図　24号土坑墓（北→）



第110図　24号土坑墓出土土器



第111図　24号土坑墓

25号土坑墓

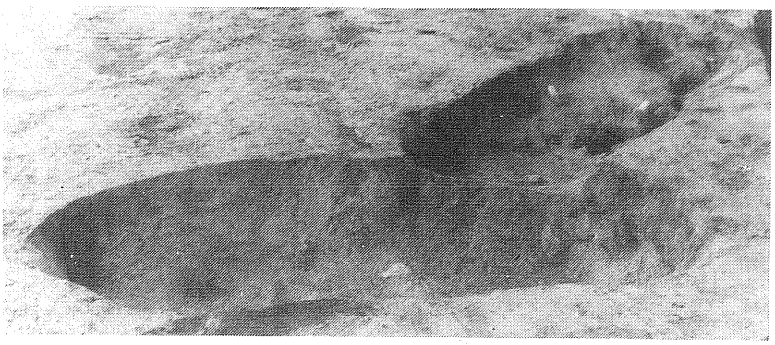
24号の南にあり、27号と重複している。坑口部は約 130cm×55cmで、小判形を呈し、長軸方向はN70°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗褐色土　2：炭化物が混入する暗黄褐色土

26号土坑墓

調査区南西のゆるやかな傾斜面にあり、坑口部は170cm×117cmで、比較的大きい楕円形を呈し、長軸方向はN112°Wである。遺物は土器片（粗製）が出土している。

1：炭化物・ローム粒子が混入し、
　やや黄色味のある暗褐色土
2：炭化物が混入する暗黄色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：炭化物・ローム粒子が混入し、
　黄色味のある暗褐色土
5：ロームブロック

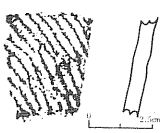


第112図　25・27号土坑墓(手前27号)(北→)

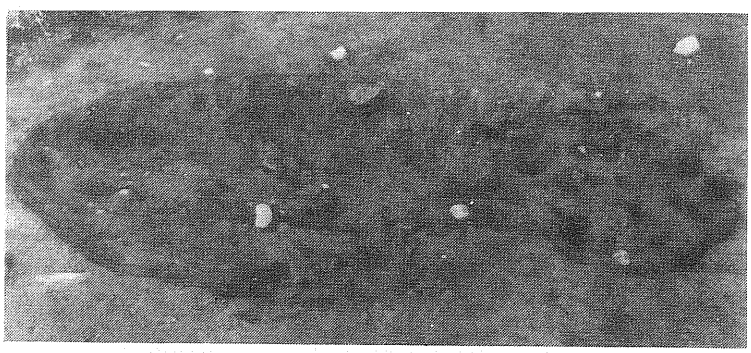
27号土坑墓

25号と重複し、25号より新しい。坑口部は 140 cm×70cmで、小判形を呈し、長軸方向はN20°Wである。出土遺物はない。

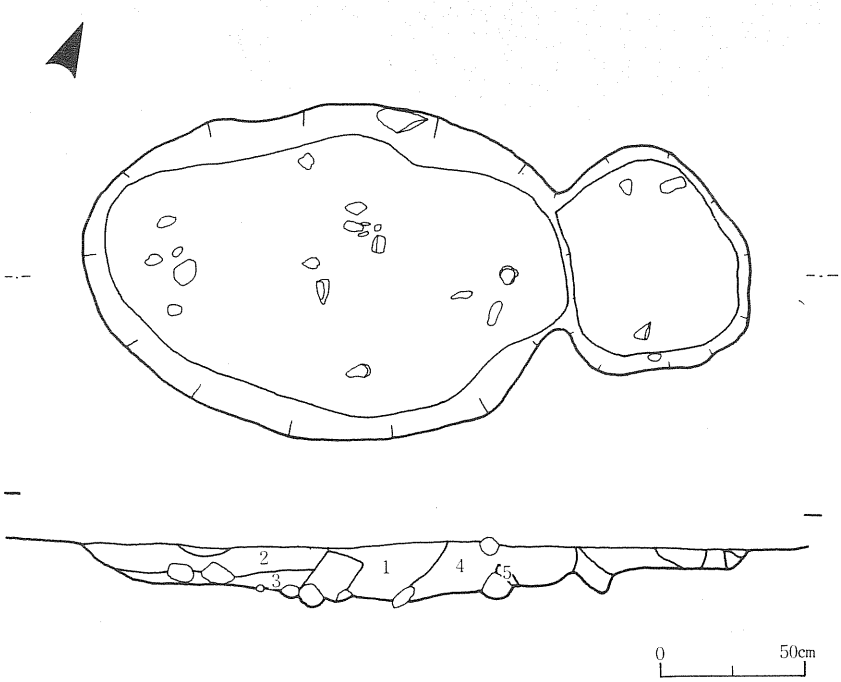
1：炭化物・黒色土が混入し、汚れた黄褐色土
2：炭化物が混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入する黒褐色土
4：炭化物が混入する極暗黄褐色土



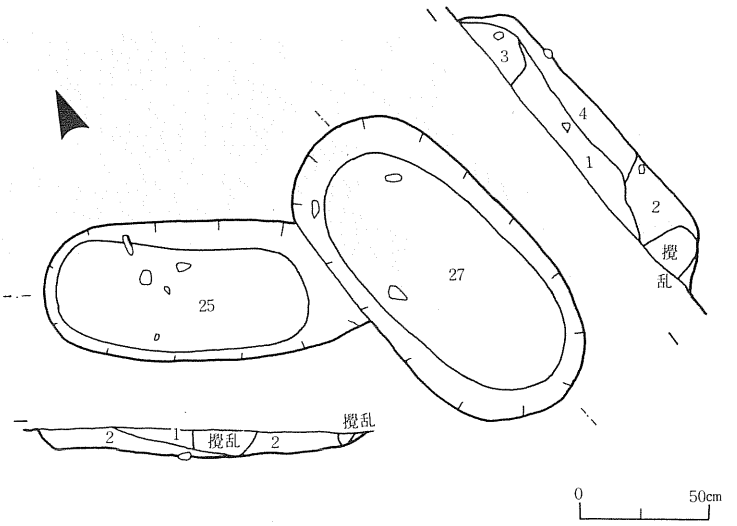
第114図
26号土坑墓出土土器



第113図　26号土坑墓（南→）



第115図　26号土坑墓

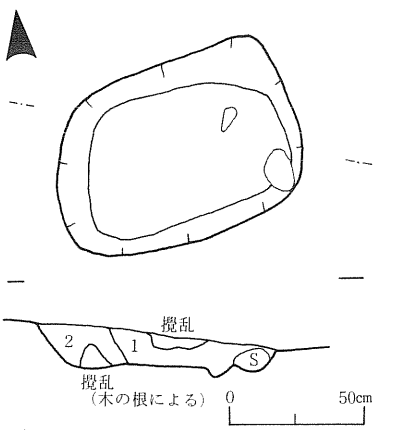


第116図　25号・27号土拡墓

28号土拡墓

27号の南東にあり、坑口部は95cm×67cmで、変形の隅丸方形を呈し、長軸方向はN118°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
2：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄褐色土



第117図　28号土拡墓

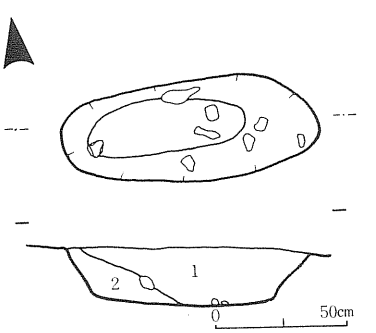
第118図　28号土拡墓（南→）

29号土拡墓

調査区南西、26号の南にあり、坑口部は97cm×38cmで、細長い小判形を呈し、長軸方向はN85°Wである。南坑口部に木の根が入り込んでいた。出土遺物はない。

1：炭化物が混入し、黄色土と黒褐色土が混り、ぼそぼそである
2：炭化物・大粒のロームが混入する黒褐色土

第119図　29号土拡墓（南→）



第120図　29号土拡墓

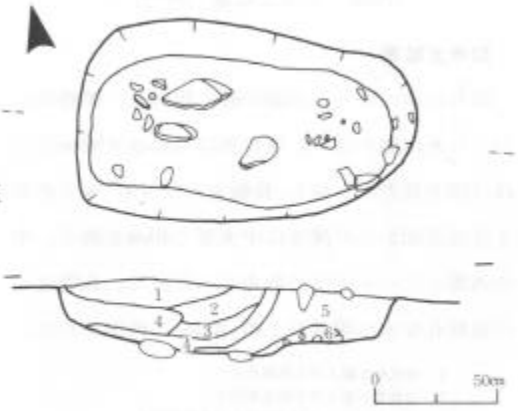
30号土坑墓

29号の東にあり、傾斜面である。坑口部は136cm×78cmで、東側坑壁は丸くなるが、隅丸長方形に分類した。長軸方向はN75°Wである。北西から小玉が1個出土した。緑色凝灰岩製のものである。他に土器片1点が出土している。

第121図　30号土坑墓（南→）

1：炭化物が混入し、灰色っぽい黒色土
2：炭化物・大粒のローム が混入する黒色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄褐色土
5：大粒のローム が混入する黒色土
6：やや汚れのある黄色土

第122図　30号土坑墓出土小玉

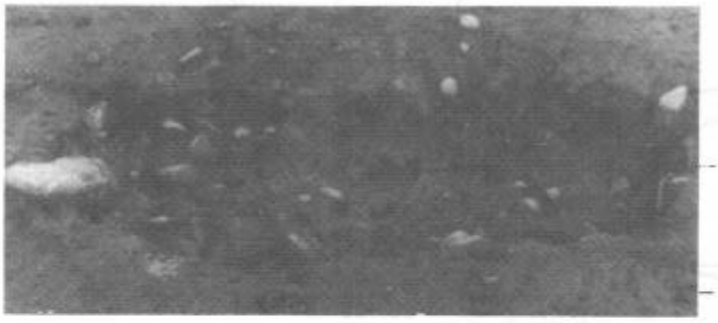


第123図　30号土坑墓

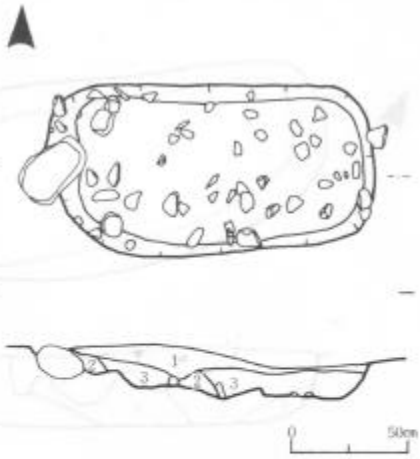
31号土坑墓

30号の南にあり、南面に傾斜し、礫層部につくられているため南側が深い。坑口部は140cm×70cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN92°Wである。坑壁西に30cm×17cmの石がみられる。出土遺物はない。

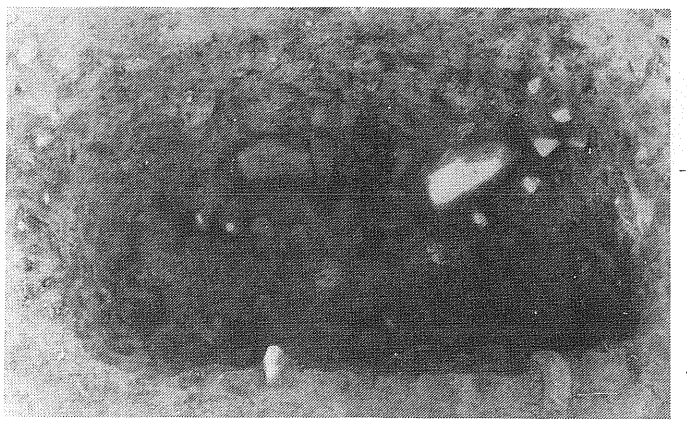
1：極暗褐色土　2：暗黄色土　3：暗黄褐色土



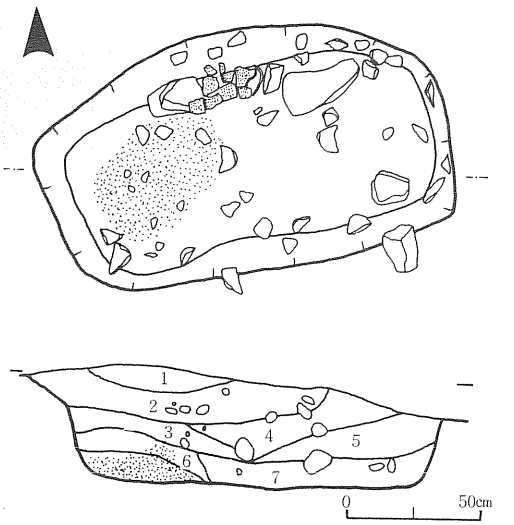
第124図　31号土坑墓（南→）



第125図　31号土坑墓



126図　32号土坑墓（南→）

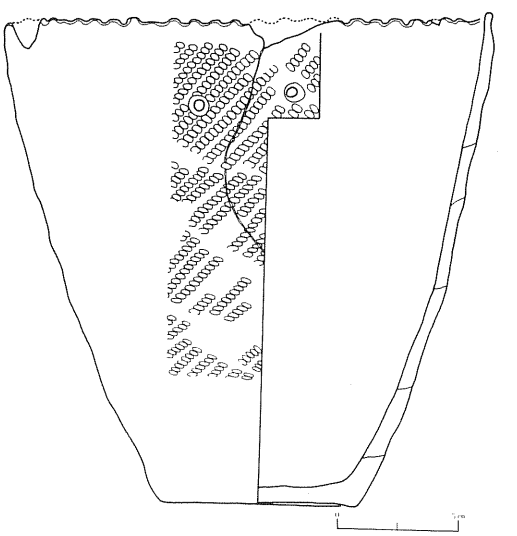


第127図　32号土坑墓

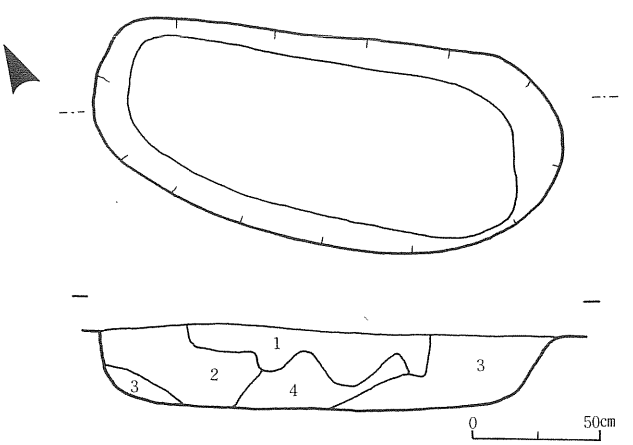
32号土坑墓

31号の南にあり、南面に最も傾斜し、礫層部につくられ南側が深い。坑口部は 155cm×92cmで、ほぼ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN97°Wである。土坑確認面からの深さは中央部で40cmを測る。中央西寄りにベニガラの散布がみられた。北壁近くに補修孔をもつ深鉢形土器（粗製）が検出された。

1：炭化物が混入する黒褐色土
2：炭化物が混入する暗黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗褐色土
4：炭化物・ローム粒子が混入する極暗褐色土
5：炭化物が混入し、黒色土がブロック状に入る黒褐色土
6：炭化物・小石粒が多く混入する暗黄色土
7：炭化物・小石粒が多く混入する暗黄褐色土



第128図　32号土坑墓出土土器



第129図　33号土坑墓

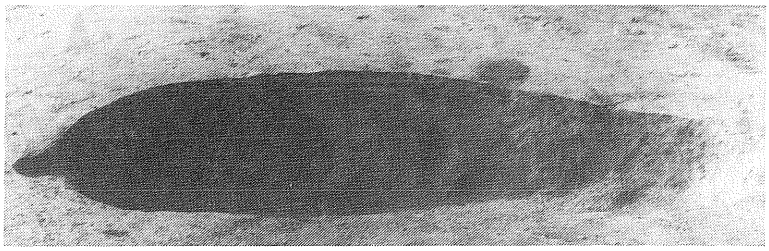
33号土坑墓

3号の南東にあり、坑口部は 185cm×82cmで、長いほぼ小判形を呈し、長軸方向はN54°Wである。坑底は平坦である。出土遺物はない。

1：炭化物・ローム粒子が混入する黒褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入する暗黄色土
4：炭化物が混入する暗昔褐色土

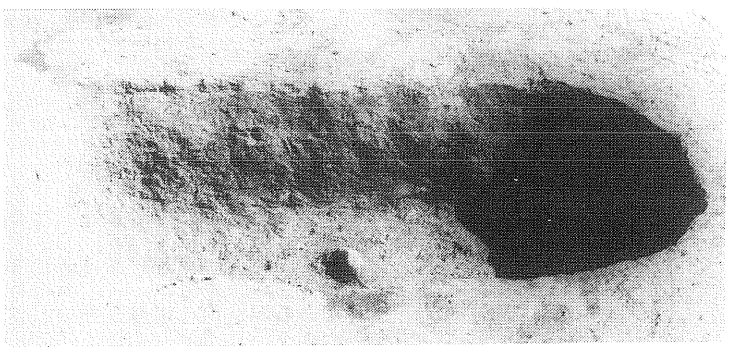
34号土坑墓

調査区北東にあり、坑口部は 125cm×63cmで、小判形を呈し、長軸方向はN6°Wである。坑底は平坦で、出土遺物はない。

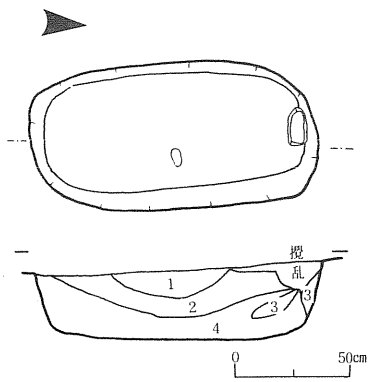


第130図　33号土坑墓（北→）

1：炭化物が混入し、汚れた暗褐色土
2：炭化物が混入する黄褐色土
3：ロームブロック
4：炭化物が混入する暗黄褐色土



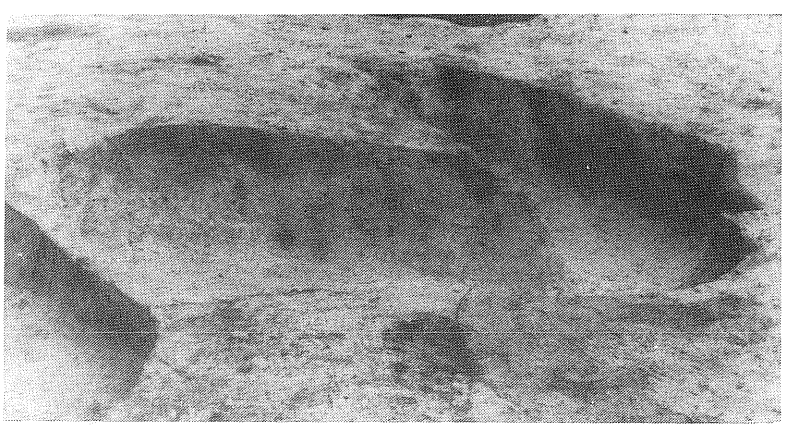
第131図　34号土坑墓（西→）



第132図　34号土坑墓

35号土坑墓

7号と重複し、35号が新しい。坑口部は 147cm×63cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN67°Wである。東側にベニガラの散布がみられた。坑底はゆるやかな鍋底状である。出土遺物はない。

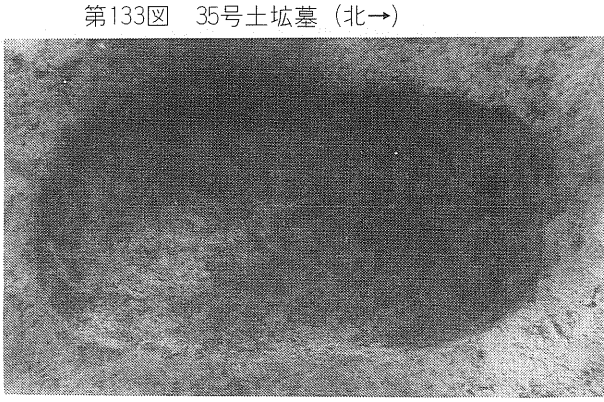


第133図　35号土坑墓（北→）

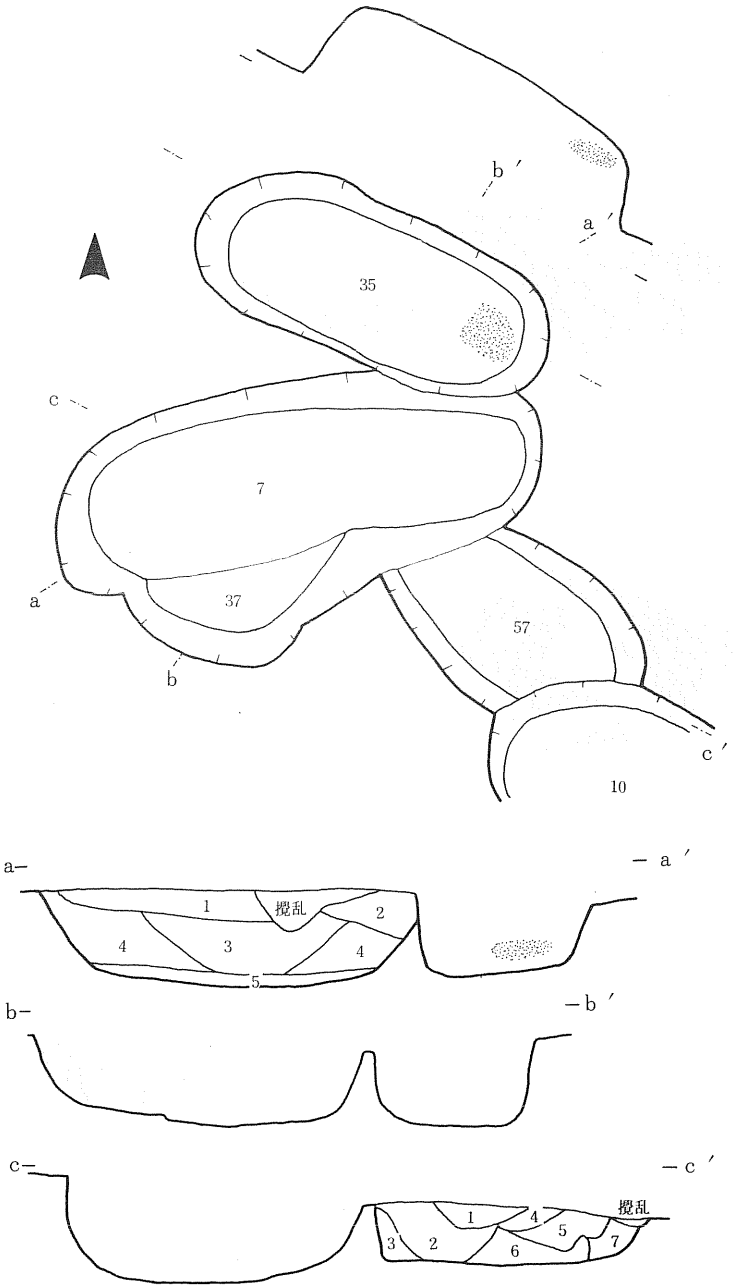
36号土坑墓

調査区北東、33号の東側にある。坑口部は 130cm×76cmで、ほぼ小判形を呈し、長軸方向はN92°Wである。西側に約15cmの厚さでベニガラの散布がみられた。坑底は平坦である。出土遺物はない。

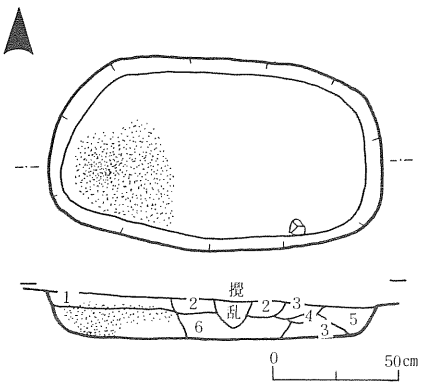
1：炭化物が混入する黒褐色土
2：炭化物・黒色土粒子が混入し、汚れた暗黄色土
3：炭化物が混入する暗褐色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物が混入し、汚れた暗黄褐色土
6：大粒の炭化物が混入する黒褐色土



第134図　36号土坑墓（北→）



第135図　7号・35号・37号・57号土坑墓



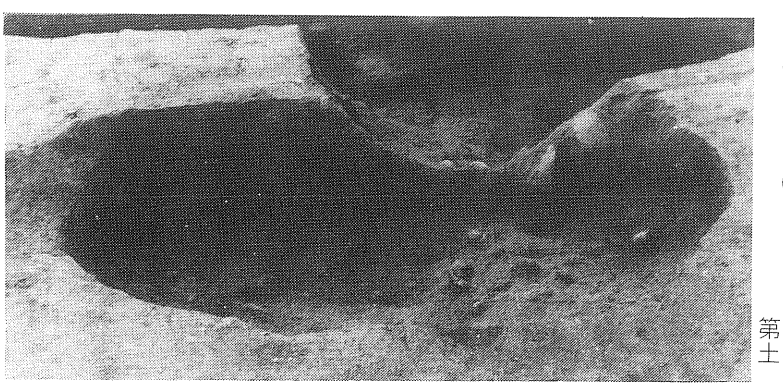
第136図　36号土坑墓

37号土坑墓

7号と重複し、7号によって切られている。坑口部、平面形は不明であるが、南に坑壁が残り、7号土坑墓の中に入る大きさで、平面形は小判形と推定される。長軸方向はほぼN150°W前後であろう。出土遺物はない。

38号土坑墓

58号、66号と重複し、坑口部は約140cm×72cmで、小判形を呈すると思われる。長軸方向はN59°Wである。坑内南東から小玉が1個検出された。緑色凝灰岩製で軟かい。新旧関係は58号、66号より新しい。



第137図　38号土坑墓（北→）

1：ロームブロック
2：炭化物が混入する黄色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する黄褐色土
4：3層よりやや明るみがある
5：炭化物が混入する暗黄褐色土
6：炭化物が混入し、硬くしまる黄褐色土
7：炭化物が混入し、ぼそぼそな暗黄褐色土
8：黄色土

第138図　38号土坑墓出土小玉

39号土坑墓

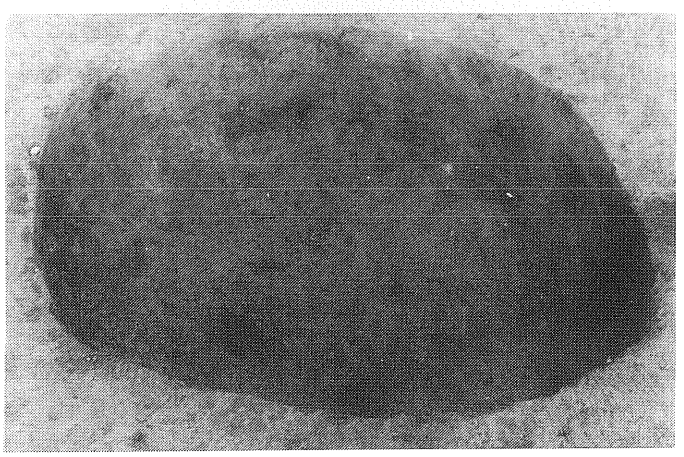
12号と重複し、12号より新しい。坑口部は約 160cm×75cmで、変形の長い小判形を呈し、長軸方向はN60°Wである。坑壁は南東側を除きほぼ垂直に立ち上がる。深さは約40cmで、西にベニガラの散布がみられ、ベニガラより下部、中央よりに径約40cmの岸化物の散布がみられた。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗黄褐色土　2：炭化物が混入する黄褐色土　3：炭化物が混入し、硬くしまっている黄褐色土

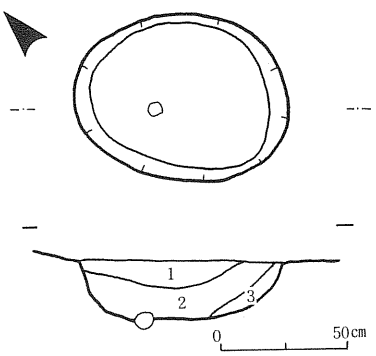
40号土坑墓

調査区中央部（南）にあり、坑口部85cm×65cmで、円形に近い楕円形を呈し、長軸方向はN37°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗黄色土
2：炭化物が混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入し、少々褐色味のある暗黄色土



第139図　40号土坑墓（南→）



140図　40号土坑墓

41号土坑墓

18号と重複し、41号が新しい。坑口部は約 120cm×65cmで、変形の小判形を呈し、長軸方向はN89°Wである。坑底は平らで、北西側に有茎石鏃が1点検出された。石質は硬質頁岩である。

1：炭化物が混入し、汚れた感じの黄褐色土
2：炭化物が混入する黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、褐色味が強い暗黄褐色土

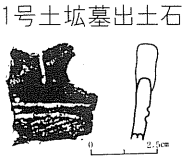
42号土坑墓

4号と重複し、坑口部は 127cm×約65cm前後で、小判形を呈すると思われる。長軸方向はN123°Wである。土器片（粗製）が2点出土している。

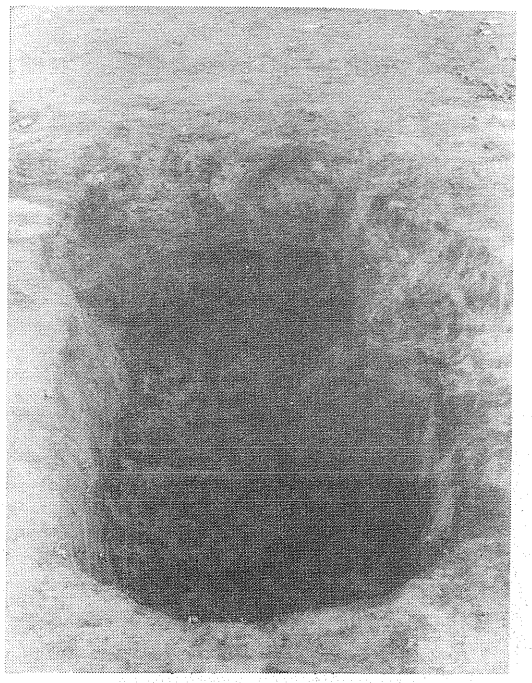
第141図
41号土坑墓出土石鏃

43号土坑墓

66号と重複し、調査区中央部東側にあり、坑口部は約160cm×130cmで、六角形になるような平面形を呈し、本遺跡での中では、51号と同様に大きい類である。二つの土坑墓が重複しているのかも知れないが、調査の段階では不明であった。一つの土坑墓として扱った。土坑確認面からの深さは約50cmで、長軸方向はN72°Wである。出土遺物はない。



第142図　42号土坑墓出土土器



第143図　4号・42号土坑墓（東→）

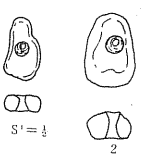
44号土坑墓

45号、68号と重複し、45号、68号より新しい。土坑確認面では45号、44号が重なっていることは確認したが、67号、68号は掘り進めた段階で確認されたものである。坑口部は推定で約 180cm×75cmほどで、長い小判形を呈するものであろう。長軸方向はN73°Wである。坑底はほぼ平らで土坑確認面からの深さは50cmを測る。出土遺物はない。

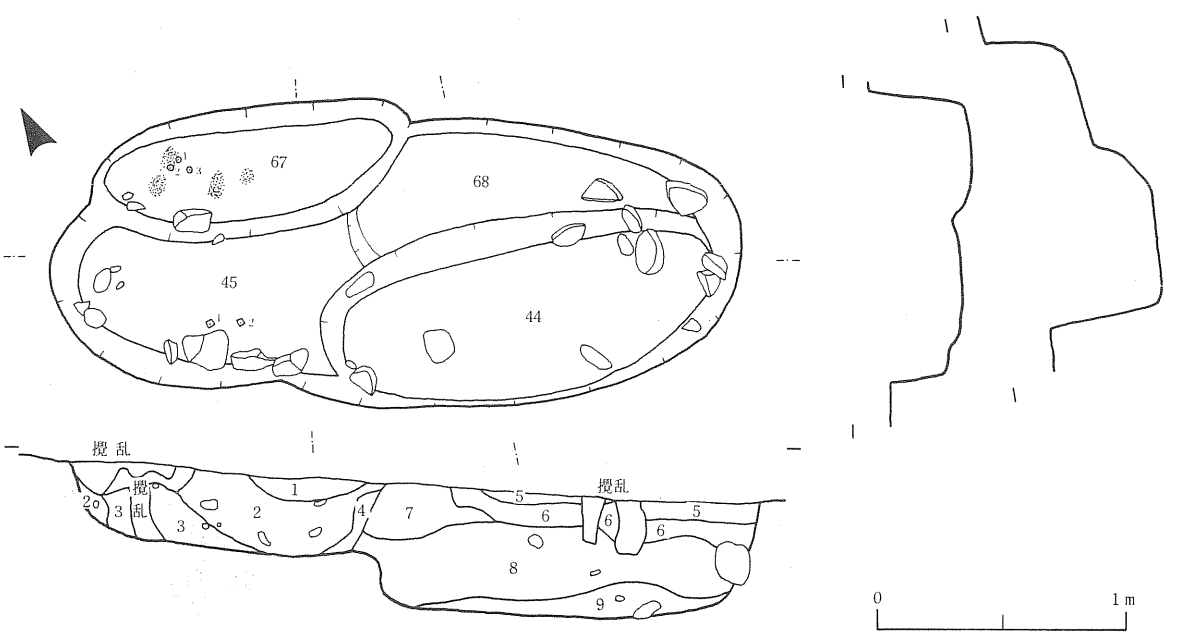
45号土坑墓

44号、67号、68号と重複し、坑口部は推定約140cm×80cmで、楕円形を呈するものであろう。長軸方向はN58°Wである。坑内中央部南に勾玉と玉がそれぞれ1個検出された。1は緑色凝灰岩、2はヒスイ製である。

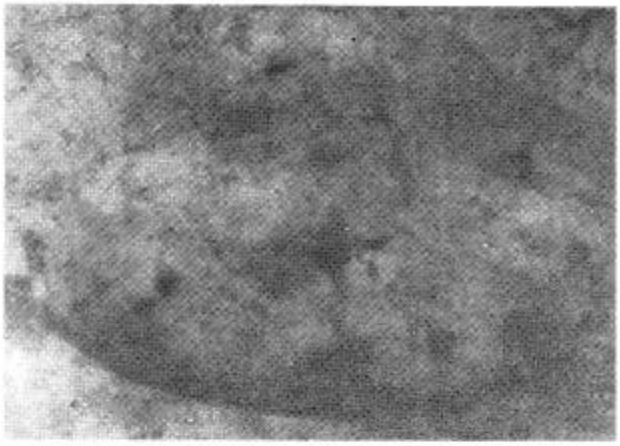
1：炭化物が混入し、黒色粒が入る暗黄褐色土
2：炭化物が混入する暗黄色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：硬く少々粘性のある黄色土
5：炭化物が混入し、汚れた暗黄色土
6：炭化物が混入し、黄色味の強い暗褐色土
7：炭化物・黒色土粒が混入する暗黄色土
8：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄色土
9：炭化物が混入し、やや硬くしまっている暗黄褐色土



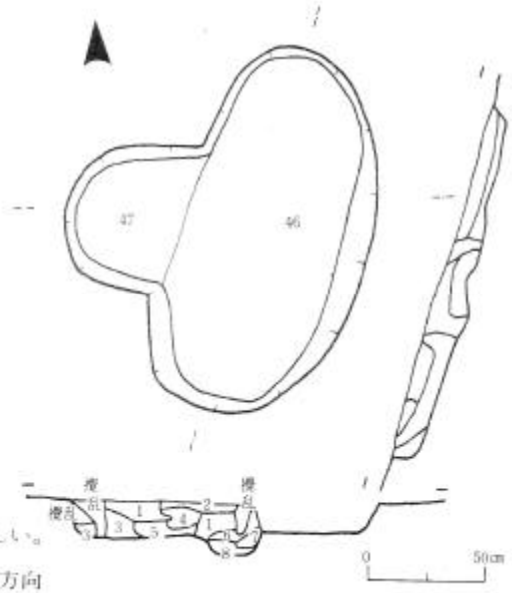
第144図　45号土坑墓出土勾玉・玉



145図　44号・45号・67号・68号土坑墓



第146図　46号・47号土坑墓（東→）



第147図　46・47号土坑墓

46号土坑墓

調査区中央西にあり、47号と重複し、46号が新しい。坑口部は 160cm×約85cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN159°Wである。出土遺物はない。

47号土坑墓

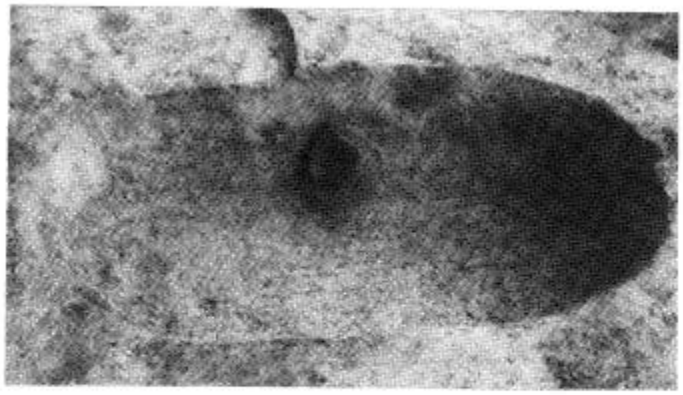
46号により切られている。坑口部は 130cm×70cm前後と思われる。小判形を呈するものであろうか。長軸方向はN88°W前後である。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗灰黄褐色土
2：炭化物が混入する灰黄褐色土
3：炭化物が混入し、やや汚れのある黄色土
4：炭化物が少々混入する黄灰色土
5：炭化物が混入する灰黄色土
6：炭化物が混入する暗黄色土
7：ロームブロック
8：炭化物が混入する暗黄褐色土

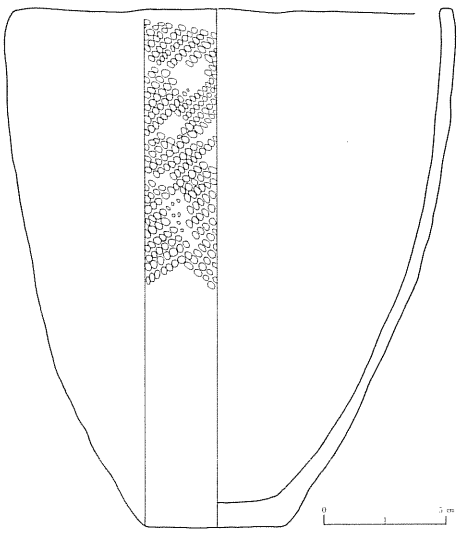
48号土坑墓

調査区北西にあり、49号と重複し、49号より新しい。坑口部は 177cm×93cmで、小判形を呈し、長軸方向はN75°Wである。坑底は平坦で坑壁もしっかりしている。土坑確認面からの深さは40cmである。坑内中央北側からほぼ完形の深鉢形土器（器高21.5cm）が出土した。

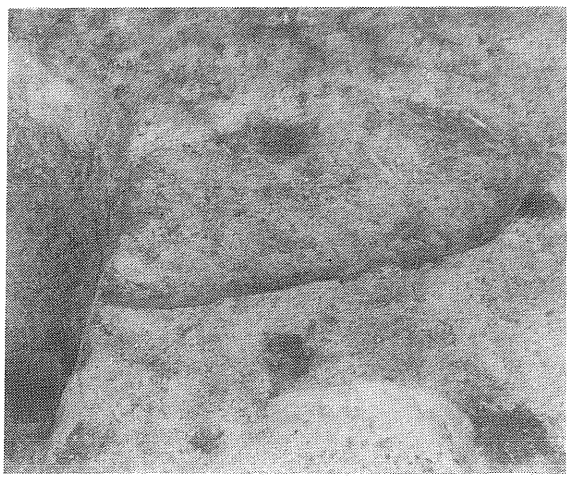
1：炭化物・ローム粒子が多く混入する黒褐色土
2：炭化物・ローム粒子・ロームブロックが多く混入する暗黄褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、やや粘土っぽい暗黄色土
5：炭化物が混入し、硬くやや粘土っぽい極暗黄褐色土



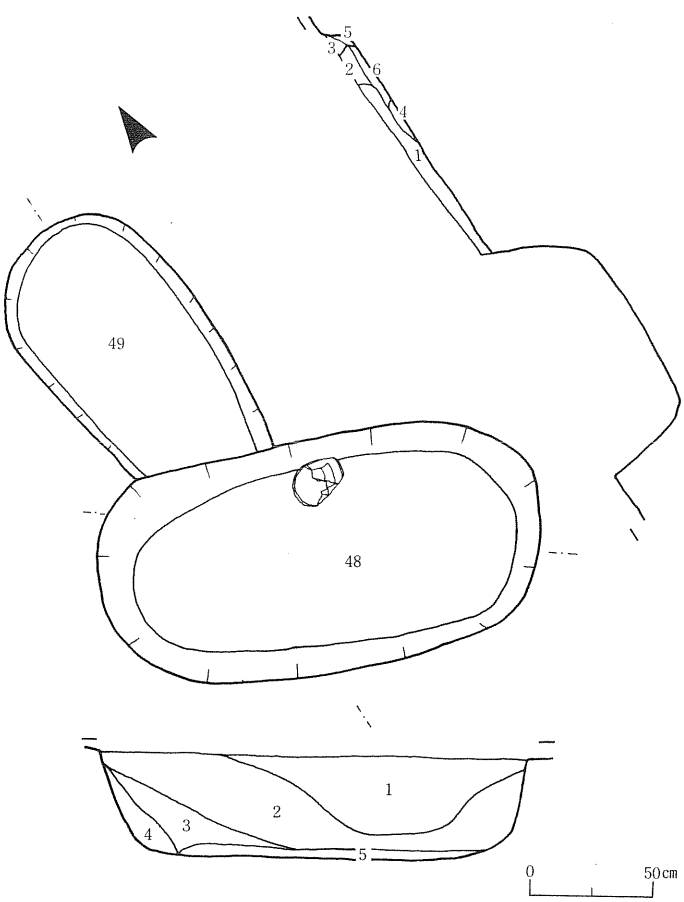
第148図　48号土坑墓（南→）



第149図　48号土坑墓出土土器



第150図　49号土坑墓（東→）



第151図　48号・49号土坑墓

49号土坑墓

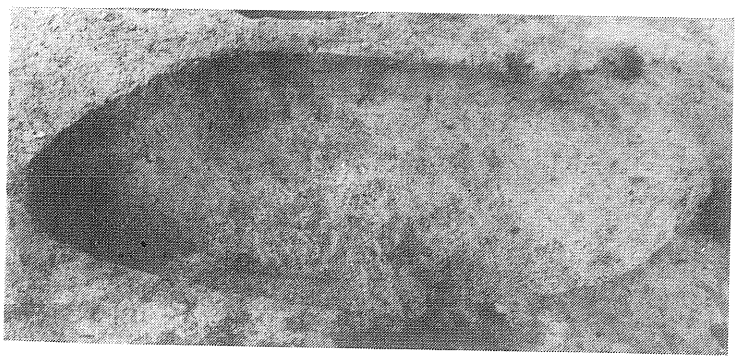
48号によって切られている。坑口部は約 140cm×70cmで、ほぼ小判形を呈すると思われる。長軸方向はN179°Wである。坑底は平らで浅い。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する黒褐色土
2：黒色土が少々混入する暗黄褐色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：ロームブロック
5：炭化物が混入する暗黄色土
6：炭化物が混入し、やや汚れのある黄色土

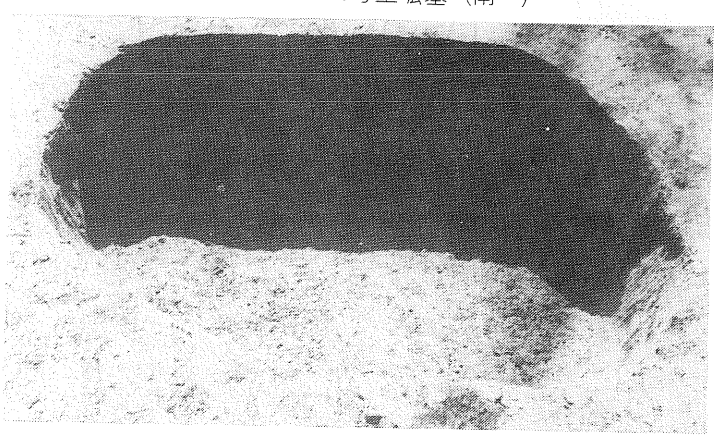
50号土坑墓

48号、49号の東にあり、坑口部は 170cm×80cmで、変形を呈し、長軸方向はN38°Wである。出土遺物はない。

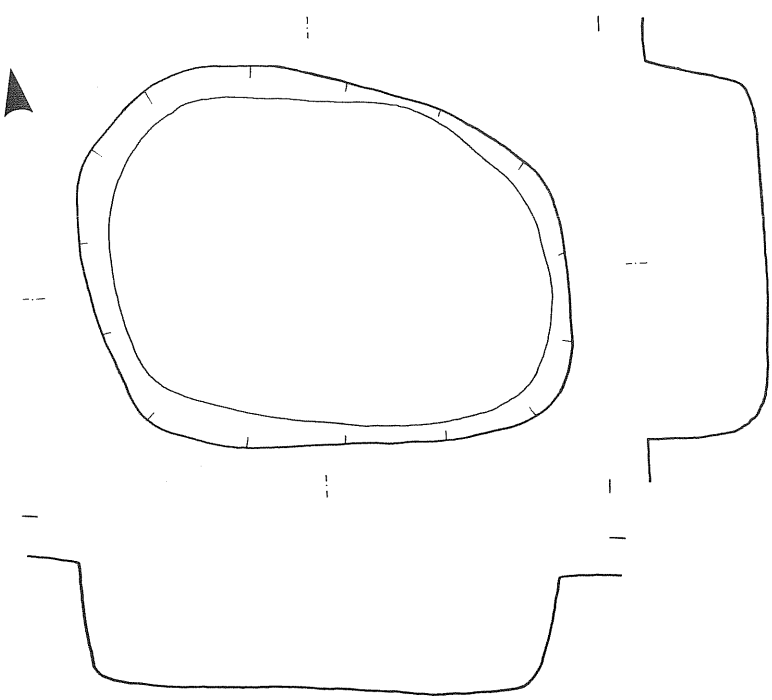
1：炭化物が混入する暗黄灰褐色土
2：炭化物が混入し、黒色土・暗灰色土・暗黄色土が入り混る
3：少々汚れのある黄色土
4：暗黄色土
5：粘土っぽい暗黄灰色土



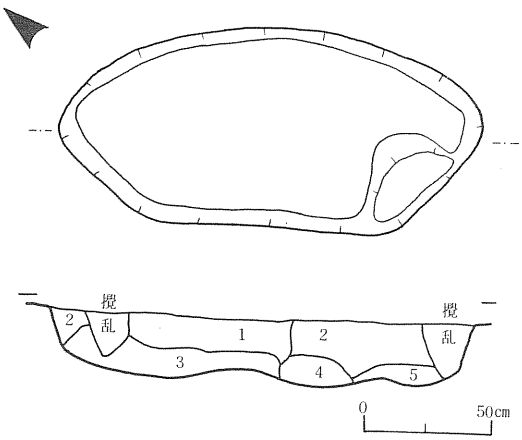
第152図　50号土坑墓（南→）



第154図　51号土坑墓（北→）



第155図　51号土坑墓



第153図　50号土坑墓

51号土坑墓

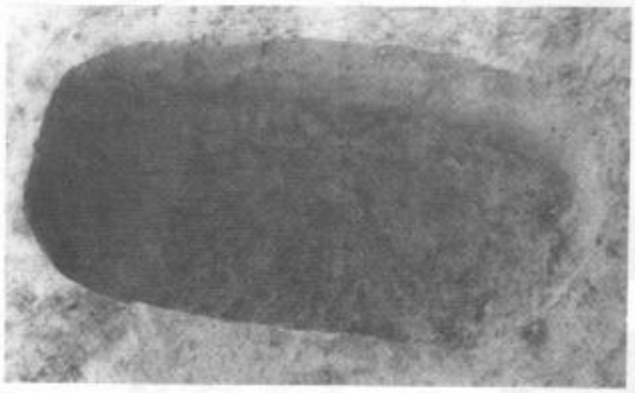
調査区北側にあり、最も大きい土坑である。二つ重複している可能性もあるものである。坑口部は195cm×150cmで、変形の隅丸方形を呈し、長軸方向はN79°Wである。坑底は平坦で坑壁の立ち上りは良く、土坑確認面からの深さは50cmを測る。出土遺物はない。

52号土坑墓

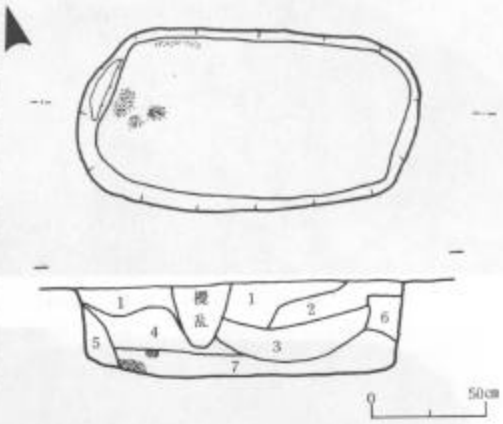
調査区中央部にあり坑口部は 145cm×77cmで、ほぼ小判形を呈し、長軸方向はN74°Wである。西側にベニガラの散布がみられた。坑底はほぼ平らで坑壁は垂直に近い立ち上がりである。出土遺物はない。

1：炭化物・褐色土が混入する暗黄褐色土
2：炭化物が混入し、黒褐色土が部分的に入る暗黄色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、少々褐色味のある暗黄色土
5：少々粘土っぽく、やや汚れのあ

る黄色土 6:炭化物が混入し、ぼそぼそな暗黄色土 7:硬くしまり、少々粘土っぽく、褐色味のある暗黄色土



第156図　52号土坑墓（北→）



第157図　52号土坑墓

53号土坑墓

調査区中央東側にあり、54号と重複し、61号と接する。坑口部は 195cm×80cmで、長い小判形を呈し、長軸方向はN83°Wである。54号より新しい。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する暗黄色土
2：炭化物・ローム粒子が多く混入し、上部に部分的に黒色土が入る暗黄褐色土
3：炭化物が混入し、やや暗味のある暗黄色土
4：少々黄色っぽい暗褐色土
5：炭化物・ロームブロックが混入し、やや汚れのある黄色土
6：炭化物が混入し、しまりがありやや粘土っぽく、少々褐色味のある暗黄色土

54号土坑墓

53号、61号、62号、と重複し、坑口部は推定で約 110cm×73cmで、楕円形を呈すると思われる。長軸方向はN73°Wである。53号、61号、62号に切られている。石錘が1点出土している。

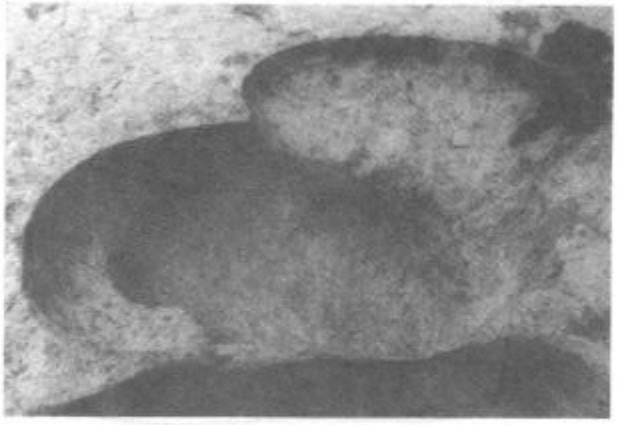
第158図
54号土坑墓出土石錘

1：炭化物が混入し、褐色味が強く、汚れた暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入する暗褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味のある暗褐色土
4：炭化物・少々のローム粒子が混入する暗褐色土
5：ややしまっており、黄色味のある褐色土

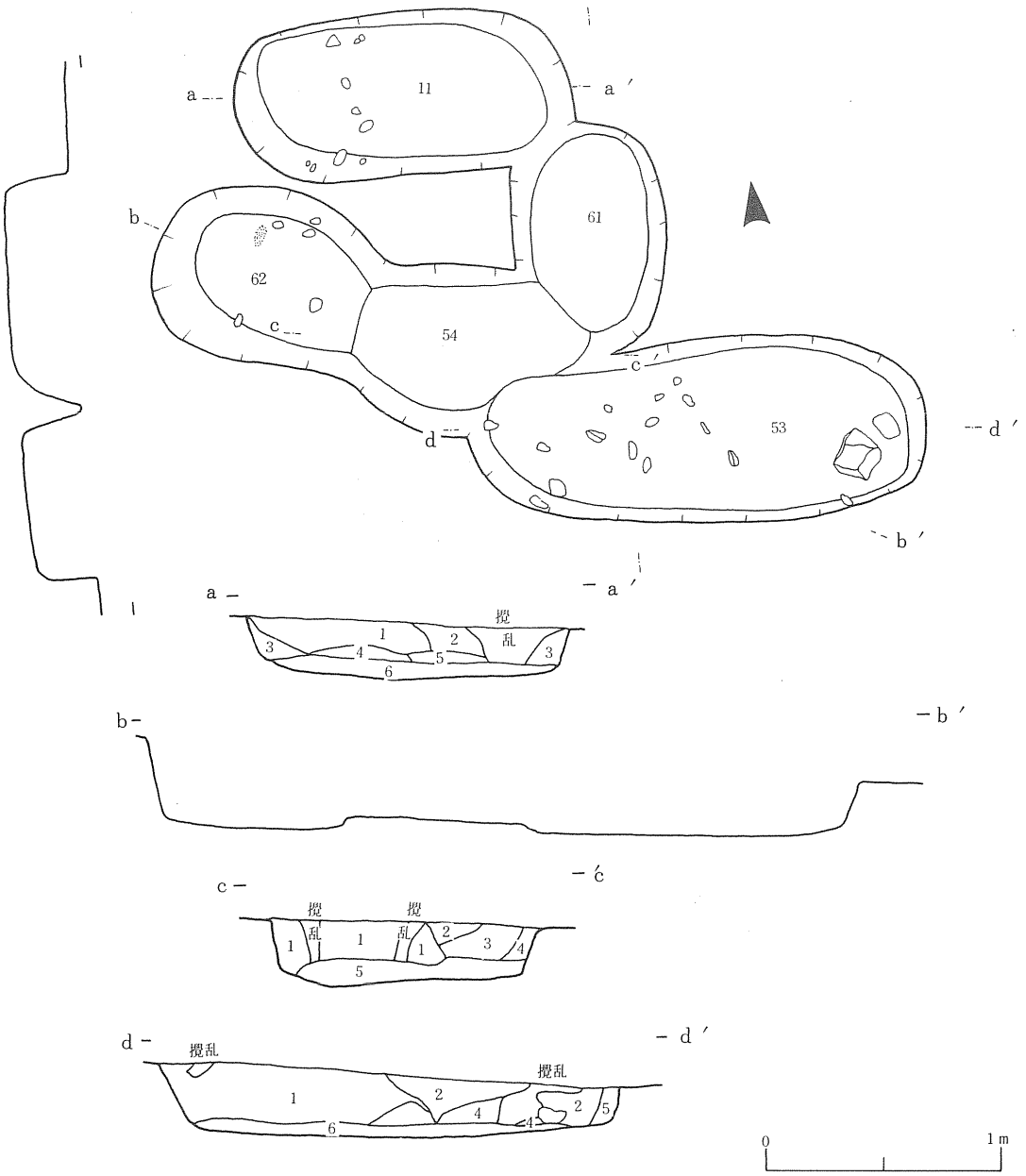
55号土坑墓

調査区中央にあり、56号、60号と重複し、坑口部は 107cm×約70cmで小判形を呈し、長軸方向はN42°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物が混入する極暗褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味の強い暗褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
4：炭化物が混入し、硬くしまっている暗黄色土



第159図　55号・56号・60号土坑墓（北→）

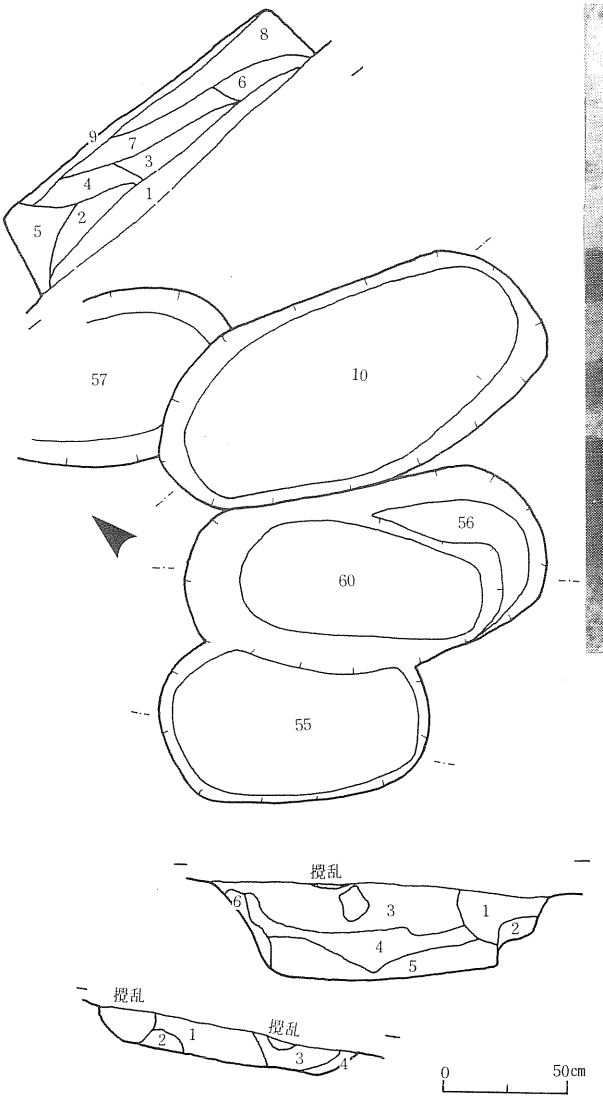


第160図　11号・53号・54号・61号・62号土坑墓

56号土坑墓

10号と接し、55号、60号と重複し、坑口部は143cm×約75cmで、小判形を呈し、長軸方向はN49°Wである。出土遺物はない。55号より新しく、60号より古い。

1：黒色土ブロックと暗褐色土
2：炭化物が混入し、硬くしまっている褐色土
3：炭化物・ローム粒子が混入する暗褐色土
4：3層と同じであるが、大粒のロームが入る
5：4層と同じであるが、やや黄色味がある
6：炭化物が混入する暗黄色土



第161図　10号・55号・56号・60号土坑墓

第162図　10号・57号土坑墓（手前57号）（西→）

57号土坑墓

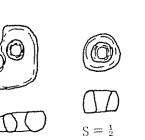
調査区中央部にあり、7号、10号と重複し、7号、10号より古い。坑口部は推定で約 120cm×65cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN45°Wである。出土遺物はない。

1：炭化物が混入し、黒灰色土・ローム粒子・黄色土等が入り混じる
2：炭化物が混入し、やや黄色味のある暗褐色土
3：炭化物が混入し、やや汚れのある暗黄色土
4：炭化物が混入する暗黄褐色土
5：炭化物が混入する暗黄色土
6：炭化物が混入し、やや黄色味のある明褐色土
7：炭化物が混入し、褐色味の強い暗黄褐色土

58号土坑墓

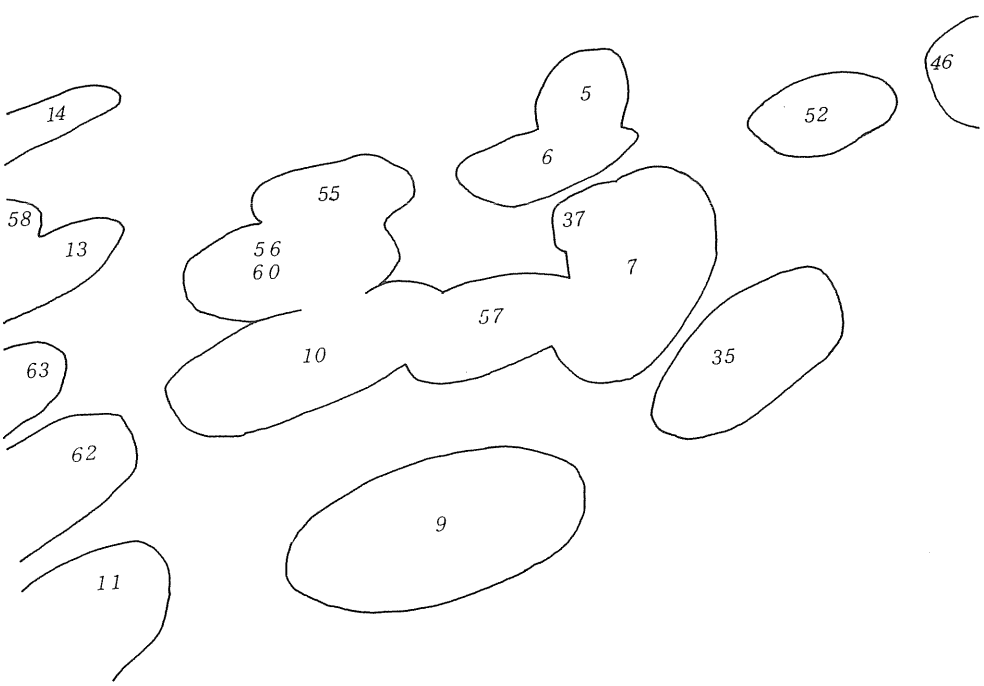
13号、38号、64号、65号と重複し、坑口部は推定で約 160cm×80cmで、隅丸長方形を呈すると思われる。長軸方向はN79°Wである。坑内南側から勾玉、小玉が各1個検出された。勾玉はヒスイ製で、小玉は緑色凝灰岩製である。13号より新しく、64号、65号、38号より古い。

1：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味のある暗褐色土
3：炭化物が混入し、褐色味のある暗黄褐色土
4：ぼそぼその暗黄色土
5：炭化物が混入し、硬く、褐色味の強い暗黄褐色土
6：炭化物が混入し、やや黄色味のある暗褐色土



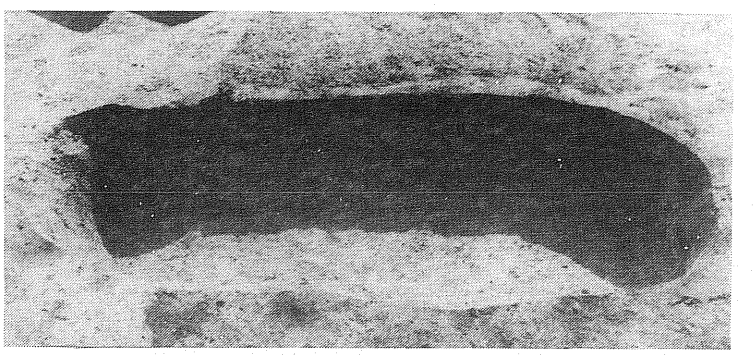
第163図
58号土坑墓出土勾玉・小玉

第164図　土坑墓群（北→）



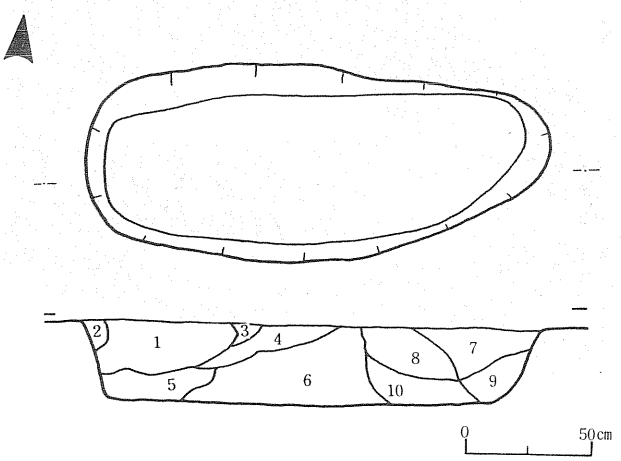
59号土坑墓

調査区中央部北西にあり、坑口部は 185cm×78cmで、変形の長い小判形を呈し、長軸方向はN99°Wである。坑底は平坦で、出土遺物はない。



第165図　59号土坑墓（北→）

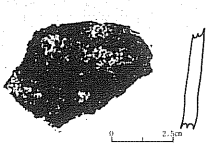
1：炭化物・ローム粒子・ロームブロックが混入する黒褐色土
2：炭化物が混入する暗黄色土
3：炭化物が混入し、粘性があり、汚れのある黄色土
4：炭化物・ローム粒子が混入する暗黄褐色土
5：炭化物・ローム粒子が混入し、やや黄褐色味のある黒褐色土
6：炭化物・ローム粒子が混入し、黄色味のある黒褐色褐色土
7：炭化物が混入し、粘性のある黄色土・褐色土・黒褐色土がブロック状に混る
8：7層と同じであるが細かく混る
9：炭化物が混入し、黄褐色味の強い極暗黄褐色土
10：炭化物が混入する極暗黄褐色土



第166図　59号土坑墓

60号土坑墓

56号土坑墓を10～15cm掘り込んでつくったもので、坑口部は推定で約130cm×80cmぐらいで、小判形を呈するものと思われる。長軸方向はN36°W前後であろう。埋土から土器片が1点検出している。



第167図　60号土坑墓出土土器

61号土坑墓

11号、54号と重複し、53号と接する。坑口部は約 100cm×65cmで、小判形を呈し、長軸方向はN175°Wである。坑底は平坦で、出土遺物はない。11号、54号より新しい。

62号土坑墓

54号と重複し、54号より新しい。坑口部は約105cm×75cmで、楕円形を呈し、長軸方向はN57°Wである。北西側にベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。

63号土坑墓

64号と重複し、64号より新しい。坑口部は113cm×65cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN71°Wである。出土遺物はない。

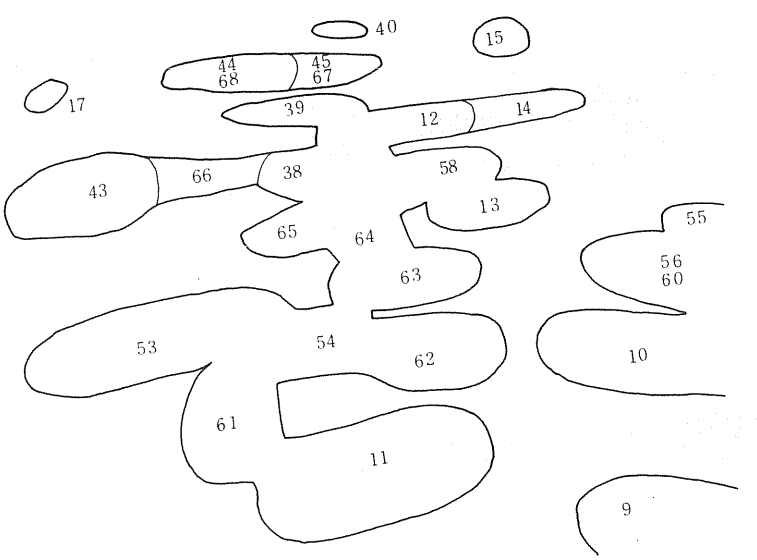
1：炭化物が混入し、黄色味の強い黄褐色土
2：炭化物が混入し、黒褐色土の入る黄褐色土
3：炭化物が混入する暗黄褐色土
4：やや汚れのある黄色土
5：炭化物が混入する黄褐色土
6：炭化物が混入し、褐色味の強い暗黄褐色土
7：炭化物が混入し、6層よりやや褐色味の弱い暗黄褐色土
8：やや褐色味のある黄色土

64号土坑墓

58号、63号、65号と重複し、63号より古く、58号、65号より新しい。坑口部は推定で約 120cm×

65cmほどで、平面形は不明である。長軸方向はＮ０°Ｗ前後であろう。坑底中央より北側に炭化物がみられた。出土遺物はない。

第168図　土坑墓群（北→）



65号土坑墓

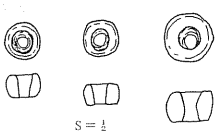
38号、58号、64号と重複し、58号より新しく、38号、64号より古い。坑口部は推定で約 130cm×70cmぐらいで、小判形を呈すると思われる。長軸方向はN93°Wである。出土遺物はない。

66号土坑墓

38号、43号と重複し、38号、43号により切られている。坑口部は推定で約 120cm×70cmで、変形の楕円形を呈するものであろうか。長軸方向N79°W前後で、出土遺物はない。

67号土坑墓

45号、68号と重複し、45号、68号より新しい。坑口部は約 130cm×約55cmで、細長い小判形を呈し、長軸方向はN73°Wである。坑底中央部と西側にベニガラの散布がみられ、小玉が3個検出された。いずれも緑色凝灰岩製である。



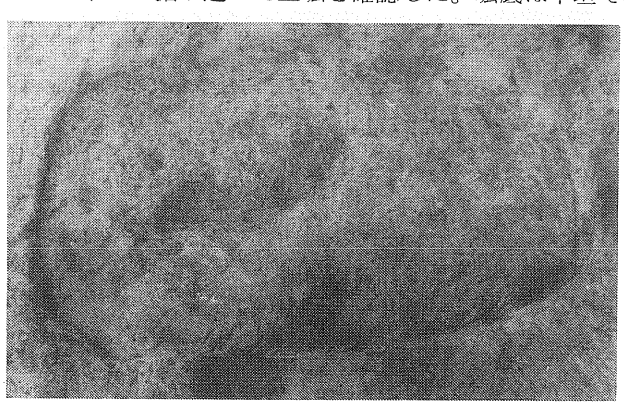
第169図　67号土坑墓出土小玉

68号土坑墓

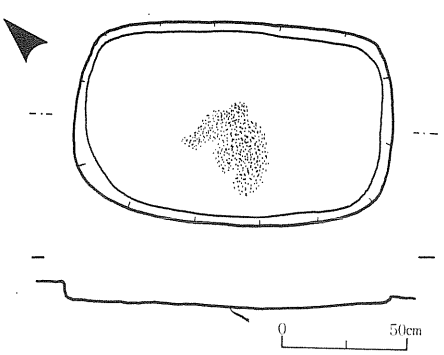
44号、45号、67号と重複し、45号より新しく、44号、67号より古い。坑口部は約 170cm×約70cmほどで、長い小判形を呈するものであろう。長軸方向はN58°W前後である。出土遺物はない。

69号土坑墓

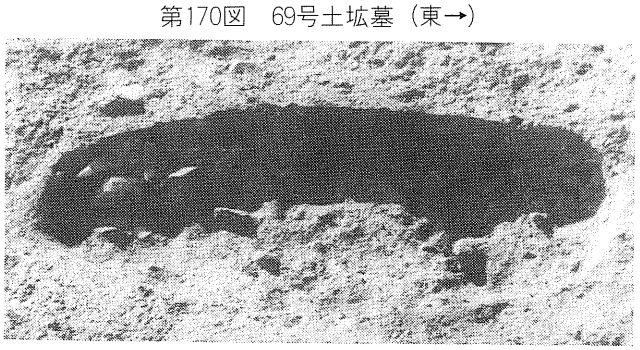
調査区中央部にあり、坑口部は125cm×82cmで、隅丸長方形を呈し、長軸方向はN39°Wである。坑内ほぼ中央部にベニガラの散布がみられた。このベニガラは土坑の確認前にみられたものでベニガラを中心に掘り進んで土坑を確認した。坑底は平坦で、浅く、出土遺物はない。



第170図　69号土坑墓（東→）



第171図　69号土坑墓

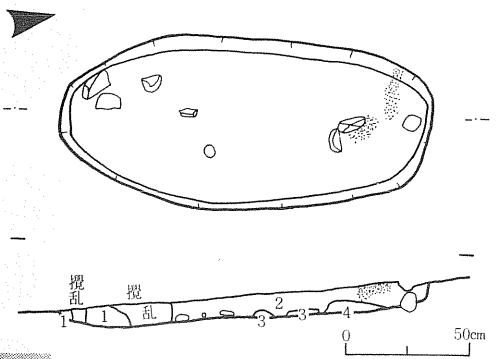


第172図　70号土坑墓（東→）

70号土坑墓

調査区南東のゆるやかな斜面にあり坑口部は 147cm×68cmで、長い楕円形を呈し、長軸方向はN175°Wである。北側にベニガラの散布がみられた。出土遺物はない。

1：炭化物が混入し、汚れのある暗黄褐色土
2：炭化物・ローム粒子が混入し、やや黄色味のある黒褐色土
3：炭化物が混入する暗黄色土
4：炭化物が混入し、黄色味の強い暗褐色土

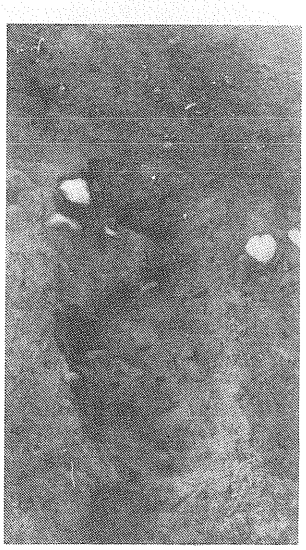


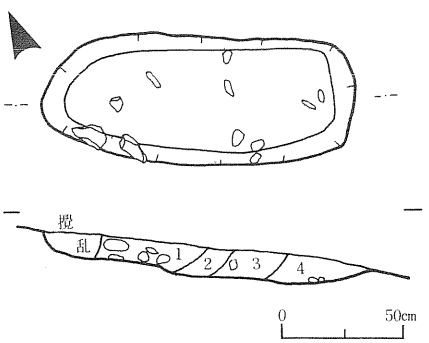
第173図　70号土坑墓

71号土坑墓

調査区南東、17号の南にあり、坑口部は125cm×52cmで、細長くほぼ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN66°Wである。出土遺物はない。

1：暗黄褐色土
2：黄色味のある暗褐色土
3：黄色味の強い暗黄色土
4：3層よりやや暗い

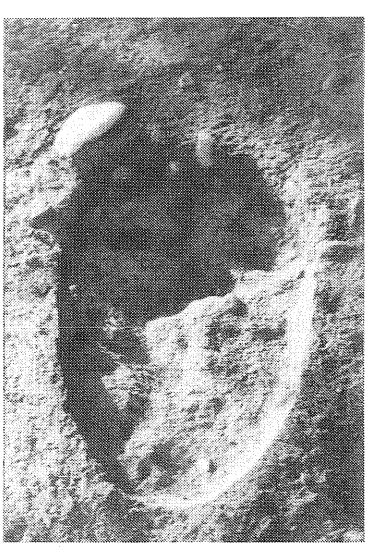

第174図　71号土坑墓(東→)



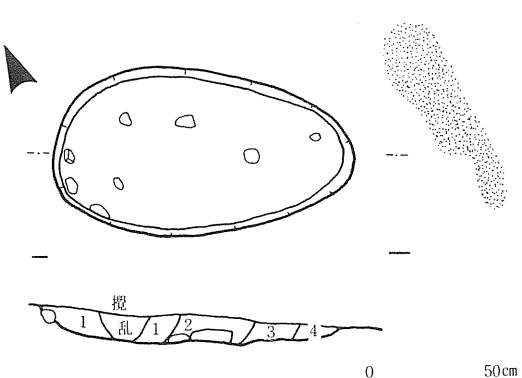
第175図　71号土坑墓

72号土坑墓

71号の南、ゆるやかな斜面にある。坑口部は120cm×67cmで、ほぼ楕円形を呈し、長軸方向はN63°Wである。出土遺物はない。この土坑墓は道路際にあり、約30cm東側にベニガラが80×20cmの範囲で散布していた。道路によってこわされていたものである。


第176図　72号土坑墓(東→)

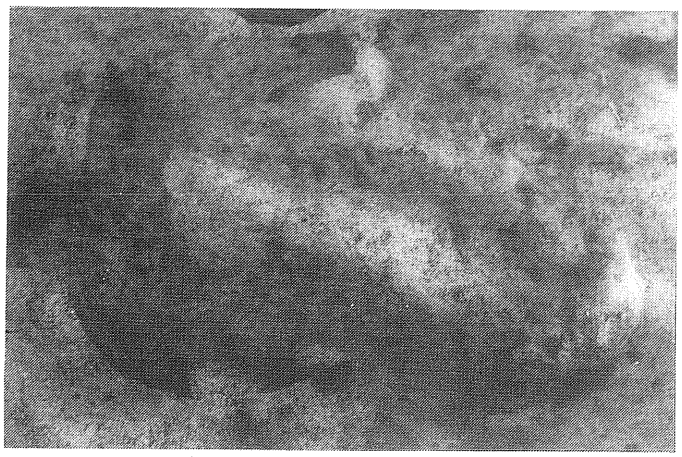
1：炭化物が混入し、黄色味の強い暗黄褐色土
2：1よりやや黄色味が弱い
3：炭化物が混入し、粘土っぽい暗黄色土
4：炭化物が混入し、粘土っぽく、褐色味のある暗黄色土



第177図　72号土坑墓

73号土坑墓

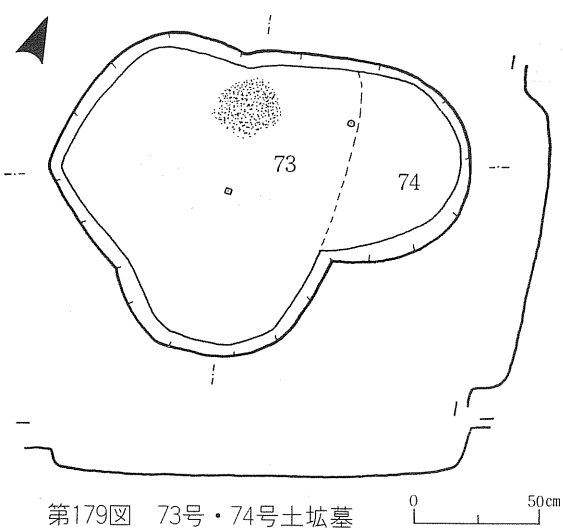
74号と重複し、74号より新しい。坑口部は約125cm×約80cmほどで、小判形を呈すると思われる。長軸方向はＮ０°Ｗ前後であろう。坑内北側にベニガラの散布がみられ、中央部と北東側に勾玉と〒字状の刻線のある玉が検出された。勾玉はヒスイ製、玉は緑色凝灰岩製である。



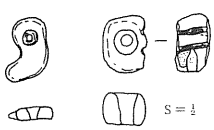
第178図　73号・74号土坑墓（南）（南→）

74号土坑墓

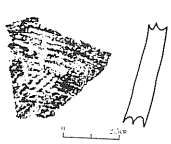
73号と重複し、73号より古い。坑口部は 165cm×約85cmで、西側は変形であるが、小判形を呈し長軸方向はＮ70°Ｗである。土器片が１点出土している。



第179図　73号・74号土坑墓



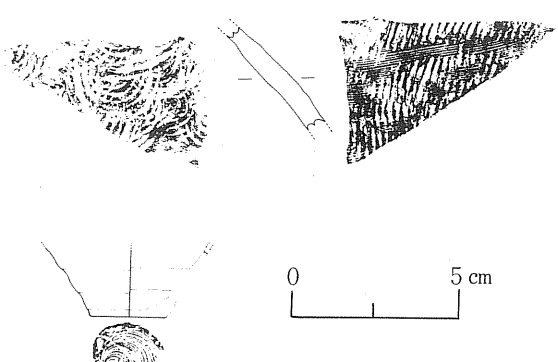
第180図　73号土坑墓出土勾玉・玉



第181図　74号土坑墓出土土器

出土遺物

Ｂ地区出土の遺物は第 182 図の表採遺物を除いて、全て土坑墓内出土である。第 182 図１は須恵器甕の破片で、２は回転糸切底、無調整の赤褐色土器杯である。土坑墓内出土土器でほぼ復元可能なものは四個体で、玉類は十五個で、石鏃が一個出土している。



第182図　Ｂ地区出土土器（表採）

Ⅴ まとめ

1.遺物について

A地区

昭和29年４月、現在地に中学校を建築するため基礎工事をした際、縄文時代晩期の遺物が出土し、翌30年８月に一部発掘調査を行ない、組石遺構が確認されている。この調査区と隣接しているのがＡ地区調査区である。

Ａ地区は、西側に小沢の入り込んだ場所で、北半部に集石がみられ、出土遺物の大部分はこの集石遺構の範囲からのものである。層位的な出土遺物の分類は困難であったが、土器実測図、拓影図には出土層を記した。土器型式は故山内清男博士による大洞Ｂ式～Ａ′式式の型式分類を参考にⅠ類～Ⅷ類土器群に類別したものである。深鉢形土器、台付鉢形土器の破片が多い。Ⅰ類土器は大洞Ｂ式、Ⅱ類土器は大洞ＢＣ式、Ⅲ類土器は大洞C_1式、Ⅳ類土器は大洞C_2式、Ⅴ類土器は大洞Ａ式、Ⅵ類土器は大洞A′式にそれぞれ比定出来るもので、各類の中でも細別可能なものもある。Ⅷ類土器は後期に属する土器群である。第54図１～４は小形土器であるが、３、４は作りの悪い肉厚状の土器で10の壺形土器はⅢ類土器群に属するものであろう。Ⅰ類～Ⅳ類土器群は第２層（上層）～第６層（下層）に混入するが、Ⅴ類、Ⅵ類土器群は第２層、集石遺構上層部で多くの出土をみる。下層部では出土していない。土製品は土偶および土器片を利用した円板状土製品である。石器は石鏃、石錐、石匙、ヘラ状石器、槍先状石器、凹石、磨製石斧、石剣、石棒等が出土しているが、中でも凹石の出土量が多い。他に円板状石製品が19個出土している。

B地区

Ｂ地区出土の遺物は、土坑墓内出土のもので、24号土坑墓埋土からⅡ類土器群の土器片が出土したのが、型式類別の出来る唯一のものである。

2.遺構について

集石遺構

前述したように、集石の範囲は調査区内では東西約18m、南北約35mにわたって確認されたもので、その広がりは西側、校舎方向の北東側に延びると考えられる。集石の堆積は埋土中で約20～30cmであるが、沢部については石の数が少なくなり小礫であったが、下層部まで集石はみられた。特に沢部にあたる８Ａ３、９Ａ１、９Ｂ１、９Ａ２、11Ｃ３、12Ｃ１グリッド内からの遺物出土量は全遺物量の約55％である。このようにしてみると、①集石の範囲は遺物出土範囲と共通する。②遺物、特に土器（片）の出土状態等に遺構の性格を示すあり方がない。③集石の中に意識的に配置された状況、規則性が見受けられない。④集石遺構の下に土坑墓等の遺構がない。以上のようなことから、この集石遺構の範囲は沢部を利用した捨て場としての遺構ではないかと考える。昭和30年に中庭の調査をした際、確認された組石遺構はＡ地区集石遺構の一部、つまり集石の北東端であると

考えた方が妥当と思われる。集石の石は、Ⅱ章で述べたように寒風山火山によるローム層の上部に混入する亜円礫と考えられ、居住地域等の場をつくるため排除されたものであろう。

土 坑 墓

土坑墓として確認出来たものは、A地区で20基、B地区74基で、重複し合う土坑墓が多い。

① 土坑墓の形態

A・B地区合計94基のうち、形態が判別出来たものは93基である。基本型は三タイプが主体であり、多少の変形があっても、基本型に近似すると考えられるものも、類別したものもある。基本型も入れ、A～Fタイプに分類した。

〈Aタイプ―小判形〉　向い合う長辺はほぼ平行し、短辺は両端にゆるく半円を描くようにふくらむもの。

〈Bタイプ―楕円形〉　向い合う辺がゆるく外側にふくらみ、角度を全くもたないもの。

〈Cタイプ―隅丸長方形〉　向い合うそれぞれの辺が直線的でほぼ平行し、長辺と短辺がほぼ直交するもの。

〈Dタイプ―隅丸方形〉　Cタイプの長辺と短辺の長さの違いがそれほどないもの。

〈Eタイプ―円形〉　ほぼ円形を呈するもの。

〈Fタイプ―変形〉　A～Eタイプに入らないもの。

これらのA～Fタイプの出現頻度（土坑墓数）は次のような比率をもつ。

A地区　A：B：C：D：E＝8：7：3：1：1

B地区　A：B：C：D：E：F＝42：12：14：3：2：1

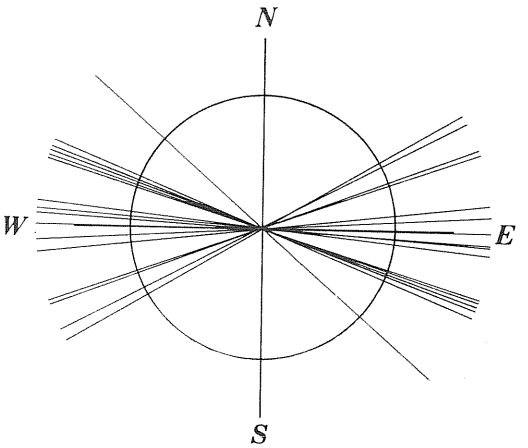
Aタイプ、Bタイプの中には、形態類別の許容を越えない程度の変形のものも含まれるが、小判形土坑墓が約半数で楕円形、隅丸長方形と続く。B地区での長い小判形土坑墓の多いのが目立つ。

② 土坑墓の規模

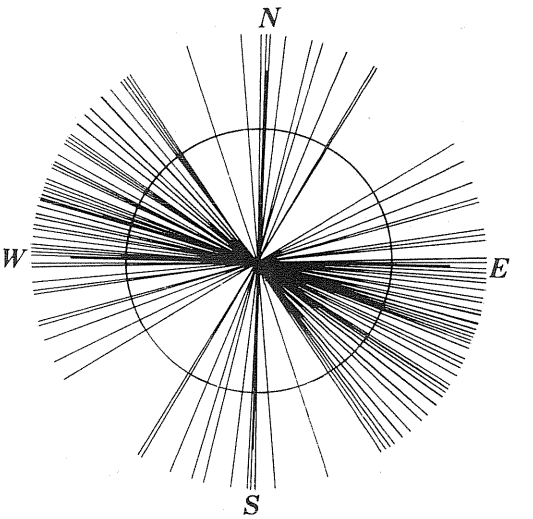
B地区の土坑墓には、坑口部での長軸が170cm以上のものが14基あり、秋田県柏子所貝塚では8基の土坑墓が確認され、人骨の埋葬形態は屈葬である。土坑墓の大きさは長軸が100cm～142cmのもので、成年の人骨が三体である。A・B地区を概観すると、坑口部の大きさから屈葬が基本的であると考えられるが、上記、14基の土坑墓については伸展葬とみることもできる。

③ 土坑墓の長軸方向

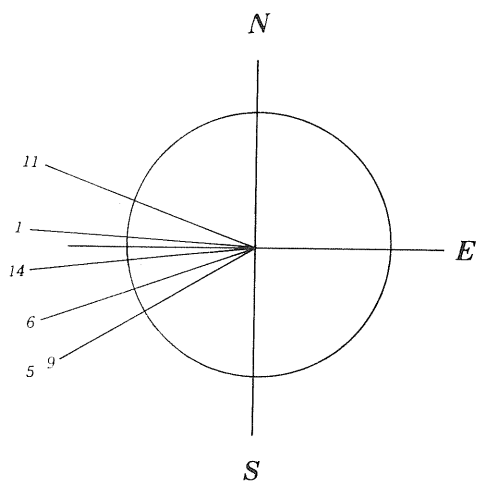
A地区20基、B地区74基の土坑墓のうち、重複しているものについても、形態を推定し、長軸方向を出してみた。A地区はN48°W～N120°Wの範囲にある。B地区はN36°W～N123°Wに大部分は集中するが、N20°W～N30°Eにその範囲を示すものがある。本遺跡においては、概略この2方向性をもつ土坑墓群と考えられる。この2方向のあり方はどのような埋葬の違いに起因するのか、今後の課題である。



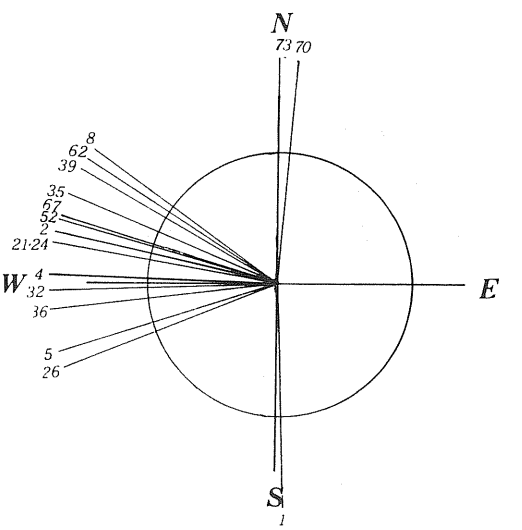
A地区土坑墓長軸方向



B地区土坑墓長軸方向



A地区埋葬頭位



B地区埋葬頭位

第183図　土坑墓の長軸方向・埋葬頭位

④　土坑墓の埋葬頭位

第183図の頭位方向は土坑墓内のベニガラ散布の位置によるもので、A地区ではベニガラの認められたのは７基で、そのうち埋葬頭位のわかるものは６基で、北西～南西の西頭位である。B地区はベニガラの認められたのは18基で、頭位方向の判明したものは17基で北西～南西の西頭位の土坑墓は14基、北頭位は２基、南頭位が１基である。

坑内出土遺物は土器、玉類、石鏃であるがその出土状態から埋葬頭位は必ずしも決められないものがある。

〈ベニガラ散布位置〉

A地区土坑墓

西位置…1・5・6・9・11・14

B地区土坑墓

西位置…2・4・5・8・21・24・26・32・35・36・39・52・62・67

北位置…70・73

南位置…1

〈玉類出土位置〉

玉類の出土土坑墓はA地区2基、B地区7基である。A地区の2基(11・14)、B地区の2基(67・73)はベニガラと伴出したもので頭位方向が確認できるが、他の5基については、はっきりしない。

〈石鏃の出土位置〉

石鏃の出土したのはB地区41号土坑墓だけであり、坑底直上から出土したもので西位置である。

〈土器の出土位置〉

B位置

東位置…24

西位置…4

北位置…32・48

東位置出土の24号はベニガラの散布から西頭位と考えられるものである。北位置の32号、48号は坑内中央部北壁で検出したもので32号は西にベニガラの散布がみられる土坑墓である。副葬品としての土器が頭位方向と一致するのは4号のみである。

⑤ 土坑墓の構造

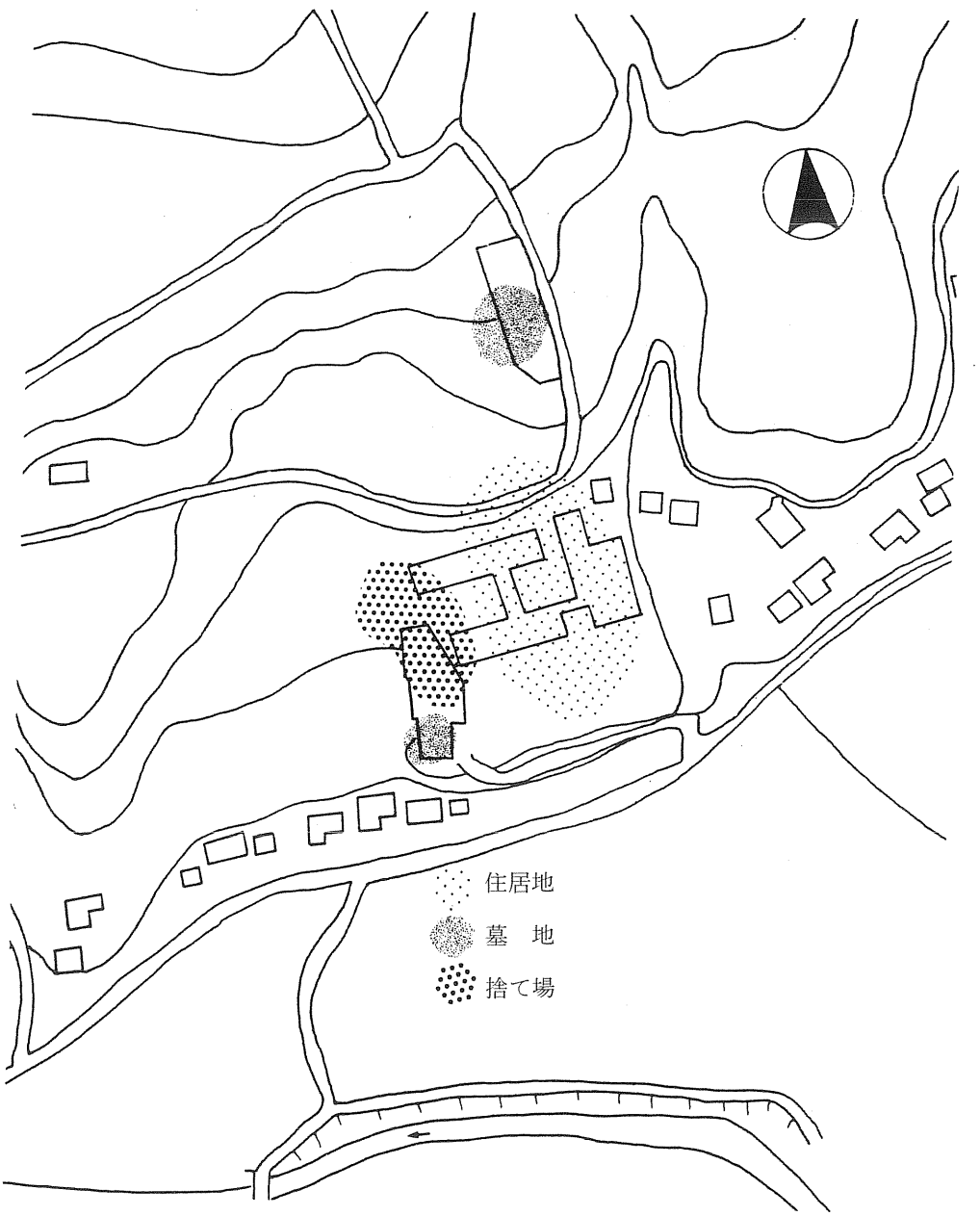
構造については、上部構造として石を集積したもの、または並列したものはない。坑内の埋土は暗褐色土、黄褐色土が主で、埋土には炭化物が混入する。坑底は、ほとんどが平担で、場所により傾斜を有するものもある。A地区、B地区の南面にある土坑墓は一部、礫層を掘り込んでいるため、坑底に礫が一面に見られるものもある。長い小判形を呈する土坑墓の壁は立ち上がりがよく、深いものが大部分である。

⑥ 土坑墓の分布

上新城中学校遺跡の発掘調査は部分的ではあるが、2次にわたる調査の結果、時間的差はあるにしろ、A地区、B地区2ヶ所の墓域が確認された。いずれも南面し、緩傾斜地も含む平担地の場所である。特にB地区における土坑墓群は重複するものが多い。A地区、B地区の土坑墓群の範囲には、その覆土に遺物がない。重複関係の多いB地区については、土坑墓の広がりが西側に及ぶと予想されるため、配列を決定づけるまで至らないが、調査区東側の重複する土坑墓群の新旧関係で概観すると、比較的小形である楕円形を呈するものが古く、土坑墓を総本的にみると、長い小判形を呈するものが新しいようである。このように土坑墓の形態、新旧関係で配列を推定すると、調査区西側に中心をもち、環状に分布する予想も成り立つが、はっきりしない。時間的差を考慮に入れて

もこれ程までにも、重複して墓を配置しているということは、何らかの規制のあったことを伺うことができる。

上新城中学校遺跡の今までの調査で、墓域、捨て場を確認しているが、住居地は確認できなかった。A地区、B地区の墓域の中間域にあり、A地区の捨て場に近い現中学校舎の地域がそれであろうか。



第184図　上新城中学校遺跡遺構想定図

土 坑 墓 一 覧 表（1）

土坑墓番号	形　態	長軸方向	頭位	坑口部(cm)	備　　考
A			地		区
1	小 判 形	N 86° W	西	113× 60	ベニガラ
2	小 判 形	N 72° W		130× 67	
3	楕 円 形	N 83° W		127× 62	
4	小 判 形	N 71° W		120× 55	
5	小 判 形	N 120° W	南西	142× 65	ベニガラ
6	隅丸長方形	N 109° W	西	102× 54	ベニガラ
7	円　　形	N 93° W		75× 70	
8	楕 円 形	N 67° W		127× 70	
9	楕 円 形	N 120° W	南西	140× 77	ベニガラ
10	小 判 形	N 70° W		83× 50	
11	小 判 形	N 69° W	北西	110× 82	ベニガラ・小玉８個
12	楕 円 形	N 48° W		115× 75	
13	楕 円 形	N 85° W		135× 85	ベニガラ
14	隅 丸 方 形	N 96° W	西	95× 67	ベニガラ・勾玉１個・小玉４個
15	楕 円 形	N 117° W		220×105	
16	小 判 形	N 110° W		140× 70	
17	楕 円 形	N 89° W		150×115	
18	隅丸長方形	N 89° W		115× 75	
19	小 判 形	N 67° W		130× 70	
20	隅丸長方形	N 110° W		127× 55	
B			地		区
1	小 判 形	N 1° W	南	147× 77	ベニガラ
2	小 判 形	N 77° W	西	193× 63	ベニガラ
3	隅丸長方形	N 90° W		145× 65	
4	小 判 形	N 88° W	西	180× 73	ベニガラ・土器
5	小 判 形	N 108° W	南西	120× 71	ベニガラ
6	小 判 形	N 60° W		140× 70	小玉４個
7	小 判 形	N 100° W		195× 80	
8	小 判 形	N 54° W	西	180× 80	ベニガラ
9	小 判 形	N 51° W		147× 78	
10	小 判 形	N 65° W		160× 80	
11	小 判 形	N 87° W		140× 70	
12	隅丸長方形	N 76° W		165× 82	
13	楕 円 形	N 82° W		115× 68	
14	小 判 形	N 70° W		140× 67	
15	楕 円 形	N 151° W		112× 68	
16	隅 丸 方 形	N 168° W		80× 55	
17	隅丸長方形	N 70° W		128× 47	
18	小 判 形	N 165° W		150× 73	
19	隅丸長方形	N 89° W		160× 70	
20	小 判 形	N 97° W		146× 72	
21	小 判 形	N 80° W	西	155× 80	ベニガラ
22	隅丸長方形	N 118° W		145× 76	
23	隅丸長方形	N 93° W		168× 82	
24	隅丸長方形	N 80° W	西	178× 83	ベニガラ・土器
25	小 判 形	N 70° W		130× 55	
26	楕 円 形	N 112° W	西	170×117	ベニガラ

土 坑 墓 一 覧 表（2）

土坑墓番号	形 態	長軸方向	頭位	坑口部(cm)	備 考
27	小 判 形	N 20° W		140× 70	
28	隅 丸 方 形	N 118° W		95× 67	
29	小 判 形	N 85° W		97× 38	
30	隅丸長方形	N 75° W		136× 78	小玉１個
31	隅丸長方形	N 92° W		140× 70	
32	隅丸長方形	N 97° W	西	155× 92	ベニガラ・土器
33	小 判 形	N 54° W		185× 82	
34	小 判 形	N 6° W		125× 63	
35	小 判 形	N 67° W	北西	147× 63	ベニガラ
36	小 判 形	N 92° W	西	130× 76	ベニガラ
37	小 判 形	N 150° W			
38	小 判 形	N 59° W		140× 72	小玉１個
39	小 判 形	N 60° W	北西	160× 75	ベニガラ・炭化物
40	楕 円 形	N 37° W		85× 65	
41	小 判 形	N 89° W		120× 65	石鏃１個
42	小 判 形	N 123° W		127× 65	
43	変 形	N 72° W		160×130	
44	小 判 形	N 73° W		180× 75	
45	楕 円 形	N 58° W		140× 80	勾玉１個・玉１個
46	楕 円 形	N 159° W		160× 85	
47	小 判 形	N 88° W		130× 70	
48	小 判 形	N 75° W		177× 93	土器
49	小 判 形	N 179° W		140× 70	
50	変 形	N 38° W		170× 80	
51	隅 丸 方 形	N 79° W		195×150	
52	小 判 形	N 74° W	西	145× 77	ベニガラ
53	小 判 形	N 83° W		195× 80	
54	楕 円 形	N 73° W		110× 73	
55	小 判 形	N 42° W		107× 70	
56	小 判 形	N 49° W		143× 75	
57	楕 円 形	N 45° W		120× 65	
58	隅丸長方形	N 79° W		160× 80	勾玉１個・小玉１個
59	小 判 形	N 99° W		185× 78	
60	小 判 形	N 36° W		130× 80	
61	小 判 形	N 175° W		100× 65	
62	楕 円 形	N 57° W	北西	105× 75	ベニガラ
63	隅丸長方形	N 71° W		113× 65	
64	不 明	N 0° W		120× 65	炭化物
65	小 判 形	N 93° W		130× 70	
66	楕 円 形	N 79° W		120× 70	
67	小 判 形	N 73° W	西	130× 55	ベニガラ・小玉３個
68	小 判 形	N 58° W		170× 70	
69	隅丸長方形	N 39° W		125× 82	ベニガラ
70	楕 円 形	N 175° W	北	147× 68	ベニガラ
71	隅丸長方形	N 66° W		125× 52	
72	楕 円 形	N 63° W		120× 67	
73	小 判 形	N 0° W	北	125× 80	ベニガラ・玉１個・小玉１個
74	小 判 形	N 70° W		165× 85	

参　考　文　献

大和久震平「柏子所貝塚」昭和41年　秋田県文化財調査報告書　第８集　秋田県教育委員会
能代市教育委員会

八幡一郎　「新版考古学講座　第３巻」昭和44年　雄山閣

菅原俊行　「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」昭和48年　秋田市教育委員会

村越、市川、三宅、鈴木　「亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書」昭和49年　青森県埋蔵文化財調査報告書　第14集　青森県教育委員会

野村　崇　「札苅遺跡」昭和49年　木古内町教育委員会

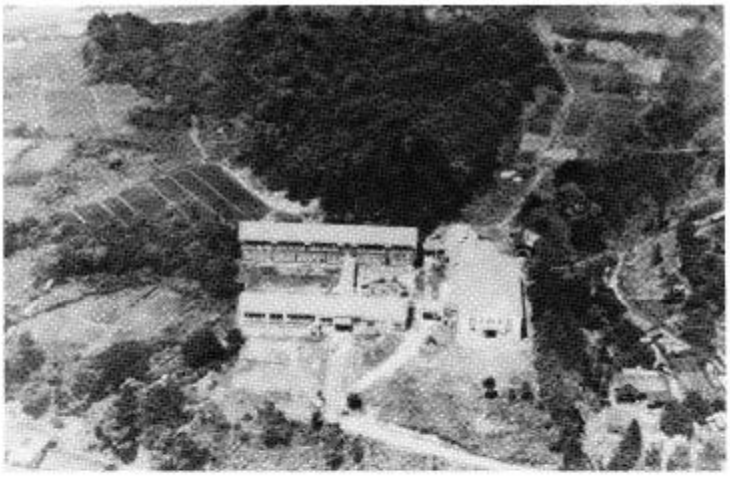
野村　崇　「札苅」昭和51年　北海道開拓記念館

杉山、成田、三浦「源常平遺跡」昭和53年　青森県埋蔵文化財調査報告書　第39集　青森県教育委員会

富樫、畠山、大友「湯出野遺跡」昭和53年　秋田県文化財調査報告書　第53集　秋田県教育委員会

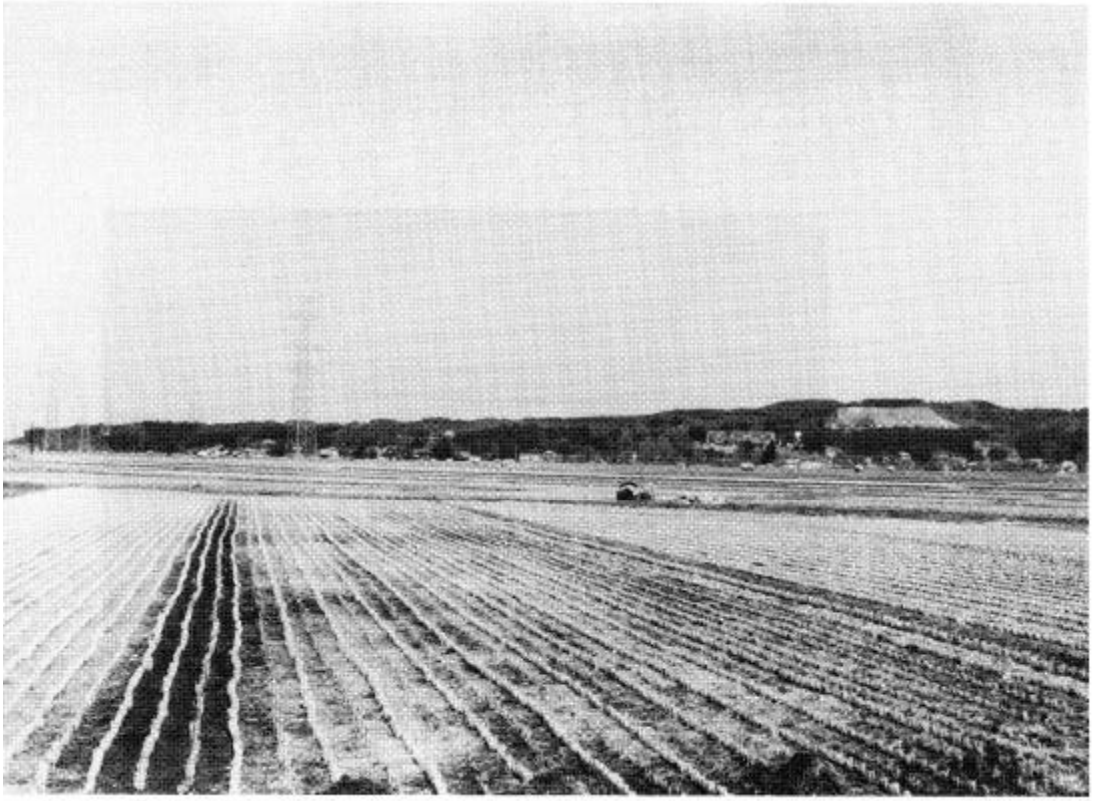
畠山、橋本　「梨ノ木塚」昭和54年　秋田県文化財調査報告書　第63集　秋田県教育委員会

A 地区図版



昭和30年頃　上新城中学校遺跡航空写真

図版 1　昭和54年　上新城中学校遺跡航空写真



図版 2　上、上新城中学校遺跡遠景
下、上新城中学校遺跡地層